作曲少女

平凡な私が14日間で曲を作れるようになった話

仰木日向
まつだひかり

CamScannerでスキャン

○プロローグ

「ダメだ……全然わかんない……」

1週間前に意気揚々とリサイクルショップで買ってきた1万円のキーボードと、その隣に積み上げられたたくさんの作曲の本。私は、心の奥からこみ上げる〝やってしまった感〟を覚えながら、必死に「いや、そんなことはない！」と思い込もうとしていた。

見た目は普通、頭脳も普通、それが私、山波いろは。16歳の高校2年生。私は今、人生に物足りなさを感じている。何となく受験して何となく高校に入って、何となく、何となくで今まで生きてきたけど……このままじゃ——何かが足りてない。そう、なんかこう、漫画とかドラマとかで起こるような、そういう青春っていうか、感動っていうか……人生の中でひとつ大きな軸になるみたいな……そういう夢中になれるものが足りてない。

クラスの友達とかは、オシャレに本気を出していかにもなギャルになってみたりして女子高生を謳歌してる子もいるけど、私はそういう派手なのはちょっと苦手だし、別に

CamScannerでスキャン

髪を染めるわけでもなく、制服を着崩すわけでもなく、生徒指導オールクリアなごく平凡なミディアムストレートの髪型をしつつ鞄には流行りのキーホルダーをつけたりしている。我ながらなんとも模範的な普通女子高生をやっている。成績が良いわけでもないし、スポーツに打ち込んでるわけでもない。部活は帰宅部。『平凡』を辞書で調べたら私の写真が載ってるんじゃないかってくらいとにかく普通のアベレージのど真ん中が私だった。

でも、私だって何かしたい。自分だけの特別な何か。そんなことを普段から思ってる私は、何を思ったのか作曲をやろうとしている。……いるんだけど。

「……作曲なめてた。これ無理なやつだ……」

改めて、部屋の真ん中にあるものを見つめて私は途方に暮れる。座卓に乗っているのは1万円のキーボード（中古）と、1冊それぞれ２０００円以上する作曲の本が5冊。しめて約2万３０００円也。カッコつけて買ってみたいかにも難しそうな本格的っぽい理論の本は何に使うのか全然わからない図とか式とかが満載で完全にチンプンカンプンだし、『サルでもわかる作曲の本』みたいな初心者向けっぽい本は、つまり私の頭はサル

以下っていうことを証明するだけの本になってしまった。
……なけなしのお小遣いを使って本と鍵盤を揃えたのに、結局何から始めればいいのかすらわからない……。ああ……っていうか何で音楽の本ってこんなに高いの？　もう合計で2万3000円も使っちゃったんだよ？　2万3000円だよ⁉　どうするのこれ……。やるからには覚悟を決めて！　とか思って冒険してみたけど、ちょっと見切り発車だった。どうしよう……。2万3000円……。はぁ……なんだか悲しくなってきた……。
「……いや！　まだ！　まだ諦めない！　っていうかもうあとには引けない！」
うん、こうなったらトコトンだ。私の大切なお小遣いを無駄になんてさせない！
「……そうだ。もしかしたら、あの子なら……！」
私の頭にふと、あるクラスメイトのことがよぎる。あの子ならもしかして、このピンチを救ってくれるかもしれない。
超高校級天才作曲家の、あの子なら！

目次

プロローグ……3

1日目 珠ちゃんと私……9
コラム 作曲に必要な道具……33

2日目 それでも気になる理論の話……35

3日目 音楽と映画は結構似てるっていう話……51
珠美のひと言 あたしはこれを使っている……72

4日目 耳コピの話……73
コラム 作曲に必要なPCソフト……98

5日目 越えられない壁の話……99

6日目 続く人と、続かない人の話・前編……107
続く人と、続かない人の話・後編……129
珠美のひと言 快適な耳コピのために……139

7日目 最初の壁を越える話……141
コラム 作曲ソフトの操作……156

CamScannerでスキャン

8日目 耳コピ最大の難関の話 157
9日目 キーの話 175
コラム—キーごとの基本的なコード 198
10日目 メロディラインと構成の話 199
11日目 〝珠ちゃんビックリ大作戦〟の話 215
珠美のひと言—天才女子高生の参考文献 227
12日目 テクスチャーの話 229
珠美のひと言—テクスチャーって要するにこんな感じ 249
13日目 作曲合宿の話・前編 251
14日目 作曲合宿の話・後編 305
エピローグ 324
刊行に寄せて（服部克久） 330
あとがき 333

1日目

珠ちゃんと私

さて、そんな昨日を経て、今日は12月22日、終業式。2年2組の教室ではみんながストーブを囲みつつ、ワイワイガヤガヤと冬休みどこに遊びに行くかみたいな話で持ち切りだった。

でも私の視線は、そのストーブを囲む人だかりには向いていない。見ているのは教室の一角、窓際の席でポツンとひとり、突っ伏して寝ている子。"話しかけるな"っていう意思表示みたいなゴツいヘッドホンが印象的な、近寄りがたい雰囲気がある、例の子。

この子の名前は黒白珠美。みんなからは珠ちゃんって呼ばれてる。この子について語るなら、まず忘れてはいけないのはこの文句——「容姿端麗頭脳明晰、奇想天外天下無敵、超高校級現役女子高生天才作曲家・黒白珠美」。そう、この子は、現役にしてすでにプロとして作曲家をやっている超人的な女子高生だった。作曲がすごいのはもちろんだけど、ひとたび口を開くと理路整然と何でも切って捨てるような歯に衣着せぬ物言いで、性格はかなり極端。オブラートに包むっていう概念を持っていないらしく、それがもとで珠ちゃんのことを苦手とか、近寄りがたいとか思ってる子も少なくない。

近寄りがたいっていっても別に不良っぽいとかじゃなくて、見た目だけで言うと栗色ロングのゆるいウェーブ髪に、ちょっと眠そうな目とキリッとした眉。退屈そうにアク

CamScannerでスキャン

ビをしているのがいつものイメージ。ただちょっとおかしいのは、ヘッドホンをしてる時以外は大体、舞浜のテーマパークで売ってるようなぬいぐるみ帽子をかぶっている（外でも教室でも！）。

そして私は、少しだけ緊張しつつ、このちょっとエキセントリックなクラスメイトに接近する……。

「あの、珠ちゃん……？」

「…………」

天才女子高生・珠ちゃんは、机に突っ伏したままで顔も上げてくれない。ヘッドホンしてるし、音楽とか聴いてるのかな……？　音漏れはしてない感じだけど……。

そうだ、と思い、私はポケットに入ってたカイロを珠ちゃんの手の上に置いてみた。

「うおっ!?」

「わぁ!?」

「……熱い!?　いやそれほどでもない!?　え？　ああ、なんだカイロか……」

「あ、珠ちゃん……そこ寒くない……？」

「ん？　山波さん？　あ〜。寒いけど……何で？」

CamScannerでスキャン

「そのカイロ、よかったらあげるね。あったかいよ」
「え……ああ。ありがと」
珠ちゃんはちょっとキョトンとしてる。でも良かった、思ったより怖くない。私は、今だ！とばかりに、珠ちゃんの前の席に座った。
「え……何？　なんか用？」
「私、山波いろはっていうんだけど……」
「知ってるよ。クラスメイトだし」
「あ……だよね……」
「……で、何？」
「あの……もしよければなんだけど……私に作曲を教えてくれないかな……？」
「……」
珠ちゃんは驚いた顔をしてから、ちょっと怪訝（けげん）な顔をする。
「……何で？」
「え、何で……っていうと……その」
言われてみればたしかに……何で？って話かも……。
「その……私……自分で作曲やってみようと思ったんだけど難しくて……珠ちゃん作曲

すごいって聞いてるし……えっと……」
あ、やばい。よく考えたらこれ、珠ちゃんに何のメリットもない。どうしよ。何で？って、ホントにそうだよね……。
「えっと……」
黙って、ジッと私の顔をまばたきひとつせず見つめる珠ちゃん。こんなに目を見られることってあんまりないいんじゃないかってくらい直視されてる。なんだかまるで心を読まれてるみたいで、ちょっと怖い……。
「もしかしたら教えてくれるかなって思って……あ、でも、忙しいよね！　ハハ……」

黙ってた珠ちゃんは、少し重い口調で言う。

「……おおむね、相談に乗ってほしいって人が求めてるのは『意見』じゃなくて『肯定』だし、アドバイスが欲しいって言ってる人が求めてるのは『責任転嫁（てんか）できそうな相手』だ。本当に答えや助言を欲しいと思ってる人なんて、ほとんどいない」
「え……？」
「…………」

CamScannerでスキャン

「……え、えっと……ハ……ハハ……」
これが天才女子高生、珠ちゃん。人生何週目なのって感じの悟ったひと言は、私の心の中に少なからずあった後ろめたい何かを睨みつけるように響いた。
「………」
だ……ダメだ。プレッシャーがすごい……やっぱりやめとこう……。
「ごめんね！　やっぱりこういうの迷惑だよね……なんでもない！　ご、ごめんね！」
私は足早に、今のことをなかったことにするかのように身をひるがえして立ち去ろうとする。その時。
「待て、待てってて！　そ、そうじゃなくて……」
ふいに私の手を握って、少し慌てた様子で珠ちゃんが言う。
「え……何？」
「め、迷惑とは言ってない……だろ」
「え……？」
「……ォ……教えるヨ？　……作曲」
これが、私と珠ちゃんの、14日間の始まりだった。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「へぇ〜これが珠ちゃんの部屋……ええっ⁉　何これすごい！　スタジオ⁉」

終業式が終わって、その帰り。私たちはその足で珠ちゃんの自宅に向かった。そして足を踏み入れた珠ちゃんの部屋は……ちょっと普通じゃない空間だった。

「うわぁ……何なのこの機械……全然わかんないけどカッコいい……」

なんかこういうの、テレビとかで見たことある。ミュージシャンのインタビューとかで映ってるあのよくわかんないカッコいい空間。変な機械とか宇宙船みたいないろいろ光ってる感じのやつがいっぱいあるあの感じ。珠ちゃんの部屋は、その感じをもう少しコンパクトにしたみたいな、そういう部屋だった。ほかにも、飛行機の模型とか怪獣のフィギュアとか漫画とか、オモチャみたいなものが山ほど飾ってある。そしてその中心には、大きなスピーカーにパソコンに、鍵盤。

「オレンジジュースしかないけど……」

「いや、おかまいなく！」

珠ちゃんは、私がヘェーはぉーとキョロキョロしてる間に、お盆に入れてオレンジジュースを持ってきてくれた。ちょっと怖い印象だったけど、実はそうでもないかも……？

「何見てんの？」

「え、あぁっ、ご、ごめん」

「いや、謝らなくていいけど……何見てるのかなって」

「珠ちゃんの部屋、プロのミュージシャンって感じだね！　よくわかんないけどカッコいい機材とかいっぱい！」

「山波さんは──」

「あ、いろはでいいよ！」

「……あ、そう。じゃあ、いろははさ、普段どんな音楽聴くんだ？」

「えっ？　えーっと……そうだなぁ」

なんか珠ちゃん、声がちょっとウキウキしてる……？

「あ、あたしはさ、えっと……最近好きなのはな、ジャコ・パストリアスで……このアルバム知ってるか!?　すごいんだぞ！　ベースの概念が変わるぞ！」

「う、え……え!?」

CamScannerでスキャン

やばい、なんか始まっちゃった！

「これがジャコの最初のアルバムなんだけど、この1曲目を聴いたジョー・ザビヌルがさ、ジャコに電話で言ったひと言がこうなんだよ『素晴らしいウッドベースだ、ところで君はエレキベースは弾けるのかい？』。そしてジャコはこう言ったんだ。『そのデモテープがエレキベースだ』ってね！　それまでの常識で考えたら、ジャコのベースはそれくらい斬新で革命的だったんだよ！　実際今聴いてもこれはやばい！」

あー……どうしよ……。何言ってるのか全然わかんない……。

「あの、珠ちゃん……」

「ん⁉」

「あ、あのね……その……ガッカリされるかもしれないんだけど……私、音楽やったこと全然なくて……その、そんなに詳しいわけじゃないんだ……ごめん」

「え、あ、えっと……そうか。うん！　じゃあこれは今度にしよう！」

あ、意外とあっさりしてる。良かった。

「そうか、そういえばそうだったな。忘れてた。さっき帰り道でざっと聞いた感じだと、やまな……いろはは音楽は初めてなんだよな、ごめんごめん、気にしないでくれ。たしか、

やりたいことが見つからなくて何となく気まぐれに作曲をやろうとしてみたけど、形から入って大金使っちゃって結局どうすればいいのかわからなくなって途方に暮れて最終的に人に頼ってどうにかすることにしたとか、たしかそんな感じだったよな！」

ぐぉ……えっと……。

「そ、その通りです……」

「ん？　何で暗くなってるんだ？」

「いや、我ながら他力本願だなと思って……」

「何を言ってるんだ。わからないことは聞けばいいんだ。正直に自分の無知を認めて助けを求めれば、ほとんどの場合は熱心に教えてくれる人が現れる。どんな名曲を書く作曲家も、最初は初心者だったからな」

「……あ……うん」

珠ちゃん、さてはちょっと天然なのかな……。否定されてるのか肯定されてるのかわかりづらい……。

「でも作曲かぁ。教えるのは別にいいんだけど、作曲って大変だぞ？」

「うん。それはもう何となく……」

CamScannerでスキャン

「おどかすわけじゃないけどさ、作曲ってほかの創作と比べて敷居高めなんだよ。絵とかだとさ、下手でも下手なりに1枚描き上げるってのわりとできるけど、作曲ってその最初の1枚を書き上げるまでが大変なんだ。本屋とか行ったら『誰でも作曲はできる！』とか『サルでもわかる作曲』みたいな本いっぱいあるけど、あんなの嘘だよ。作曲は明らかに、特殊技術だ」
「それ！　私その本買った！　あんなの嘘だよね！」
「ああ、買ったんだ。全然わかんなかっただろ？」
「うん。なんか、いろんな用語とか全部知ってるのが前提っていうか……これ絶対サル知らないでしょってことも普通にいっぱいあるし……あ、それはいいんだけど。小さい楽譜みたいなのとか書いてあるんだけど、それがどういう音なのかとか、そもそも何の話をしてるのかとか、どういう時に使う知識なのかとか、全然わからなくて……」
「だろうな。普通作曲を始めるという場合において必要なのは、楽器経験だ。ギターでもピアノでもトランペットでも、何でもいいからとにかく1種類は楽器ができるっていうのが、まず導入で大事な部分だろうな」
「そうだよね……」
「その前提条件を満たしていない完全初心者のいろはが作曲をするっていうのは、現実

的に考えてかなり厳しい」
「うん……」
「でも大丈夫だ。あたしに考えがある」
「え？」
そう言うと、珠ちゃんは本棚にある本を一束掴んで、ドサッと机の上に置いた。本のタイトルは……『楽典』に……『コードワーク』……『ジャズ・セオリー』……？　あ、私が買った本も何冊かある。
「ここに、世にあるさまざまな音楽理論書がある」
「うん。なんか良さそうだね～！　そっか、本選びの時点ですでに違うんだ……」
「『楽典』。音楽の基本ルールがわかる本だ。好みや作風とは関係ない常識の本。『コードワーク』は、おおむねのテクニックが載ってる本。そして『ジャズ・セオリー』は、即興音楽のアプローチからスケールやモード、サークル・オブ・フィフスなんかを完全理解するための音楽全図みたいな本だ。印象的なメロディとは何なのかって話にも触れてる。これらは、あたしが音楽の作り方を理解する上で一番参考になった本だ。ハッキリ言って素晴らしい」

CamScannerでスキャン

「そうなんだ。私、買う本からすでに間違ってたのかな……」
「いいや違う。そういうことじゃないんだ、あたしが言いたいのはそういうことじゃない」
「え、うん……」
珠ちゃんはちょっと黙って頭の中でいろいろ言葉を考えているようだった。そして、少しの沈黙のあと、こう言った。
「あたしがこの本に書いてあることを理解したのは、曲を書けるようになってからだったんだ」
「……え？」
ん？　どういうこと？
「あ、えっと、だからね、あたしは、この本を読んだから作曲ができるようになったわけじゃなくて、作曲ができるようになってから、この本に書いてあることの意味がわかったんだよ」
「え……ちょっと待って、それって順番メチャクチャじゃない？」
「そう、メチャクチャなんだ。そしてこれは、別にあたしに限った話でもない。ほとんどの人はそうだと思う。理論書を読んだことによって曲を書けるようになったなんて例は、むしろ珍しいほうだろう」

「……えっと……」
どういうこと？　なんかさっそくメチャクチャな気が……。
「端的に言おう。作曲を身に付けるために必要なのは、理論書ではない。何にもわかってなくていいから『何がなんでもとにかく1曲作る』。これなんだ」
「そうなの？」
「そうなんだ。だから、この本も、いろはが買った本も、使うのは曲が作れるようになってからだ」
「……うん」

言ってることの意味は、ほんのちょっとだけわかる気がする。これは完全に知識ゼロの意見だけど、あの本を読んだからって曲が作れるようになるっていう予感はまったくしなかったし、珠ちゃんの言うことの方が妙に納得がいく気がした。
「じゃあ……この本って何のためにあるの？」
「うん。これらの本はすべて名著だ。値段も高いがそれ以上の価値を十分すぎるくらい持っている。でも、これらの本は作曲をできるようにするための本じゃない。作曲でき

る人が『頭の中で理論を整理する』ための本なんだよ。中上級者向けのものだけじゃない、初心者向けのものすらそうだ。作曲っていうのはね、作ってから理論を覚えるものなんだよ」

「……そ、そうなんだ……」

言ってる意味自体はわかる。けど、やっぱりまだ実感があるわけではもちろんない。

「でも珠ちゃん、だったら、私みたいな初心者はどうすれば……」

「曲を作ればいい」

「……う～ん……」

それができないから本を買ったんだけど……。

「それができないから本を買ったんだよな」

「あっ……うん」

ビックリした。心を読まれたのかと思った。

「一応改めて聞くけど、いろはは、真剣に、作曲ができるようになりたいのか？」

「うん、もちろん」

珠ちゃんは私を見つめて、ジッと黙る。そして、ゆっくりと口を開いた。

「14日だな」
「……14日？」
「ああ。あたしの計算が正しければ、いろはは14日後に自分の意志で自分の思う曲を作れるようになる」
「ホントに!?」
「ああ。たぶんね」
「14日って……作曲ってそんなにすぐできるようになるものなの？」
「むしろ、時間をかければできるようになるっていうわけでもない。あたしはそういう“なんか頑張ってる風の努力”が好きじゃないしね。だから必要なことを必要なだけ、無駄なく教えていく。多少耳の訓練もあると言えばあるけど、最小限の知識ならそれくらい短縮できると思うんだ。これはあたしにとってもちょっとした挑戦なんだけど、やってみるか？」
「うん！」
「それなりに大変だぞ？」
「それは覚悟の上だから大丈夫！」

「そうか。だったらやろう。ちなみに、もうわかってるだろうがこれらの素晴らしい理論書は一切使わない。あたしのやり方で行く」
「1冊も使わないの……？」
「言っただろ、これは、作曲ができるようになってからじゃないと役に立たないんだ。だからあたしはいろはに『音楽理論を一切使わず曲を作る方法』を教える」
「そんなことって可能なの……？」
「どうだろうな。できるはずなんだ。だってあたし、この本に書いてあること何も知らなかったのに、曲書いてたからな」
「え、えーっと、うん。わかんないし珠ちゃんに任せるよ！」
「よし、じゃあさっそく始めようか」
「うん！　よろしくお願いします！」
「じゃあまずは、買い物に行くぞ」
「え、買い物？」
「そうだ、買い物だ」
あ、そうか。必要な教材とかあるんだよねたぶん。
「楽器か何か買うの……？　私、もうあんまりお金ないんだけど……」

「ん？　違う違う。鍵盤持ってるならそれで十分だ。買いに行くのは、音楽とは関係ないものだよ」
「え……？」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「珠ちゃん、これホントに必要な買い物なの……？」
私は、珠ちゃんに連れられて電車を乗り継ぎ、いろんなところで好きなものを買った。好きなものって、もうホントに音楽と全然関係ない、ホントにただの好きなもの。好きなキャラのぬいぐるみとか、グッズ。しめて1万円也。けどこれはまぁ、ただの好きなものだし別に痛い出費って感じでもないけど……。
「おう。もちろんだ。これがとても大事なんだよ。これが一番大事って言っても大袈裟じゃないかもしれない」
「そ、そうなの……？」
その足で、私と珠ちゃんは私の家に帰る。手にはさっき買った好きなもののグッズ。本当にまったく音楽に関係ないんだけど、これをどうするんだろう……。

CamScannerでスキャン

「よし、いろは、今買ってきたのと、あといろはの部屋の押し入れとかに入ってるものも使って、制作机を作るぞ」
「え？」
いや、机ならもうあるけど……キーボードを載せてる座卓……。
「机って、座卓じゃダメなの？」
「座卓がダメってわけでもないけど、イマイチだな。こっちの勉強机にしよう」
そう言いながら珠ちゃんは、勉強机に乗ってる教科書やいろんなものをどんどん座卓に移してカラッポにしていく。そして何もなくなった勉強机にキーボードをドンと置いて、言った。
「さぁいろは、この制作机を〝お前の好きなもので埋め尽くす〟んだ。できれば壁も、足下も、目いっぱいだ。ポスター貼ったり人形置いたり、これでもかってくらい好きなものだらけにしてしまえ！」
……？？？
「あの、珠ちゃん、これ本当に、音楽に関係あるの……？」
「何度も言わせるな。大アリだ。一番大事なことかもしれないって言ってるだろ」
「えっと、机の上を好きなものでいっぱいにするのが……？」

「ああ。とても大事なんだよ」
「真面目に？」
「真面目に」
ここまで黙ってとりあえず言う通りにしてみたけど、ちょっと半信半疑になってきた。
机の上を好きなものでいっぱいにして、それで音楽が作れるようになるとは思わない。
さすがに私でもそれくらいわかる。でも、ほかでもないあの天才女子高生作曲家の珠ちゃんが言うんだし……どうなんだろう。
「腑に落ちないって顔してるな。じゃあこれの大事さについてまずは言っておこう」
珠ちゃんはいろんなグッズを制作机に並べながら、この意味を説明し始めた。

「作曲するっていうけどさ、じゃあ作曲って何？って話なんだ。技術的な部分はとりあえず置いといてね。たぶんいろはが今考えてる作曲っていうものは、メロディを考えて歌やBGMを作る、ただ漠然とそういうことなんだと思う。けど、違うんだ。作曲ってそうじゃないんだよ。作曲はね、『今まで自分が感動してきた体験や記憶、空間や時間を、自分なりの形で音楽として再現する』っていうことなんだ」
そう言いながら、珠ちゃんはぬいぐるみの頭に帽子を乗せたりコップを乗せたりして

遊んでいる。そして、ふいに真剣な目で言う。
「……制作机は聖域だ。自分が感動してきたものを再現する工房、それが制作机。その周りには、今まで自分が感動してきたあらゆるものを置く。あたしの場合だったら、好きな画集、小さい頃から大事にしてるキツネのぬいぐるみ、アニメやゲームのグッズ、ずっと使ってる楽器、飛行機の模型、恐竜のフィギュア、夢中になって聴いたCDやレコードのジャケット、尊敬する人のポスター、そしてその真ん中に、鍵盤とパソコンや、音楽機材。その机に向かい合うたびに、あるいはたまにでも、思い出すようにする。『自分が何に感動してきて、これから何を作るのか』。これは音楽に限った話でもないけどね。漫画家もイラストレーターも、映画監督も小説家も、ほとんどの作家がやってることだったりする。だからね、いろはがこれから始めるのは、〝そういうこと〟だってことをまずはしっかり感じて、覚えておいてほしいんだ」
………。
なるほど。ビックリした。ホントに意味あったんだこれ。なんか適当なこと言われてからかわれてるのかと思った……。
「な、なんだかいきなりすごくクリエイターっぽい話だね……！」
「ぽいじゃなくて、作るからにはクリエイターだ。で、グッズを並べるだけじゃダメだ

CamScannerでスキャン

ぞいろは。繰り返すけど、作曲を始める前にやることは『自分が何に感動してきたか』そして『何を再現していきたいか』を真剣に考えるってことだ。これをやらないで作曲を始めて、『何も作りたいものがない』とか言い出す人が結構いるけど、音符をただいじってるだけで自分が感動してきたものなんか思い出せるわけがない。だから、まずは思い出すんだ。何に感動してきたのか、できるだけ集中して、具体的に。そうやって思い描いたものこそが、いろはの作りたいものだよ」

……すごい。なんなの珠ちゃん。さっきまですごい適当な子だったのに。さすが天才女子高生……。一体どういう生き方をしたらこんな女子高生になるんだろう……。

「さぁて、じゃあ あとは、この制作机をたっぷりとデコレーションしてくれ。作曲の具体的なやり方についてはまた明日だ」

「うん。やってみるね」

＊～＊～＊～＊～＊～＊

珠ちゃんが帰ったあと、私は言われた通り、どころかちょっとやりすぎなくらい、自分の机を好きなものでいっぱいにしてみた。そしたら、なんだか変な気分。私ってこう

いうの好きだったんだって、なんか改めて感じてる。このぬいぐるみも、この本も、このキャラクターも、このCDも、このイラストも、全部前から好きだけど、並べてみるとなんだか、自分の頭の中を見てるみたい。

そしてその中心にドンと構えている、中古のキーボード。

「……珠ちゃん、何で私に作曲教えてくれるんだろう……？」

クラスイチの天才女子高生、珠ちゃん。たった14日で私に作曲を教え切ると言ったあの子の最初のレッスンは、なんだか曖昧で、でも逆に確かな感じもした。ひとつわからないのは、どうして珠ちゃんは私に作曲を教えてくれる気になったのか……。自分で頼んでおいてあれなんだけど……。

「……また珠ちゃんに聞いてみればいっか。うん」

時刻は夜9時。明日から、高校2年の冬休みが始まる。窓を明けると冷たい風が入り込み、なんだかちょっと興奮気味だった私の頬を冷やす。もしかしたら、何かドキドキすることが起きるような、そんな予感がしている。ほんの少し。

とりあえず今日はここまで。おやすみなさい！

CamScannerでスキャン

コラム

作曲に必要な道具

PC で作曲（DTM）を始めるために必要なアイテムを紹介！

1 PC

ノート型とデスクトップ型のどちらでも大丈夫ですが、画面が大きい方が作曲はしやすいはずです。OS は、「Windows」と「Mac」どちらでも大丈夫ですが、使うソフトが変わります。

2 MIDI キーボード（PC につなげるキーボード）

PC につないで使う鍵盤です。MIDI キーボードのほとんどは、作曲用のソフト「DAW」（P.98 参照）や演奏用のソフトがついてきますので、それを使って演奏したり、演奏を録音したりすることができます。

鍵盤数は多いに越したことはないですが、机の上に乗るくらいのものを選ぶと使いやすいでしょう。

あると便利！

○ヘッドホン／スピーカー
PC のスピーカーからは、あまり良い音が出ないので、ヘッドホンを買うか、大きな音を出せるなら市販のスピーカーを使うのがオススメ！

○オーディオインターフェース
PC に、スピーカーやギターなどの楽器をつなぐために必要です。

CamScannerでスキャン

たしかに凄そうだけど

どどどどうしよう
妹ちゃん…
私…絶対音感持ってないから音楽の才能ないんだって…
は？
誰に言われたんだよ
ネットで
ネットか
絶対音感とか「あれば便利」って程度のものだよ
あたしも持ってないし
アーなんだー
でもなぁ…
でも？
だってほら…
かっこいいじゃない!?
それだけ

2日目

それでも気になる理論の話

CamScannerでスキャン

「……はぁ……やっぱり無理かも」

朝。昨日のワクワク感はどこへやら、私はさっそくブルーになっていた。

憂鬱の原因は昨日の夜のこと。珠ちゃんの言う通りに制作机を作って、なんだか私もすごく良い曲を作れるような気がしてきて、それで、なんていうかな、ちょっと勢い余ったっていうか。先にいろいろ勉強しておいて珠ちゃんをアッと言わせようかと思って、そう、良かれと思ってネットサーフィンして作曲の仕方みたいなページをいろいろ見ていたんだけど。……その途中で心が折れかけた。

何に折れかけたかっていうと、いわゆる音楽理論っていうやつ。っていうやつ、とか言ってみたけど、それがつまりどういうことなのかもあんまりわかってない私。わからないけどわからないなりにちょっと頑張って調べてみた結果、さらにわけがわからなくなってしまった。それにしても、それにしてもだよ、とにかく……とにかくね……。

「何でみんな、こんなに言ってることバラバラなの……？」

いろんな作曲支援サイトやまとめサイト、初心者用のところとか、見てみたし、あとSNSとかで作曲に詳しい人同士の会話とかも見てたけど、音楽理論の話ってホントに統

CamScannerでスキャン

一感がない。いや、これってみんな言ってることは同じなのかな？　いや、そうでもない気がする。音楽理論がつまり何なのかも曖昧だけど、『理論は絶対にいる』とか『理論なんていらない』とか、『理論を中途半端に覚えると逆に作れなくなる』とか……。
知恵熱が出そうになった私は、そのあととりあえず猫のおもしろ動画を見て寝た。っていうのが昨夜のこと……。作曲するってことは、この音楽理論っていうのを理解するってことなんだよね。そう思うと、なんか急に気が重くなってきてる……。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「――っていうことなんだけど珠ちゃん……」

そんなわけで私は、今日も珠ちゃんの家に来ている。珠ちゃんなら、私のこのアンニュイな気持ちをどうにかしてくれるかもしれない。
「っていうことなのか。んー、昨日も言ったけど、理論はあとからわかるんだよ。今は別に気にしなくて平気だ」
「……でも、理論ってなんか大事そうだし、ちょっと不安っていうか……ホントに理論

のことわからなくて平気なの……？」

「だから……まぁ、何回言っても不安なものは不安なんだろうな。神経質だなぁ」

「普通不安だよ！　珠ちゃんみたいに最初からできる人の方が珍しいんだと思うよ……」

「いや、そうでもないよ。あたしだって最初は何もわかってなかったんだから」

「え？　そうなの？」

「そりゃそうだろ。あたしだって最初は初心者だし、メチャクチャなどうしようもない曲を書いてるよ。変な曲になるってわかっててもとにかく作る。作って作って作りまくる。そこに疑問なんてないし……というか、考えるよりまず先に作りたいんだ。それだけのことだよ」

「……ああやっぱり、珠ちゃんってちょっと変わってるね」

これだから天才は……。私たち凡人は、なぜかはわからないけどそれができないから、ああだこうだって道に迷うんだよ……。

「いや、別に普通だと思うぞ。言ってることはごくシンプルなつもりだし」

「うん、たしかにシンプルなんだけど……普通そんなにシンプルになれないっていうか……たとえばね、私みたいな人は考えちゃうんだよ。変になってもいいって思って作っ

でも、それを誰かに笑われたら恥ずかしいとか……」

「だったら人に聴かせなきゃいいじゃん」

「そうなんだけど……でも、作ってる途中で心が折れるっていうか……ああ私、なに変な曲作ってるんだろ、ダサいなぁ私、何もわかってないくせにって……思っちゃうっていうか……ヘタクソって自分でわかるのって、そのまま続けるのしんどいんだ……」

この感じ。たぶん珠ちゃんにはないんだろうなぁ。まぁ、完全に自爆なんだけど……。

「……なるほどなぁ～。そうかぁ」

ああ、わかってなさそうだなぁ……。

「えっと、だから私みたいな人はね、上手にできないから、理論とか調べてみたりするの。……結局わかんないからそれも無駄なんだけど……でも、そうやった方が上手にできる気がして……」

「う～んなるほど。そういう感じか……」

珠ちゃんは頭をポリポリ掻きながら、若干面倒くさそうに考えごとをしてる。

「触れなくていいとは言っても、気になるなら先にハッキリさせといた方がいいんだろうな。わかった、じゃあ、音楽理論ってのがつまりどういうもので、なぜ必要なのかっていう話をしておくよ」

「うん、お、お願いします……」
「音楽学習っていうのはもともとね、言語学習に近いんだ」
「言語学習？」
「Right. When we make a piece of music, it's just like "talking in different language". Something like this.」
「ええ!?　何!?　急に英語!?　あ、え、えっと……ハ〜イ、ナイストゥミーチュー……アイムイロハ……ヤマナミ……」
「喋れないだろ？」
「……そりゃそうだよ！　ビックリした〜。っていうか珠ちゃん、英語できるんだね……」
「現状のいろはにとって音楽はつまりこの状態だ。正確な意味はわからないけど、でも何となく言ってることはわかるくらいの、この感じ」
「え？　……あ、うん。なるほど……？」
「今までいろはいろんな音楽に感動してきたんだろうけど、その具体的な理由については実は曖昧だ。『なんか雰囲気で良いと感じた』みたいな。まぁたしかに最終的にはそ

CamScannerでスキャン

れが全部なんだけど、音楽を作るって場合は、その雰囲気を自在にコントロールする技術が必要になる」

「うん、そんな気がする」

「じゃあ具体的にそのコントロールする技術っていうのが何なのかというと、それは『音楽的な文法、音楽的な言葉、音楽的な会話の流れをコントロールできるようになる』ってことだったりするんだ。それはつまり、外国語を話せるようになるっていうのとかなり近い」

「……なんかカッコいいね！」

「世間には『音楽理論、要不要論戦争』みたいな言い争いがあるんだけどさ、その論争がなぜ起こるのかという理由についても実はこれで説明ができる。音楽が英会話だとして、たとえばカジュアルに日常会話をするだけなら文法についてうるさく言わなくてもいいし、逆にフォーマルな英語を話すなら文法もしっかりしてなきゃいけない。シチュエーション……つまりジャンルによって、理論の種類や大切さは違うんだよ。それでみんな、〝自分のジャンルの場合の常識〟で話すから、理論はいるとか、いらないとか、そういうズレ方をするんだ」

「な、なるほど……そういうことだったんだね……」

ところで珠ちゃん、何で英語喋れるんだろう。謎だなぁ……。天才だから……？

「音楽理論を数学みたいに捉える理論書や入門書は多いけど、あれは誤解を生みやすいと思うんだ。あたしが音楽で伝えたいのは数式によって計算された何かじゃなくて、『こういうことがあったんだ！』『聞いてくれよ、これって最高だよな！』『あたしの大好きなのはこれだ！』っていうことなんだよ。ある固定された式とかじゃない」
「なんか、理系っていうよりどっちかと言うと文系って感じなのかな」
「うん、そうだな。わざと理系的な考えで作るってパターンもなくはないけどね。おおむね、音楽は文系だと思うよ。図や数式で気持ちを伝えるのはかなり難しいからね。文系的な感性が、音楽には必要不可欠だ」
「良かった〜！　それならなんとかできそうかも」
「いろはは文系か？」
「えと、どちらかと言うとそうだと思う。得意ってわけじゃないけど」
「理系の人はもしかしたら、その図式的な音楽の作り方で考えた方が早いのかもしれないし、本屋で売ってる数式型の理論書でわかったりするのかもね。あたしは超文系型だから、その方法については正直いまいちピンとこないとこあるけど」

CamScannerでスキャン

音楽が理系か文系かなんて、考えたこともなかったなぁ。なるほど、でも、英会話みたいなものって考えたらちょっと気が楽になったかも……あ、いや、別に英会話できるわけじゃないんだけど。

「いろは、ちなみにだ。もちろん音楽と言語は完全に同じというわけじゃない。だったら、音楽と言語は何が違うんだと思う？」

「え？」

ふいに珠ちゃんが尋ねてくる。音楽と言語は何が違う……？　今似たようなものって話をしたばっかりなのに……？

「う〜ん……」

えっと……メロディがある、とか？　リズムがあるとか……あ、でも会話にもリズムってなくはないよね。ん——……。

「私にはちょっと難しいかも……」

「まぁ、まだわかんないよな。音楽がほかの言語と決定的に違うところはね、『どんな言葉も〝ハッキリは言わない〟』っていうところなんだ」

「ハッキリは言わない？」

「そう。ハッキリ言わない。音楽ってさ、かなり複雑な会話をできるわりに、でも実はハッ

キリ言葉を使って会話が成り立ってるわけじゃないんだ。音楽の会話はあくまで、雰囲気でしかないんだよ。パントマイムっていうか、ボディランゲージみたいな。これがほかの、音楽以外の諸言語には絶対に見られない特徴だ」

「う、うん……？」

えーっと……つまりどういうことだろ。ハッキリ言わない……？

「歌モノ……ええと、いわゆる歌詞のある歌のやつのことを歌モノっていうんだけど、それはとりあえず置いとこう。ここで言う音楽はBGMとかの話だ」

「うん」

「楽しいとかカッコいいとか、怖いとかかわいいとか、音楽はそれを表現するわけだけどさ、具体的に『こわいぞ～』とか『かわいいぞ～』って言葉でそう言ってるわけじゃなくて、雰囲気でそれを伝えてるんだよ。たとえば運動会の音楽とか、あれ流れてるだけでせわしない感じになったりするだろ？」

「あ、なるね。別に『急げ！』って言われてるわけでもないのに」

「音楽って言語は、ハッキリ言わない。でも間違いなく、かなり強くそう言ってる。そういう〝言質（げんち）の取れない言語〟なんだ。だからこそ、音楽はあらゆる文化で使われる。主人公が『愛してる』ってセリフを言ってる時に、ロマンチックな曲が流れるか、不穏

CamScannerでスキャン

な曲が流れるか。ほら、これだけで『愛してる』の意味がまったく変わる。ハッキリ言わないからこそ音楽って言語は便利だし、言葉じゃないからこそ映像演出で重宝される」

「そっかぁ……でもなんか、そう聞くと余計に、音楽ってとりとめがなくて難しいね……」

「難しく考えることはないよ。英会話と一緒だ。楽しく喋ってれば覚えられるよ。本なんか開かなくてもね」

~~*~*~*~*~*

「と、言いつつだ。実はあたしは『音楽理論は必要派』なんだ」

ちょっと一息つきながらお菓子を食べつつ、珠ちゃんがいう。

「そうなの？　さっきの感じだと、珠ちゃんってどちらかと言うととにかく喋って覚える英会話……みたいな雰囲気だったんだけど」

「うん。そうなんだけど、これはそのあとの話かな。音楽で日常会話ができるってのは、曲が作れるっていう最低限のラインの話だ。音楽という言語でおもしろいことを言うためには、〝上手に間違う方法〟を身に付けなきゃいけない。理論は〝間違うために〟覚え

るんだ」
「えっ」
また珠ちゃんがわからないこと言い出したけど、どうしよう。なんて言えば……。
「え、えーっと、それってどういう……？」
「さっきいろはは『間違ってるのを笑われたくない』って言ったよな」
「言ったけど……」
「いいかいろは、作曲に限らず、創作っていうのはまず恥をかくところがスタートラインなんだ。間違ってるものを作る、それを恐がらないことが、一番大事な第一歩だ」
「うん……そうかも……でも、やっぱり笑われるのはちょっとやだな……」
「じゃあ、笑われないのが嬉しいのか？」
「どちらかと言うと……」
何の話なんだろう。それが音楽理論とどう関係あるの……？
「いいか、これはよく覚えておいてくれ。何かを作って、人に見せた時に、一番もらってはいけないコメントは『普通』なんだ。これを言われるたびにあたしたちは悔しくなるし、反省するし、今に見てろと思ったりもする。理論的にひとつも間違ってない〝正しいもの〟を作れたとしても、おもしろいものじゃないなら意味がない」

「ありきたりなのじゃダメってこと？」

「ひらたく言うとそうだな。でも、じゃあ、ありきたりじゃないのを作るにはどうすればいいのかって話なんだ。これがさっき言った『理論は〝間違うために〟覚える』っていう部分に繋がる。今はあんまり意味がわからないだろうけど、これはものすごく大事なことなんだ。たとえばお笑いってあるだろ？　あれが何でおもしろいのかっていうと、ボケの人が『間違ってることを言うからおもしろい』んだ」

「えっと……なるほど？」

「じゃあひとつわかりやすく説明してみよう。今から〝おもしろいこと〟を言うぞ」

「えっ……」

「あたし最近ダイエットしてるんだけど、フライドポテトは野菜だし太らない！　ついでにダイエットコーラも飲んでるからもうバッチリだ！」

「えええ!?　それダメなやつだよ！　全然ダイエットになってないよ!?」

「そうだな。ツッコミどころ満載だ。さて、たとえばじゃあ今のセリフを〝正しく〟するとこうなる」

CamScannerでスキャン

こと、ほとんど解決したかも。音楽理論は英会話みたいなものかぁ。それはそれで大変そうだけど、私でも頑張ればできなくはないのかも。『音楽に正解はない』とか聞いたことあるけど、それって要するに会話の仕方は人それぞれっていうことなのかな。
あと、理論は間違うために覚えるっていう話。わかってるけど……。
「でもやっぱり、変なの作って笑われるのは恥ずかしいなぁ……ブクブクブク……」
恥ずかしがってちゃ何もできない、まずは間違ってても音楽で喋ってみる、つまりそういうことなんだよね。私って思い切り悪いなぁ……頑張ろう。
「あ……そういえば、何で作曲教えてくれる気になったのか、聞くの忘れちゃった」
まぁ、これはまたどこかのタイミングで聞けばいいかな。

今日はここまで！　おやすみなさい！

CamScannerでスキャン

3日目

音楽と映画は結構似てるっていう話

CamScannerでスキャン

「やはりキャラメルポップコーンだな」
「うん。間違いないね」
珠ちゃんから作曲を教えてもらうことになって、今日は3日目。日付的には12月24日、クリスマスイヴ。いつもどおり珠ちゃん家に行ってみたら、今日珠ちゃんは映画を観に行くつもりらしかったので、私も一緒に行くことになった。そんなわけで私たちは今、大型ショッピングモール「ファイヴペニーズ」の中にある映画館の指定席でポップコーンを食べながら、クリスマスシーズンのこの時期ドンピシャな感じのカップル向け恋愛映画が始まるのを待っている。
「カップル多いな」
「イヴだもんね」
「……なんか悪いな、付き合わせて」
「ううん、私もこれ観たかったんだ。誘ってくれてありがとう♪」
「そか」
「……」
「あのビデオカメラの被り物いいな。どっかに売ってないかな」

「あんなの手に入れてどうするの珠ちゃん……」

「そりゃ、かぶるんだよ。あ、映画始まりそうだ。携帯の電源切っとけよ」

「あ、うん」

謎だなぁ珠ちゃん。映画館でもおかまいなしにぬいぐるみ帽子を被ってるし。頭の中ずっと遊園地なのかな。あ。映画始まる。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「……」

「……」

エンドロールが流れ、館内が明るくなる。今日観た映画は、外国では今年イチの大ヒット作らしい。全米が泣いた的な。たしかに笑いあり涙ありの王道な恋愛映画で、私は結構好きな感じだったかも。

暗い通路を歩いて、シアターの外に出る。映画館特有のワクワクする館内を黙って出る、あの感じ。みんな、次のお客さんにネタバレしないように気を付けてるんだろうな。

珠ちゃんはどうだったんだろう。なんか無表情だなぁ。うう……こういう時間苦手な

んだよね……。珠ちゃんどう思ってるんだろう。どうしようかな。どういう感想を言えば正解なんだろう……？

「ふぅ～っ！　喫茶店でも行くかぁ」

「う、うん！　そうだね！　喫茶店いいね！」

ああ……これじゃどっちかわかんない……珠ちゃんはおもしろかったの……？　どっち……？

「……なんだ、変な顔して」

「いや、別に……」

シアターを出て、ショッピングモールの屋外中央広場から手頃な喫茶店を探す。

「うわっ。外寒いなぁ。……ところで、映画どうだった？」

「うえ!?」

ああ～！　困った！　どっちなら正解なの!?

「……エーットっ!?　お、おもしろいといえばおもしろいし、微妙といえば微妙のような!?　で、でも、なんか全米1位って感じだよね！」

ナイスなコメント！　これが正解だね！

「……た、珠ちゃんはどうだったの？？」

「なんだいろは、あたしの感想を聞いて自分の感想を決めようと思ってるのか？」
　ダメだったーっ！　全部お見通しだった！
「いや！　そういうつもりじゃなくて……えっと……うん。ごめん……主体性ないよね私……」
「あっはっはっは！　映画終わってからずっと変な顔してるから、もしかしてそうなのかなと思ったけどホントにそうか！　アホだなぁ！」
「アホって言わないで！　うう……私、自分の感想言うの苦手なんだぁ……」
「いやいや、まぁ気持ちはわからなくはないよ。おもしろいって感想も、つまんないって感想も、口にするからには責任が伴うしな」
「うん。難しいよね……」
「難しくはないよ。おもしろいと思ったならおもしろいって言えばいいし、つまらないと思ったならつまらないって言えばいい。ごくシンプルな話だ」
「そりゃそうなんだけど……」
　いかにも珠ちゃんだなぁ。そう言っちゃえばたしかにシンプルだけど、それはそんなに簡単な話じゃないんだよ……。だって、自分にとっておもしろかったとしても、もし

つまんない映画のこと褒めちゃってたら見る目がない人だって思われるかもしれないし……。
「そんな風に自分の好きなものを疑うなよ、いろは。たしかに、名作だとか駄作だとか、そんな風に世の中が勝手に決め付けてることもたくさんあるけど、絶対に確かなのは自分の感じた『好き』って気持ちだ。これだけは、他人がどうこう言って決めるものじゃない。誰が何と言おうと、自分が好きならそれは好きで正しいし、それこそが一番大事な感覚だ。いろはさえそれを好きなんだったら、あたしや世間のコメントなんかどうだっていいんだよ」
「……はぁ……。その確信に満ちた感じは一体どうやったら身に付くものなの珠ちゃん……」
「好きなものは好き！　嫌いなものは嫌い！　それだけだーっ！」
モールの中央広場、噴水の縁に飛び乗った珠ちゃんは、そう叫んでからキリッと振り返る。なんかもう、自由だなこの子……。
「……珠ちゃんって、これを言ったら人に嫌われるかもとか、そういう感覚ってないの？」
「あるよ。そりゃもちろん。あるけど、好きなものが理由で嫌われたんなら仕方ないじゃん。自分はそれを好きなんだし、どうしようもない」

「好きなものを変えたりはしないの？」

「変えない。絶対変えない。だって好きなんだから。変えようと思って変わるようなものじゃないし、あたしと同じようにそれを好きな人だってきっといるしね。あたしはそういう人とわかり合えばいいし、そういう人たちに向けて曲を作る。そもそも、好き嫌いが一致してないのに無理に合わせようとする方が変だろ？」

「……そうだね。まぁ、そうかも」

……相変わらずマイウェイだなぁ。普通みんな、自分の意見とかは上手に周りと合わせて衝突しないように気を付けるものなのに、珠ちゃんにはそういう感覚はまったくないみたい。でも、そんなふうに吹っ切った考え方になれたら気楽だろうなぁ。

「あっ……」

「どうした？」

「いや、なんでも……」

……そうか、そういえば、この2日間珠ちゃんと話してちょっと印象変わったけど、そういえば珠ちゃんって、クラスでは誰も寄せ付けない感じの子だったっけ。こんな風にハッキリ自分の好みを持ってて、しかも人に合わせられないから、ああするしかなかったとか、そういうことなのかな……。

CamScannerでスキャン

「で、映画、どうだったんだ？」
「えっと……じゃあ、私にとっては好きな感じだったかも……？」
「へぇ。そっか」
「珠ちゃんはどうだったの？」
「あたし？　あたしは、おもしろかったかな。粗も多かったけど、筋はある程度通ってたし、何よりロマンチックだった。エンターテインメントもしっかりやってたしね。好きなタイプの映画だったよ」
あ、そうなんだ。良かった。
「ホッとしてるな。ホッとする必要もないんだよ。あたしがもしこの映画のことをボロクソに言ったとしても、それはそれ、あたし向きの映画じゃなかったってだけの話なんだから、別に気にすることないんだぞ。1日目に言ったことでもあるけど、自分が何を好きか、その基準は常にいろは自身だけのものだ。日常的に、自分の好きなものは何なのか考えること。それがイコールで、どんな曲を作っていくのかにも繋がっていくんだ」
「うん。でも、珠ちゃんのこと好きだし、同じもの好きで良かったなぁと思って」
「ん……ああ、なるほど。……そうか。そういう考え方もあるよな……」

CamScannerでスキャン

珠ちゃんは、ちょっとキョトンとしたあとに、なんだか納得したような顔をしていた。

私、変なこと言ったかな……？

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「さてと、一昨日は作曲をする前に考えておくべきこと、昨日は音楽理論というやつの意味と必要性について、って話をしてきたわけだけど、今日は曲というものの仕組みについて話してみようか」

アイスミルクティーとクリームソーダが運ばれてきた喫茶店の一角、私と珠ちゃんは映画の余韻を楽しみつつお茶している。

「曲の仕組み……なんかちょっと作曲っぽくなってきたね。……って、喫茶店でいいの……？　キーボードとかいらないい？」

「いいのいいの。どうせ鍵盤使ったってよくわかんないんだから」

「……そ、そうだね……ははは……」

私が買ったキーボードは一体いつになったら活躍するんだろう……。

「今から話すのは、作曲レッスンの全体スケジュールの話だ。作曲を実際にできるよう

になるには何カ所の難関があって、どこまでをクリアすればいいのか、そのへんのポイントを先に言っておこうかと思うんだよ。じゃないとさ、今いろはにとって作曲ってもう果てが見えない無限の旅だろ？」

「そうだね……終わりなき旅だね……」

「だから、先にざっとルートを見るんだよ。そしたら不安もだいぶ減るし、今自分がどれくらいできて、あとどれくらいやれば作曲ができるようになるのか、大まかな目安がわかるだろ？」

「それ！　それを求めてた！　さすが珠ちゃん！」

そこなんだよね！　作曲って、どの段階でできるようになるのか全然わかんない。実際、ここまでやればっていう明確なラインってあるのかな？　わかんないけど、珠ちゃんの口ぶりだとどうやらそういうのもあるっぽい……のかな？

「じゃあ説明しておこう。今から言うのは、普通にやった場合の流れだ」

「うん」

「作曲における一番の難関はまず間違いなく、最初のところだ。いろはも一度ぶつかったことがあるみたいだけど、まさにそこ。『何をすればいいのかまったくわからないというスタートライン』。大体の人はここでくじける」

「やっぱりそうなんだ……うん。ここは難攻不落の砦だよね……」

「そしてそこを越えると、次にぶつかるのは『途中まではできるけど完成しない』の壁だ」

「うわ、それも大変そうだね……」

「それを越えたところで『完成はしたけど、思った通りの曲じゃない』にたどり着く」

「うん」

「ちなみに、ここまではあんまり楽しくない」

「……楽しくないとこ長いね」

「だからさっさと越えちゃわなきゃダメなんだよ。ここでモタモタしてると力尽きちゃって続かないんだ」

「うん。そうだね。つまんないところはできるだけ早く終わらせたいね」

「そして次。『思い通りの曲はできたけど、カッコ良くはない』だ」

「え、まだそういうのあるの？」

「そうだな。そしてここからがエンドレスなゲームの始まりだ。ここまで行ったらあとはもう自分でなんとかできるし、自分でなんとかする以外に方法がない。大きな難関は主に今の４つだね」

「なんか、ゴールまで遠いね……」

CamScannerでスキャン

「しかし、あたしたちはこのルートでは行かない」
「え、そうなの？」
「もちろんだ。14日なんて短い日数で思った通りの曲を作るなら、そんなやり方をしていたんじゃ絶対に作曲なんてできるようにならない」
「そうなんだ……」
「あたしがいろはに教えることは、たったふたつだ。ふたつだけ覚えてくれれば、それで作曲はできる。センスや個人差とは関係なく、必ず作れるはずだ」
「ほ……ホントに言ってるのそれ……？」
「ホントだ。ただしこのふたつについてだけは十分に理解してもらうし、身に付けてもらう。そのひとつ目は、『耳コピ』だ」
「『耳コピ』？」
「ああ。聴いた曲を丸ごとコピーする技術。これは作曲における基本的な能力で、一生使い続けるものだ。プロだろうがアマチュアだろうが、誰でもこれはやってるし、まず絶対に避けることはできない」
「……大変そうだね……」
「超簡単というわけではないけど、順番にやればそうでもないよ。ゲーム感覚でやれば

CamScannerでスキャン

いい」

「うん、よくわかんないけど、やってみるね」

「あともうひとつは、『キー』についてだ。これについては今は説明しないけど、耳コピとキーの概念を身に付けていれば準備は整う。越えるべき関門はふたつ。『耳コピ』と『キー』だっていうことを覚えておいてくれ。そこまで行けたら、作曲だ」

「『耳コピ』と『キー』……うん、頑張る！」

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「さてと、いろは。全体スケジュール的にはそのふたつがポイントだけど、今日する話はそれとはちょっと関係ない」

「そうなの？」

「今日あたしたちは映画を観たわけだけど、もちろんただ観に来たってわけじゃないんだ。じゃあ映画に絡めた話をする前に、今日のテーマを言っておこう。今日のテーマは『曲の聴き方』というやつだ」

「曲の聴き方……？　普通に聴くのと何か違うの？」

「たとえば映画を見る時も、何でこの映画はおもしろいのか、具体的に言える人とそうじゃない人がいるだろ？　今日はそれについてだ。音楽でこれができるようになると、ただ曲を聴くっていうこと自体がもっと楽しくなるぞ。いちリスナーとしても楽しい能力だ」
「なんか楽しそうだね！」
「さてと！　今日の映画はおもしろかった！　何でおもしろかったんだ!?」
「え？　映画の話？　何でって……それは、えっと……ストーリーが良かったから……？」
「俳優の演技も良かったな！」
「あ、うん！　カッコ良かったよね～！　それにあの敵の人、恐かったけど最後すごい良い人だったよね！」
「うんうん、それに、いつのまにかみんなが主人公を応援してて大勢を巻き込んでいってる感じ、熱くなったよな！」
「そうだね～！」
「よし！　そこでだ。自分の好きな曲を映画に置き換えてみたらどうなるか、ちょっと考えてみてくれ」

「え？」
またわかんないこと言い出したなぁ珠ちゃん……映画に置き換える……？
「いろはは曲を聴く時、どういう部分を一番聴いてる？　この場合はとりあえず、ドラマやアニメの主題歌とかでいいや。いわゆる『歌モノ』の場合の話でね」
「どういう部分って……えーっと、なんかグッとくるメロディで……あ！　あと歌詞が良いやつ！」
「ふむふむ。なるほど。メロディに歌詞か」
「うん。そんな感じだと思う」
「これはあくまであたしの場合の分類だけどね。メロディは主人公、歌詞は台本のセリフだ。でも、これだけじゃ映画は完成しない。物語の軸を担う敵役、小粋な脇役、そして世界観や時代背景、舞台設定。まずこれだけの決まり事や配役があって大体の映画は始まる」
「えっと……うん。そうかも」
「現状については、今いろはが曲を聴く時に注目してるのは主人公とセリフだけって感じなんだ。でも、それ以外の部分にもしっかり注目すると、その映画の全体的な仕組みがわかってくる。あたしにとって曲っていうのは――

・主人公（メロディ）
・セリフ（歌詞）※歌モノの場合
・敵役（ベース）
・脇役（ハーモニー）
・世界観（リズム）

大きく分けてこの４つの役どころで成り立ってるイメージなんだ」
「敵役がベースって、そうなの？　なんかベースって、もっと影で支える的なそういうのっていう印象があるんだけど……？　目立たないし……」
「いや、ベースはメロディの次に大事だ。このキャラクター次第で曲はまったく違う方向に行くし、良いメロディもダメなメロディに聴こえたりする。曲に影響を与えるっていう意味での重要性は、メロディの次くらいに大事なポジションなんだよ」
……そうなのかな？　っていうか、私ベースとかあんまり聴こえないんだけど……。
それが重要？　ホントに……？
「たとえば、メロディは普通の青年で、ベースは敵役でマフィアのボスの超ヤバい奴。

この時点でもう映画の雰囲気って大体決まるだろ？」
「まぁ、そうかも」
「じゃあもうひとつ別のパターン。メロディは同じ青年で、ベースは恋敵の親友。ほら、ストーリー自体が全然違う話になるだろ？」
「あ、ほんとだね。なんか急に青春モノみたいになった？」
「ベースっていうのは、それくらい曲の雰囲気を決定するんだ」
「な、なるほど……まだその重要度があんまりピンとこないけど、そうなんだね……」
「そしてハーモニーは脇役だ。マフィアのボスがベースなら、それに合わせてハーモニーも悪そうな感じになるし、恋敵の親友がベースなら、学校のクラスメイトや部活の友達とかがハーモニーになる。主人公と敵役の間を取り持ったり、説得したり、たまに味方になったり敵になったり、そういうことをしながらバランスを調整する、そういう立場がハーモニー」
「ふんふん……」
「そしてあとはリズム。しっとりとした感動系なのか、それとも激しいアクション系なのか、ノリノリのコメディなのか、怪しげなホラーなのか。ジャンルや全体の世界観を決めるのがリズムの仕事だ」

「う〜ん……なるほど……？」

「さてと、まずこの4つがあるということを前提にして、もう一度いろはの好きな曲を聴いてみてほしい。主人公がいて、敵役がいて、脇役がいて、そして世界観がある。それぞれがそれぞれの立場で、ひとつの物語に関わって出来上がってるっていうのが、何となくわかるはずだ。ちなみに、早い話この4役は、ボーカル、ベース、ギター、ドラムと同じだ。意外かもしれないけど、実はほとんどの音楽はこの4役で成り立ってる。オーケストラもロックもジャズも、ポップスも。もっと複雑だったり、もっとシンプルだったりとかっていう差はあるけどね」

「そうなんだ……」

ああ、なんか珠ちゃんの言ってることは何となくわかる気がするけど、やっぱり具体的にはピンとこないかも……？

「たとえば3分の曲なら、それは3分の物語なんだよ。そのキャラクターたちにどんな物語を用意するか。……物語の始まりは些細なことか、それとも大事件か。その問題に立ち向かっていく主人公たち、粋な敵役に脇役、まくしたてるように拍車をかける世界観！　そしてサビというクライマックス！　エンディングまでしっかり作って、完成だ！」

CamScannerでスキャン

「なんだか、作曲っていうか映画監督みたいだね」
「そう！　どっちかって言うとそんな感じだ！　ひとつの曲を書くっていうのは、小さいサイズの映画をひとつ作るみたいな感じだと思えばいい」
「……うーん、言ってることはカッコいいけど、それってつまりどういうことなのかな……」
「難しく考えることはない。要するに、音楽にはそれぞれに配役があるって話なんだ。音楽の中で、それぞれの役者がどんなカッコいいことをしてるか、それがわかると、曲を聴くのはもっと楽しくなるよ。メロディが懐かしい雰囲気だったり、ベースが明らかに何かマニアックなジャンルのネタを使ってたり、ギターが聴いたこともない新しいアプローチをやってたり、ドラムがおもしろいタイミングでノリを変えてきたり、とかね」
「そういうの、私にもわかるようになるかな……？」
「それは興味の問題だ。だから、まずは聴いてみるんだよ。ドラムだけ聴くぞ！　とか、ベースだけとか、ひとりの役者……つまりひとつの楽器だけを耳で追って、最後まで聴き切ってみる。それをするだけで、音楽はものすごく楽しみが深くなるよ。ほかのパートとの関係も、何となくだけどわかるようになる。その役者全員でどんな物語を作って

るのかっていうのまでわかるようになったら、もうバッチリだ〝よく聴く〟っていうのは、何回も聴くってことじゃない。集中して『それぞれの役者（パート）が何をしているのか注意深く聴く』っていうのが、〝よく聴く〟ってことだよ」

「なるほど……や、やってみるね！」

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

日が落ちて、街灯の下を駅から家まで歩く道。クリスマスイヴのイルミネーションを見ながら分かれ道まで一緒に歩いて、私たちはそれぞれ家路についた。

今日もあんまり具体的な話はなかった気がするけど、でも、作曲をしてみようと思った数日前と比べると、作曲っていうものが何なのか、ちょっとイメージが変わってきてる気がする。まぁまだ全然、それこそ1曲も書いてないんだけど……でも、なんだか楽しくなってきたかも。このまま頑張れば、私も作曲できるようになるのかな。

家に着いたら、自分の好きな曲をもう一回聴いてみよう。あんまり考えたことなかっ

たけど、メロディとかベースとかドラムとか、ひとつずつ。主人公とか脇役とか、映画みたいな感じで……っていうのはまだわかるかどうかわかんないけど。歩く歩幅は少し大きく、楽しい予感にウキウキしてきている。

今日はここまで！

CamScannerでスキャン

珠美のひと言

あたしはこれを使っている

音楽を始めていろんな道具を使ってきたし、マイブームや気分でも結構流動的だけど、実際にプロが使ってる道具がどういうものかを、具体的な説明は省いてざっと書いてみるよ。

○パソコン
Mac Mini（拡張オプション大盛り）わりとこれで十分。
○DAW
作曲／打ち込み用は「Logic」（Apple）。録音用として「Pro Tools」（AVID）。
○音源
これについてはさすがにいろいろ。毎年変わる。
○オーディオインターフェース
「MOTU 828mk2」（MOTU）。パワフルで荒っぽい感じが好き。
○マイク
コンデンサーマイクは「AKG-C214」(AKG)、ダイナミックマイクは「58」「57」(SHURE)。
○ヘッドホン
「MDR-CD900ST」（ソニー）
○キーボード
「HP-147」（ローランド）。お母さんが実家でもてあましてた電子ピアノ。あとは「reface DX」（ヤマハ）もいいね！
○スピーカー
「MSP5 STUDIO」（ヤマハ）。もうひとつ小柄な「MSP3」でも十分だ。
○マウス
「Trackball Explorer」（マイクロソフト、生産終了）。ケンジントン社のトラックボールもいいね。あと、個人的にはWACOM社のペンタブ「CTL-480」もいいと思う。

あたしの機材はハッキリ言って作曲家の中ではかなりシンプルな方だね。もっと良いものを使ってる人の方が多いと思う。けどまぁ、これだけあれば十分だ。とりあえず作曲するってことについてはね。

CamScannerでスキャン

4日目

耳コピの話

さぁ！　私もなんだかちょっと作曲のことわかってきた気がしてるよ！　まだ1曲も作ってない（っていうか鍵盤すら鳴らしてない）けど！　そんなワクワクした気分で、私はマフラーを編んでいる。大きい文字で「I♡MUSIC」！　今日は4日目。珠ちゃんが言うには大体14日で全部終わるってことみたいだけど、どうやら今日はついにひとつ目の関門『耳コピ』っていうのについて教えてくれるみたい。

「おはよう珠ちゃん！」

「おはよ〜……だー寒……入ってー」

自転車で通うにはちょっと手が寒い、いつもの道を来て、玄関に出てきた珠ちゃんにおはようを言う私。珠ちゃんは着ぐるみパジャマ（怪獣のやつ）のままでいるところをおばさんに怒られて、しぶしぶ部屋着に着替えて朝ご飯（昼）のサンドイッチを食べながらボーッとしてる。

「ふわぁ〜ぁ……」

「昨日の夜寝てないの？」

「うん。まぁね」

疲れた様子の珠ちゃん。あ、そうか。よく考えたら珠ちゃん現役高校生作曲家だし、普通に作曲の仕事しながら学校通ってるんだよね。っていうことは、冬休みの宿題に仕

CamScannerでスキャン

事にって、実はかなり忙しいんじゃ……私のために時間使ってくれてるの、なんだか申し訳ないなぁ。

「今日って大丈夫？　邪魔じゃない？」

「え、何が？」

「いや、私のせいで宿題とか仕事の時間少なくなっちゃってるだろうし……」

「ん。ああ。気にすることないよ。昨日の夜寝てないのは、ずっとゲームしてたからだし」

「え」

「しかし実際、ゲームする時間が減ってるのは確かだな！　しっかり恩にきるんだぞ！」

「え、えーっと……うん。ごめんね」

あんまりカッコいい理由じゃなかった……。

「今『ゲームしてるんだったら別にいっか』って思ったな？」

「えっ。お、思ってないよ？」

いつも思うけど、なんなのこの洞察力……。

「遊びを作る人間が、遊ぶことを忘れたらおしまいだ！　言ってみて！　さんハイ！」

「ええ!?　遊びを作る人が……えっと、なんだっけ……？」

「その通り！　ゲームも漫画もスポーツも、アイドルの追っかけもオタッキーな趣味も、

CamScannerでスキャン

夢中にさえなれるならそれは全部大事なことだ！　周りにもなんか妙に冷めてるやついるだろ？　何かを作る人は、あれじゃダメなんだよ。夢中になれるって一番大事なことなんだから。自分が『これは夢中になれる！』って思うものがあったら、それは全部やった方がいい。なりふりかまわずやった方がいい」

「えっと……まぁそれは、何となくそんな気もするけど、でもそれって、場合によっては単なるいい詭弁っていうか、遊ぶための言い訳にも聞こえるような……？」

「ちなみにあたしが言ってるのは、いわゆる『偽インプット』のことではないぞ」

「偽インプット？」

「ん？　ああ、偽インプットっていうのは、クリエイターが言い訳にしがちな『遊んでる自分を肯定する大義名分』のことだ。インプットの本来の意味は、必要な（どちらかといえば興味のない）資料を頭に入れることを言うんだけど、ただ遊ぶこと、たとえば好きな映画を観に行くみたいなのもインプットとか言い出す人が結構いるんだよ。遊びは遊び、遊ぶと決めて遊ぶ。中途半端な気分じゃなくて全力でね。それでいいのに、何でなんだろうなぁ。遊ぶの後ろめたいのかな」

「そういうのあるんだね……」

〈ちなみに夢中っていうのがなぜ大事なのかって話をもう少しするとね、夢中はどんな

ものにも必要なエネルギーだからなんだよ。十分に夢中にさえなっていれば、人の作ったものを楽しむ時は『感動』が手に入るし、自分で何かを作る時は『アイデア』を生む燃料になる。逆に夢中がない状態で何をやっても、そんなのはカラッポで何にもならないんだ」

「なるほど……言われてみれば、そうかも……」

「そしてもうひとつ。たとえば努力ってあるだろ？　何かを作る時もそうだし、たとえばスポーツだってそう、努力をすることでそれはうまくなるってみんな思ってるけど、実はそうじゃないんだ。実際のところは、夢中で人はうまくなる。『努力は夢中に勝てない』んだ」

「努力は夢中に勝てない？」

「うん。どんなに一生懸命努力したとしても、努力してるかぎり、夢中になってる人には絶対にかなわない」

「それってどういうこと？」

「ハッキリ言うと、努力してる時点で向いてないってことなんだ」

「……」

珠ちゃんの声のトーンが変わった。なんだか、変な感じがする。よくわかんないけど、なんか変な迫力がある……。
「ま、それはいいや、うん」
あれ？　あ、もとに戻った。
「まぁ、夢中になってる側の人の方が少ないし、世間じゃそういう人のことを天才だとか言って別物扱いしたりするけどさ、実はそんなの特に珍しくもないし天才でも何でもないよ。ただ好きで夢中になってるだけの人だ。でも、それが難しいってのも実際だね。だからこそあたしは、自分が夢中になれると思ったものはひとつ残らずハマることにしてるんだ」
「なるほど……なんだか深みのある感じの話にたどり着いたね……」
「人生は最高のテーマパークだぞいろは！　自分さえその気なら、この世界には遊んでも遊びつくせないほどおもしろいことがたくさんある！」
「人生はテーマパークかぁ。だから珠ちゃん、ずっと遊園地みたいな帽子かぶってるんだね」
「まぁ深くは考えてないけど、そうだな。そう言われてみればそうかも」
「あー　帽子と言えば……そうそう、これ珠ちゃんに……」

「ん？　なんだ？」

私は、鞄に入れて持って来たプレゼントを渡す。喜んでもらえるかなぁ。

「レッスン代ってわけじゃないんだけど……じゃーん！　珠ちゃんぬいぐるみ帽子好きかと思って、はい！　おたまじゃくしの帽子♪」

「うおーっ！　何これ、何のキャラか知らないけど、超かわいいね！　絶妙に不細工な目つきが愛くるしいぞ！　まさにあたしの好みドンピシャだ！　よくこんなの見つけて来たなぁ！」

「ううん、売ってなかったから自分で作ったんだ♪　どうかな？」

「え？　作ったって……ああ、オーダーメイドとか？」

「じゃなくて、自分で作ったんだよ、こう、糸で生地を縫い合わせて綿を詰めて……手作りだよ♪」

「え……マジか。これ手作りか。いろは、今さらだけど、お前作曲より裁縫の方が向いてるんじゃないか……？」

「え？　いやいや、これくらいだったらちょっとやれば誰でもできるし、そんなすごいもんじゃないよ。普通だと思うけど」

なんか、珠ちゃんが見たことない顔で目を見開いてる。大袈裟だなぁ。これくらいな

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

らすぐできるのに。
「……ひょっとして、その新しいマフラーも自分で作ったのか？」
「あ、うん。昨日の夜作ったんだ。どうかな？」
「『I♡MUSIC』って文字のセンスについてはさておいて、店で売ってるものかと思うくらいよくできてるな。ビックリだ。しかも1日で作ったのか……」
「ええ⁉　文字……だ、ダサいかなぁ……ショック……」
「いや、いいんじゃないかな。あたしの好みとズレてるだけで、すごくいろはっぽいぞ！　キュートでイノセントでピースフルだ！　よく似合ってるよ。キャラ的にも」
「うん。そうだよね、私が好きならそれで正解……なんだよね！　じゃあ私はこれ好き！」
「うむ！　しかし……なるほどなぁ。自分が持ってて当たり前の能力のすごさには、自分では気付きにくいものなのかもな」
「……？　あ、でね、そのオタマジャクシ名前まだないんだ。珠ちゃんつけてくれない？」
「おお！　それなら任せろ！　……そうだな、こいつの名前は『タマちゃん2号』だ！」
「え、タマちゃん2号？　1号は……？」
「1号はあたしだ」
「あ、そうなんだ……」

い、良い名前……かな？　うん、かわいいよね！　かわいいかわいいかわいい！
「かわいい名前だねぇ～！　良かったねタマちゃん2号♪」
「オタマジャクシだしちょうどいいよな。うむ！　なるほど、これは良いものをもらってしまったな！　今日は張り切ってうんとタメになることを教えちゃうぞ！」
「うん！　今日もよろしくね珠ちゃん♪」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「さてと。今日教えることは昨日言った通りだ」
「『耳コピ』、だね」
「そう、耳コピ。改めて具体的に説明すると、カラオケで流す曲みたいなのを作るイメージかな。これこそが音楽訓練の原点にして頂点、誰もが通り、そして誰もが体得していった絶対不可欠な音楽スキルだ。野球で言ったらキャッチボールくらい頻繁（ひんぱん）にやることでもある」
「耳コピって、つまりメロディを聴き取るっていうこと……？」
「メロディもだけど、それだけじゃない。ベースも聴き取るし、ギターも聴き取るし、鳴っ

てるならヴァイオリンやトランペット、打楽器だってそうだ。もう鳴ってる音のすべてをひたすら聴き取ってその通りに再現していく。絵画で言うところの模写ってことだな」
「なるほど……耳で聴いてコピーを作るから……耳コピ……」
「……てなわけでだ、耳コピの題材は何でもいいんだけど、とりあえずできるだけ簡単なやつを耳コピしよう。曲を選んでくれ。いろはの好きなやつでいいぞ」
「……うーん……私からしたらどれも全部難しそうに聴こえるんだけど、どういうのがやりやすいとかってあるの……？」
「ん？　あー、耳コピしやすい音楽か。Ｊ－ＰＯＰの大体の曲は簡単だよ。ポップスっていうのはポピュラー（大衆の）ミュージックってだけあって、極端に変なことをしてるのは少ないんだ。まぁ近年はちょっと複雑なのも多くなってるけど、ちょっとさかのぼって懐メロとかを聴いてみるとかなり簡単だよ。曲調もテンポも安定してるし、編曲もシンプルだ。あと、古いゲーム音楽もなかなかいいぞ」
「古いゲーム音楽？」
「うん。古いゲーム音楽っていうのは、たとえば１９８０～90年代のやつね。あの頃のゲーム音楽はゲーム機の性能の問題で同時に鳴らせる音自体が少なかったから、メロディもベースもものすごくハッキリしてるんだ。音数が少ない分工夫も多かったから、今で

CamScannerでスキャン

もあの頃のメロディはなかなか超えられないんだよね」
「へぇ～……。今の方が便利なのに昔の方がすごいって、なんか不思議だね」
「意外とそういうもんなのかもよ。何でもかんでもできる時代じゃなかったからこそ、できる範囲でアイデアを出して工夫を重ねてたってことだと思う。今は、何でもできちゃうからアイデアを出す必要自体がないんだよ」
「でもそれだったら、えーっと、音数？を減らして昔みたいにすればいいんじゃない？」
「一度手に入った便利さはなかなか手放せないからね。4つくらいの和音だけで音楽を作るっていうのはまず間違いなく曲の品質を底上げする手段だとは思うけど、やってる人はわりと少ない。あたしはそのやり方だけどね。豪華なサウンドで何となくそれっぽいのを作っても、なんか全然楽しくないんだ。そこには〝それっぽさ〟しかなくて、あたしが一番言いたいことが何も入ってない」
「へ、へぇ……なんか、よくわかんないけど大変なんだね……」
「ああ。よくわかんないけど大変なんだ」
珠ちゃんからたまに垣間見えるプロ作曲家の気配。そういえばプロなんだよね。私にはちょっとよくわかんない話を聞かされると、なんだか圧倒されるなぁ。
「さてと。で、何にする？」

「えーっと……」

でも私、ゲームあんまり詳しくないしなぁ。あ、たとえばこれとかどうなんだろ……。

「じゃあ、《カントリー・ロード》とかは？　アニメ映画のエンディングで使われてたやつ」

「お、いいねぇ！　シンプルな名曲だ。《カントリー・ロード》にしようか」

そう言うと、珠ちゃんはパソコンに向かい、保存していた《カントリー・ロード》の音楽ファイルを再生する。さすが珠ちゃん、何でも持ってるなぁ。

「……うーむ、良い曲だ」

「うん。私この曲好き♪」

「よし！　じゃあさっそく耳コピしようか。使うのはこれだ」

珠ちゃんはそう言いながら、パソコンの画面を音楽プレイヤーから何か見たことのない画面に変えた。

「昔はそれこそ五線紙とピアノだけで作曲してたものだけど、最近は音楽・作曲ソフトを使ってパソコンで作るっていうのが主流だ。そしてこの画面に映ってるのが、音楽ソフト。またの名をＤＡＷ。デジタル・オーディオ・ワークステーションの略だけど、まぁ早い話が音楽ソフトって意味だから、ざっくりそう思っておけばいい。これもわかってきたら自分に合ったソフトを好きに選んで使えばいいよ。これを使いこなす具体的なや

り方って話を始めたら1日や2日じゃ終わらないけど、まぁやるのはごくシンプルな操作だけだし、とりあえず今回のレッスンではあたしが大体の操作をしながら教えるよ」
「へぇ……音楽ソフトってこんな感じなんだね……」
パソコン画面に映っているのは、なんか見た目のイメージとしてはちょっとゲームっぽいっていうか、楽しそうな雰囲気。何に使うのかわからないボタンとかマークとかメーターとかがいっぱいだけど……珠ちゃんこれ使いこなしてるんだ。すごい。
「さてと、じゃあどんどん耳コピしていこうか。音の入力の仕方は……ほら、マウスでこんな風にここのマス目……ピアノロールっていうんだけど、ここをクリックしたらほら、ピアノっぽい音が鳴るだろ？」
「うん」
「この4マスに1回太い縦線が入ってるところ、ここがワンツースリーフォーの、ワンの部分だ。何となくわかるか？」
「うん。何となく」
「よし、何となくわかれば十分だ。耳コピを始める前にやるのは、そのワンツースリーフォーの速さ、つまりテンポを決めないとな」
「テンポ……そっか。曲によって速さって違うもんね。それを決めるのが最初なんだ。

CamScannerでスキャン

……っていうことは、えーっと……《カントリー・ロード》のテンポにすればいいの？」

「そう。最初の作業はテンポの設定だ。ちなみに、1秒につき1回手拍子をするテンポは数値的に言うと60、その倍の速さはテンポ120って感じだぞ」

「あ、そういうのって決まってるんだね」

「ちなみにこの数のことを用語的にはＢＰＭ、略さず言うとビート・パー・ミニッツっていうんだ。1分間に叩く手拍子の数って意味なんだけど、1分で60回均等に手拍子するっていうのが、つまりテンポ（ＢＰＭ）60だ」

「へぇ～！」

おお……なんか急にそれっぽい話……。

「ちなみに《カントリー・ロード》のＢＰＭはざっと74くらいだね」

「え、そんなのわかるの？　何で？」

「勘」

か……勘って……。

「とりあえず音楽ソフトのメトロノームを鳴らして確認してみよう。チックタックチックタック。ほら、大体合ってた。あ、ピッタリのテンポだ。ビンゴ！」

しかも合ってるんだ……さすがだなぁ……。

「さてと、ＢＰＭがわかったら、あとはこのワンツースリーフォーってのに合わせてどんどん順番に音を聴いてコピーしていくだけだ。この時、別にキーが何かとかメジャーとかマイナーとか、ここのコードは何だとか、そのへんはとりあえず無視して平気だから、まずは頭をカラッポにしてひたすらどんどんコピーしていく。これはもうただの作業みたいなもんだ」

ん……？　キー？　ああ、キーって昨日言ってた……コード？　コードってあれだよね、ギターのやつ……？　メジャーかマイナーか……有名ってこと？　ん？

「珠ちゃん、ちょっと待って」

「ん？　どうした？」

「いや、えっと、いつもよりちょっと話が速いっていうか……なんか急に難しいっていうか……」

「そんなことはないぞ！　まずは何も考えなくていいんだ！」

「そうなの……？」

なんか、気になる用語みたいなのがチラホラ出てたんだけど、気にしなくて良いのかな……？　まあ、珠ちゃんが言うんだったらきっとそうなんだよね。

「ほら、どんどんコピーしていくぞ。まずは私がやってみるからちょっと見てて」

CamScannerでスキャン

そう言うと珠ちゃんは、《カントリー・ロード》を再生しながら、イントロのメロディをパソコンに繋いだ鍵盤でさっと弾いて鳴らす。……うわぁ。すごい。
「ほら、こうやって、一番目立つメロディだけまずは聴き取っていくんだ。聴き取れたら、それをさっきのマス目、ピアノロールにこうやってどんどん書き込んでいく。マウスでポチポチやってもいいし、繋いだキーボードの鍵盤を押して入力してもいいし」
そう言いながら、あれよあれよという間にイントロの部分をコピーしていく珠ちゃん。なるほどたしかに間違いなく、元の曲のメロディをしっかりなぞってテンポも同じ。
……これが耳コピっていう感じなのか……。
「さ、イントロはあたしがコピーしちゃったから、歌の始まりのところからはいろはが実際にやってみようか」
「う、うん」
パソコンの音楽ソフトの鍵盤の画面を押すと、音が鳴ると同時に画面にも音マークが加えられていく。これで入力できてるってことだよね……？　あ、うん、そういうことっぽい。えーっと……あれ？　でもこの音で合ってるのかな？　歌の始まるとこの最初の音って『ミ』？　じゃなくて『ソ』かな……ちょっと違うような……？　ん？　あれ
……う～ん……。

CamScannerでスキャン

「う……う～ん……」
「どうした？」
「えっと、最初の音がどれかわからなくて……」
「最初の音はCだな」
「へ!? C!?」
「うん。ドレミで言ったら『ソ』だ」
「……え!? ……えっと……最初の音は……『ソ』なんだね……」
「そうだな。最初の音は『ソ』で間違いない」
え、なんなの今のアルファベット。何の予告もなく突然出てきたけど……え？ っていうかドレミで言ったらって何？ ドレミじゃないやつもあるの？ ……ん？ あれ、でもこれって……。
「珠ちゃん、今珠ちゃんこの音『ソ』って言ったけど、学校で習った記憶だとここって
たしか『ド』だったような……」
私は、半信半疑だけど聞いてみる。たしか、私が幼稚園の頃使ってたピアニカ（鍵盤ハーモニカ）にはここに『ド』のシールが貼ってあったような気がする。
「ああ、それも『ド』だよ。でも今はそのへんのこと言ってもよくわかんないだろうし、

Cで覚えちゃった方が手っ取り早いね」

……う？　これも『ド』なの？　何で『ド』がいっぱいあるの？　……何が起こってるんだろう……。

「こ、これって気にしなくていいのかな……？　『ド』がふたつあることになっちゃうんだけど……」

「ん？　違う違う、『ド』はひとつだよ。キーによって『ド』の位置が違うんだ。《カントリー・ロード》の場合はFだから、Fが『ド』だね」

……う～ん……。どうしよう、なんて聞いたらいいんだろう……。

「そ、そうなんだぁ。なるほど～」

とりあえず、あんまり考えずに言う通りにしよう……たぶんあとでわかるんだよね……？

「じゃ、じゃあ次の音コピーするね。最初がえっと、『ソ』だから……」

……いや、やっぱりここは『ド』だよ。小さい頃からずっとそう習ってたもん。あ、ダメダメ、気にしない。気にしないで次に行かなきゃ。

「えっと、っていうと、ソ、ソ、ソ、レーソ……かな？」

「ああ違う、鳴らしてる音は合ってるけど、そうじゃない。ソソソラソソだ」
「でもここって、たしか『レ』だったような……」
「だから、ドの位置が違うんだって！　まぁそのことはとりあえず放っといていいから、ドレミとかはあんま考えずにどんどん音をコピーしていけばいいんだよ。鳴ってるのそのまま聴き取るだけだ」
珠ちゃんの声が、ちょっとイラついてる……。
「……うん。わかった。あんまり考えないようにするね」
普通に考えて、私より珠ちゃんの方が詳しいし確かに決まってるんだから、私が考えるより言う通りにする方がいいよね。たぶん。
「じゃあえっと、どんどん耳コピしてみるね」
私は、とりあえず合ってるっぽい音を聴き取って耳コピを進めてみる。音の長さってこれ、大体でいいのかな？　長さもコピーするんだよね？　えっと……ふふふふーんふ、ふふふふーん、あ、もうちょっと長い？　ふふふふーふーん？　かな？
「珠ちゃん、これ合ってる？」
「ああ、大体合ってるぞ。キープ・ゴーイングだ」
「うん」

パソコン画面の操作の仕方は珠ちゃんがさっとやってくれつつ、私はちょっと不確かな自分の耳コピでメロディをコピーしていく。

「あー違う。そこもうちょっと長く。音ももうちょい上」

「え、そうかな……こっち？」

「違う違う。歌ってみればいいんだよ。アーって。ほら、その音とピアノの音を合わせてみればわかるだろ？　アー。アー。ほら、ここは『ミ』だよ」

「う、うん……」

メロディをそのままコピーするくらいならできるかと思ったんだけど、これってかなり大変のような……。長さと音の高さを間違わずにコピーするのは、思ったよりかなりしんどい。でも、たしかにパチッとハマる音が当たると、これだ！っていう感覚もあるけど……。

「珠ちゃんやっぱりすごいね、これ長さも高さも全部1回でわかっちゃうんだもんね」

「ん？　すごいか？　普通だよ」

……普通なのかぁ。

「私も頑張ろー」

「おう！　これくらい、やってりゃすぐできるようになるぞ！」

CamScannerでスキャン

それから30分くらいして、私は何度もチェックをしながらようやくメロディをコピーすることに成功した。……と思う。たぶん。
「み、耳コピできたね！」
「ああ。まだメロディだけだし、ところどころ微妙に間違ってるけどな！」
あ、できてなかったみたい……。
「まだ間違ってる……？」
「まぁ1カ所2カ所だし、そこはあたしが直しとくよ。ここところね。ほい。これでバッチリ」
「うん。ありがと珠ちゃん。はぁ～くたびれたぁ～」
「さてと、本番はここからだ」
「え？　まだ何かあるの？」
「まだって、おいおい、耳コピはここからがスタートなんだぞ？　メロディがとれたら次はベースだ！　ほかの音でもいいけど、やっぱりまずはベースかな」
「う……うん……そっか。ベースを耳コピするんだね……」
ベースの耳コピ……。
「ん？」

珠ちゃんが、どうしたの早くやりなよって感じの顔で首をかしげてる。

「……やってみるね」

曲を再生して、ベースの音を聴いてみる。……どれがベースなんだろう。え、っていうかベースこれ入ってる？　この曲ベースないんじゃない？　ああでも、何となくいる気配はちょっとするような……。う～ん……。

「……珠ちゃん、この曲ってベース入ってるの？」

「え？　何当たり前のこと言ってるんだ。バリバリ入ってるよ」

「はは……だよね……」

やっぱり入ってるんだ。私の耳がおかしいのかな、全然聴こえないんだけど……っていうかメロディ以外の音がほとんど聴こえないんだけど……たしかに何かいろいろ鳴ってるのはそうだと思うんだけど……う～～ん……う～～ん……。

「……耳コピかぁ。そういえば改めて耳コピについて考えるのなんて、ちょっと久しぶりだな」

珠ちゃんがふいに話し出す。ちょっと疲れた私は、これ幸いとその話に乗ってみたり。

「珠ちゃん、何歳からやってるの？」

「ん？　ああ、音楽自体は中学2年くらいからだけど、耳コピはもっと前から」
「えっ？　音楽やる前に耳コピって……どういうこと？」
「パパが持ってた携帯の着メロを作る機能で、好きな曲作ってたんだよ。音楽理論とかそういうのまったくわかってなかったけど、耳を頼りに作って、それを褒められるのが嬉しかったなぁ」
「そういえば、昔の携帯って着メロ自分で作る機能あったんだよね～」
「そうそう、それがなかなか、小学校低学年のあたしにとっては絶好のオモチャだったらしくてね。音楽のことはわかってなかったけど、ずっと好きな曲の着メロ作って遊んでたんだって」
「へぇ～そうなんだ。……ところで珠ちゃん、お父さんのことパパって呼んでるんだね」
「へ？」
「ちょっと意外～」
「……あ、いや、あの、チガウチガウ、違うぞ！　よく冗談で言ってるだけで、普通にお父さんって呼んでるぞ！」
「へー」
「へーじゃない！」

「ふーん。別にいいんじゃない？　珠ちゃんちょっとかわいいねー。ギャップ萌えだね！」
「ギャップ萌えじゃない！　この……聞けよ！」
「キャーッ！　あははは！」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

ベースの耳コピは途中だけど、今日はこのあたりでお開きになった。少しパラついた雨が外をうんと冷やして、自転車のハンドルを握る手が冷たい。
……そっか、珠ちゃんって小学校の頃から耳コピやってたんだ。どおりでうまいわけだよね。珠ちゃんからはいろいろと楽しい話もいっぱい聞いたけど、でももうそろそろ、難しいところに差し掛かってきたのかもしれない。ひとつ目の関門……『耳コピ』……。でもまぁ、きっとなんとかなるよね！　たぶん……。

今日はここまで！

コラム

作曲に必要なPCソフト

必要な機材を揃えたら、次はソフトを選びましょう。

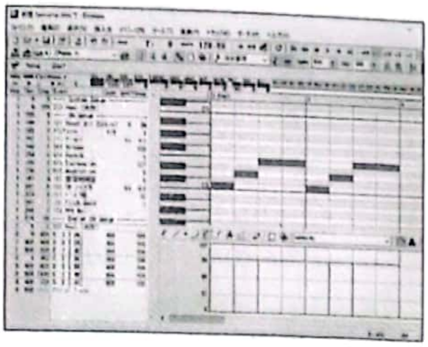
DAW (デジタル・オーディオ・ワークステーション)

PCで作曲するためのソフトです。いろいろな楽器の音色が入っていて、演奏情報を打ち込んだり、録音したりすることによって、さまざまなジャンルの曲を作ることができます。耳コピした音もここに打ち込みます。

Windowsなら

『Domino』 http://takabosoft.com/domino

DTMで重要な"打ち込み"に特化した、シンプルながらDTMの基本を押さえた作りの音楽制作ソフト。使うには、サイトからダウンロード(無料!)して解凍するだけ。面倒なインストール作業も必要ありません。



たくさんのボタンが並んでいて難しそうですが、機能を覚えればとても使いやすいソフト。

Macなら

『GarageBand』

Macにはじめからインストールされている作曲ソフトです。さまざまな楽器の音色やフレーズが収録されていて、打ち込み機能はもちろん、楽器や歌声の録音機能もついているので、これだけでも十分曲を完成させられます。

※プリインストールされています。

使い方は、メニューバーの「ヘルプ」から、さまざまな操作の方法を知ることができます。

プロも使っているソフトを手に入れよう!

『Cubase』シリーズ

http://japan.steinberg.net/jp/products/cubase/start.html

フリーソフトを使っていて、「もっとこんな機能が欲しい」「音色が足りない……」と思い始めたら、有料のDAWも選択肢に入れてみましょう。数多くのプロミュージシャンが使っている『Cubase』シリーズは、WindowsでもMacでも使える高音質のDAW。作曲を補助してくれる機能や多くの楽器の音色など、フリーソフトにはない便利機能がたくさんついています。

CamScannerでスキャン

5日目

越えられない壁の話

CamScannerでスキャン

朝。はぁ。正直ちょっとしんどい。

耳コピのことを教えてもらって、なんとかとりあえずメロディまでは耳コピしたけど、そこから先がもうほとんどまったく進んでない。昨日はなんかあやふやな感じで終わったけど、あれから私は家に帰って、《カントリー・ロード》を聴きつつ夜遅くまでキーボードで音を出しながら必死にベースとかほかの音を聴き取ろうとしてみた。それでも、やっぱり私にはベースが聴こえないし、合ってるのか確信がないし、答え合わせもできない。そんな中で耳コピを続けるのが、正直しんどくなっていた。

「あと……たぶん珠ちゃん、私には言ってない難しい話、まだいろいろあるっぽいなぁ……」

昨日の話に少し出てきた、『ド』がいっぱいあるとかの理論っぽい話。あと、謎のアルファベットとか。たぶんあのへんが、作曲できるようになるために必要な知識の部分なんだよね。……すごくややこしそう。

「それに……やっぱり『ド』はこの位置だよ珠ちゃん……」

押し入れから引っ張り出してきた、昔使ってたピアニカを見つめながら私は呟く。そこにはたしかに、私の思ってた位置に『ド』のシールが貼ってある。珠ちゃんの言ってて

ることが間違ってるとは思わないけど、でも、このピアニカに貼ってある『ド』が間違ってるっていうことはないはずだと思う。だったら、何が正しいんだろう。私は何をわかってないんだろう……。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「ん？　わかんないことが多くて不安？」
「うん……今までの話はなんか感覚的だったから、何となくそうなのかなって感じだったんだけど、昨日の話でわかんないところが結構あって……」
「おお、そうなのか。どこだ？」
「えっと……どこっていうのも曖昧なんだけど……」

5日目のお昼、私は今日も珠ちゃんの家で作曲を教わっている。けどまずは、よくわかってない部分のことを話して気になることを解決しておこうと思った。思ったんだけど……。
「ああ、あれだろ？　楽典の話。あれはいいんだよ。何度も言うけど、あたしのレッス

ンに音楽理論は必要ないんだ。実際、あたしも携帯着メロの耳コピをしてたころは何もわかってないけど耳コピできてたしね」
……気にするなって言うけど、気になるよ。だって私、耳コピ上手にできないんだもん。もしかしたら、それをわかればできるようになるかもしれないし……。
「ねぇ珠ちゃん、その……楽典？っていうのを先に勉強するのじゃダメなのかな？」
「楽典なんてあとでいいよ。とにかくまずは、鳴ってる音をそのまま感じ取るのが大事なんだ」
「そうなんだ」
そっか。じゃあどうにかして耳コピ……やれるようにならなきゃ。
「今日もよろしくね、珠ちゃん」
「おう、こんな簡単なとこ早く終わらして次にいかなきゃな」
「ははは……そうだね」
——そして昨日の続き、メロディの耳コピまで終わった曲のデータを読み込んで、また同じようにベースを聴き取ろうとしてみる。けど、やっぱり何度聴いても、鳴ってるってことくらいしかわからない。
「ねぇ珠ちゃん、この部分のベースって、あ、この音なんだけど、これ『ファ』かな

「……？」
「いや、そうじゃないな。もうちょっと低い」
「そっか……」
ようやく、鳴ってるってことくらいはわかるようになってきてる。けど、鳴ってるだけでどの音なのかはやっぱりわからない。同じ音をピアノで鳴らしてみてるつもりだけど、これって本当に合ってるのかな。あ、合ってなかったよね。もっと低いんだった。じゃあこれなのかな。でも、何となく違う気もするし……。
「……いろは、さっきから何をそんなに悩んでるんだ？　手が止まってるぞ。早くどんどん音とっていきなよ」
「え、ちょっと待って……もうちょっと待ってね、今考えてるから……」
「だから、考える必要なんてないんだって。難しく考えないで、鳴ってる音そのままとればいいいんだよ。超シンプルだ」
「うん。わかってるんだけど、ちょっと難しくて……。ねぇ珠ちゃん、ほかの方法ってないのかな？　耳コピ以外のやり方っていうか……たぶん私、耳コピにあんまり向いてないのかも……」
「はぁ……？　いや、だって、鳴ってる音をそのまま聴いて打ち込んでいくだけだぞ？

これ以上簡単なことってないだろ」
「だから、それが難しくて……」
「ん～……。そうか？　いや、待てって、落ち着いてやればできるだろ？　ほら、だって鳴ってるじゃん。よく聴けばわかるって。最初のとこはFだよ」
また変なアルファベット。だからなんなのそれ。
「大体、この曲はメロディもベースもハモもわかりやすいし、かなりイージーだぞ？　これくらいパパッと――」
「――だから、わかんないんだってば」
「……いろは？」

「……珠ちゃんにとってはできて当たり前のことでも、私には難しかったりするんだよ。これかなって悩んでみても、それが合ってるかどうか自分じゃよくわかんないし。さっきも、やっぱり間違ってたし。……そうだよ、誰でもみんな珠ちゃんみたいに音楽の才能があるってわけじゃないんだから……」

あれ、何言ってるんだろう私。

「……珠ちゃんからしたら信じられないだろうけど、そういう人っているんだよ。私みたいなの。今まではこういう具体的な話じゃなくて考え方の話とかだったから大丈夫だったけど、ちょっと難しい部分になるとすぐにこうなっちゃうんだ。でも珠ちゃん、たぶん私が今何に悩んでるのかよくわかんないでしょ？　珠ちゃんは音楽のこと全部わかってるし、何をやってもすごいから……こんな風にね、簡単なこともできない人だっているんだってこと、わかんないんだと思う」

え、何。何でこんなこと言ってるの私。

「はは……やっぱり私、向いてないのかなぁ。まぁそれはわかってたことなんだけど、でも、なんかちょっとその気になっちゃって、やってみようかなって思っちゃっただけなんだ。……でも、やっぱり私には難しかったのかも」

「……おい、さっきから何言ってるんだいろは。まだ始めたばっかりじゃないか。こんな簡単なところで向いてるとか向いてないとか――」

「だから！　簡単じゃないって、言ってるでしょ！　何回も言わせないでよ！」

「……！」

あ、怒鳴っちゃった。

「……ごめん、帰るね」

「おい……」

あ、帰るんだ私。どうするのこの空気。あ、でも帰ろう。うん。帰るしかないよね。

「おい、いろは。いろはってば！　待てって！」

「お邪魔しました」

私は、引き止めようとする珠ちゃんの手を振り切ってスタスタと玄関を歩き、そして珠ちゃんの家を出る。珠ちゃんはなんだか困った様子で何か言ってたけど、何を言ってたかはあんまり覚えてない。ただ、どうしていいかわからなかった私は、無言で家に帰った。

私って本当にダメだ。なんなんだろう。なんかもう、消えたい。

今日はここまで。

6日目

続く人と、続かない人の話・前編

CamScannerでスキャン

今日は久しぶりに、ウィンドウショッピングに来てる。クリスマスも終わって年の瀬の12月26日、イルミネーションがメリークリスマスからハッピーニューイヤーに変わっていく準備に慌ただしい街を歩きつつ、新しいコートとかを見たり、鞄とか見たり。まぁ、お金はないからホントに見るだけなんだけど。

「ウィンタースポーツフェア……」

ショッピングモールに軒を並べるスポーツ用品店の店先、ふと目に入ったウィンタースポーツのポスター。カッコいいウェアを着て雪の中でジャンプしてるモデルさんの笑顔が眩しい。カッコいいなぁ。スノボって楽しそうかも。スキーはあの棒のやつ、ストックだっけ？　あれが上手に使えなかったけど、スノボだったらできるかも？　スノボやってみようかな。

「……やっぱりやめとこ」

うん、やめとこう。なんかもうオチが見えてるし。っていうか、何もしないっていうのもアリかもね。なんか、いろんなことしなきゃいけないって焦ってたけど、よく考えたらその理由もよくわかんないし。そういう風にしなきゃいけない気がしてただけなのかもしれないし。

「……」

こういう気持ちはきっと、別に珍しいことじゃない。私みたいなのが普通なんだと思う。なんかそれっぽいことをやってみようとして、なんだかんだで結局やらなくなって、でもたまに気まぐれにまたなんかやってみようとして、そういうことの繰り返し。私は私らしい感じで、なんていうか、流れに任せてやっていくのもいいんじゃないかと思う。その方が自然な感じがするし。

「……あ。かわいい」

そんなことを思いながら何となくショッピングモールを歩いていたら、ふと目の前のワゴンセールの中に、ちょっと良いものを見つけた。クリスマスで売れ残ったのかな。トナカイのぬいぐるみ帽子。これ、珠ちゃんにあげようかな。あ。

「…………」

昨日から私は、珠ちゃんに連絡をしてない。今日も珠ちゃん家に行くはずだったんだけど、なんて言ったらいいのかわかんなくて、結局そのまま一日中外でずっとウロウロしてる。珠ちゃんからはメールとか着信が何度かあったけど、それも返事はしないまま。

「はぁ……せっかく忘れかけてたのに、この帽子見て思い出しちゃった」

……でも、楽しそうだったなぁ作曲。できるようになったらきっと楽しかったんだろうなぁ。トナカイの帽子を見ながら、私は改めて昨日のことを思い出してみる。やっぱり、

どう考えても一方的に私が悪い。何であんなこと言っちゃったんだろう。
「……いや、でも珠ちゃんの教え方だって、実際難しかったよね」
どうなんだろう。珠ちゃんの教え方は易しかったのかな。でもやっぱり難しかったし、あれはできる人向けのやつだよね。私の出来が悪いのはまぁ仕方ないとして、それだったらそれで珠ちゃんももっと簡単なことから教えてくれれば良かったのに……。
「はぁ……。なんか、疲れちゃったなぁ……」
ダメでもいいよね。別に。全部ちゃんとしてる人の方が珍しいんだから。大体、普通に考えて私が作曲家みたいなことするなんて変だったんだよ。向き不向きってものがあるし、創作は珠ちゃんみたいな本物の人がやるべきだと思う。私みたいな普通の人がちょっとやってみた程度でできることじゃない。普通に考えてそう。もし私みたいな人が簡単に作曲できちゃうなら、世の中は作曲家だらけだと思う。私と珠ちゃんじゃ違いすぎる。それがわかっただけでも、今回のことは良い勉強になった。
ああなんか、私、結局何も続かないなぁ。これを繰り返すたびに、どんどん自分が嫌いになる。今までなんだかんだ、笑ってごまかしてきたけど、そろそろくたびれたかも。
小さく呟く吐息が白く、雪が降り出した肌寒い夕方。ゆっくりと日は落ちて、街のイルミネーションには灯りがともっていく。キレイな景色なのに、なんだろうなぁ、全然

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

楽しい気持ちにならないや。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

家に帰った私は、まっすぐに自分の部屋に戻ろうとする。

「いろは、あんた今日どこ行ってたの？　珠ちゃん来てたわよ」

「……あ、うん。大丈夫大丈夫。そのあと会えたから」

「あらそう。あ、ストーブの給油しといてくれる？　お母さん今手が離せないから」

玄関に置いてあるポリタンクにストーブの給油タンクを寄せて、ポンプで注ぎ込む。石油の匂いが、もうすぐ今年も終わりなんだなってことを感じさせる。今年ももう終わり。来年は、何か新しいこと始めるのかな。まぁ、それは考えなくていっか。みかん食べよう。

……珠ちゃん来てたんだ。そういえば、たしかメールに「そっち行くぞ」みたいなこと書いてたっけ。既読にならないようにメールの最初のとこだけを通知で見たけど、無視しちゃってるしますます謝りにくいなぁ。

「……おなか痛い」

はぁ。やだなぁ。そうだ、なんか動画とか見よう。猫のおもしろ動画とか。お笑いの動画とか。

「……あははははは！　ふっ……ふふ！」

ああ、なんか私、こういうのでいいかも。自分の部屋でみかん食べながら、ネットとか見ておもしろいもの探して、宿題して、受験とかして、就職して、なんだかんだで結婚とかして、とか。そういう感じで普通にやれたらそれで十分だなぁ。だって楽しいし今。リラックスして、ノートパソコンいじって、うっかり夜更かししちゃって、みたいな。

「夢を持て」とかってよく言うけど、夢を持ってないのってそんなに悪いことなのかな。だって、ないんだからどうしようもないじゃない。私だって、好きで夢がない人になったわけじゃない。ないものはないし、どうしろっていうんだろう。もちろん、夢を持ってて一生懸命頑張ってる人を見たら羨ましいなって思うけど、だから私もっていうのはやっぱり無茶だよ。だって嘘なんだもん、そんなの。

ホットカーペットに寝転びながら、私は部屋の天井を見上げる。すると、視界の隅に入ってくる制作机。私の好きなものでいっぱいの、何も作られることのなかった〝制作机〟。結局はとんど使わなかった中古のキーボード。2〜3回くらいしか開いてない作曲の本。

「……珠ちゃん、きっと呆れてるよね」

今さら、自分の言った言葉が頭の中で繰り返してる。珠ちゃんはできない人のことわかってないとか、どうせ無理に決まってたとか、なんかもうダメな人丸出しなこと言った気がする。それに……最終的には逆ギレみたいなこともしたし。

……考えるのやめよ。なんか、あんまり考えたらうつになりそう。もっと気楽に、のんびり生きたいなぁ。

「……どうしたらいいの……」

ああ、ダメだ。考えちゃうなぁ。やめ！　考えるのやめ！　関係ないこと考えよ。漫画のこととか、なんかそういう関係ないこと。そういえばあの漫画の新刊って今月発売だったっけ。スマホ新しくしたいなぁ。あ、そういえば冬休みの宿題全然やってないや。もうすぐ元旦かぁ。っていうことはお年玉もらえるなぁ。いくらくらいもらえるだろ。

「………………」

ホットカーペットに寝転んだままの私は、そのまま眠りに落ちる。

このまま永遠に寝ていたい。

CamScannerでスキャン

■球磨とテニスラケットの話

いったいなぜ怒ったのか、あたしは真剣に考えている。けど、考えても考えてもやっぱりその理由はわからない。

「温厚だし短気でもないはずのいうはが、ああいう怒りかたをするのにはそれなりに理由があるはずだ……でも……なんなんだ一体……」

まさかだが、あたしは、また自分ではよくわかってないところで人に嫌な思いをさせてしまったらしい。あたしのどの言葉がいうはを怒らせたのか……何でもわかってるような口をきいておいて、いうはのことさえあたしにはわからないらしい。

その時、家の入り口掃除をしながら、あたしは考える、何がいけなかったのか……。

「おい球磨、これ、お前のだろ？　いらないよな？」

「ええ？」

親父の整理を[illegible]手に持っているのは、[illegible]かすかに見覚えのあるものだった。

「それは……いや——」

それは、ほとんど新品のテニスラケット。あたしが一番思い出したくない、絶対に触れてほしくない記憶を蘇らせるものだった。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「よしっ！　これで頑張って練習するぞ！」
これは、4年前の、中学1年生のあたしだ。今より髪は短かかったな。テニス部に入って1年経ってないくらいの1年生の終わり頃。ハッキリ言ってうまくはなかったけど、親が買ってくれた新品のテニスラケットを嬉しそうに握って、部屋でウキウキしてるところだ。
この頃のあたしは、今より友達も多かった。クラスで浮くなんてこともなかった。言い方はあれだけど、正直別に何も考えてなかった。ただ、何となく、何となく何かしてる、そういうよくいる中1のひとりだった、そんな気がする。
「テニスコートってどこにあるんだろ……？」
期末テスト前は土日であっても部活は休み。学校のテニスコートは使えないから、あたしは自転車で行ける距離にある公営のテニスコートを探した。たしか部活の一番うま

CamScannerでスキャン

い子がよく行ってるところがあったはずだ。

「西公園のテニスコート……ああ、そういえばあそこ、あった気がする。……予約とかは別にいらないのか。へぇ、軟球も置いてあるんだ。なるほど……」

新しいラケットに新しいシューズ。テストが終わってからやろうかとも思ってたけど、新しい道具を使うのが待ちきれなかったあたしは、勉強は夜にやると言って、テニスコートに出かけた。

ちなみにあたしは、さっきも言ったけどテニスはうまくない。実を言うと、部活をやめようと思ったことも何度もある。けど、もうちょっとやってみればって言う親の言葉や、あたし自身の気持ちの上下とかもありつつ、ギリギリ続けている。試合には勝てないし、うまい子はホントにうまくてあたしなんかじゃ手も足も出ない。部活は走り込みや球拾いが多くて、実際ラリーをやる時間っていうのもかなり少ない。けど、やってる。こういう基礎練や球拾いだって、きっと何かの役には立ってるんだろうし。

「……おお、西公園のテニスコート、なんか充実してるなぁ」

初めての公営テニスコートは、自然が多くて良い感じだった。学校とは違った、なんかちょっと大人っぽいっていうか、グッとドラマチックな感じ。ここでいっぱい練習し

て、実は超うまくなってるとか、そういうのできたりするかな。なんて。
「サーブの練習を死ぬほどやろう。今日で超うまくなるぞ」
ひとりで来てるから、できる練習も限られる。けど、あたしにとってはちょうど良い。あたしはもともとサーブが苦手で、サーブが入らないまま相手に点を与えてしまうこともよくあるノーコンだった。トスを上げてラケットに当てて相手のコートに入れる。ただそれだけの動作なのに、あたしにはこれがかなり難しく感じた。面の部分じゃなくて柄の部分に当たることもよくあるし、面に当たっても上の方に当たってホームランみたいになっちゃうこともよくある。だから今日は、サーブの練習。別に鋭いサーブとかじゃなくていいから、ちゃんとコートに入るサーブが打てるようになりたい。

フォルト、フォルト、空振り、入った！　フォルト……こんな感じ。5発1中。まさにあたしって感じだ。7割か8割でとりあえず相手のコートに入ってくれれば、もう少しまともになるんだけどなぁ。
「ふぅ……」
30発打つと、飛び散った球を拾い集めてもう一度。この動作がなかなか手間だけど、これはこういうもの。

〈やっぱりそろそろ帰ろうかな……〉

いや、まだやろう。まだ来たばっかりだし。あと3セットくらいはやろう。それくらいはやらないと練習したって感じしないし。

そしてあたしは、それからまた数セット、サーブの練習をする。入ったり、入らなかったり。特にこれといって上達してる感じはしないけど、こういうのは積み重ねだし、続けてればきっと少しずつうまくなる、そういうものだと思う。すぐにうまくなろうとするっていうそういう考え自体がダメだ。努力するってこういうことだし、積み重ねてれば、たぶんどこかの瞬間でコレだ！ってひらめいたりとかするんだと思う。

「ふぅ。……ん？」

練習をする私を見つめてる人影がひとつ。それは、部活仲間のひとり、一番うまい子だった。

「あ、やぁ……」

「黒白、珍しいわね。こんなところで会うなんて」

「え？　そうかな？」

印象的な黒髪ロングの同級生。あたしは、この子が苦手だ。1年の中でもズバ抜けた実力を誇る彼女は、2、3年の先輩たちも平気で打ち負かしてしまう全国レベルのテニス

CamScannerでスキャン

少女だった。たしか母親がかなり強いテニスの選手とかで、物心ついた頃からずっとテニスをしてるんだとか。顧問の先生も、この子についてだけは明らかに特別お気に入りって雰囲気だ。あともうひとつ言っておくと……。

「ヘタクソの練習って、見てるとこっちまでヘタになりそう」

ビックリするくらい性格が悪い。

「うるさいなぁ。いいだろ別に」

あたしは、ちょっと気を張りながら言い返す。実際のところ、たしかに有頂天(うちょうてん)になっていいくらいにこの子はうまいし実績もすごい。けど、今のひと言はないだろ。

「私が教えてあげましょうか？」

「いいよ、自分でやるから」

こいつに教わるくらいなら、自分でやる。

「ふうん、うまくなれるのに」

「好きにやってるんだからいいだろ。放っといてくれよ」

「あらそう。ところで私、今日これから友達とここで練習するんだけど、どいてくれないかしら」

「はぁ？」

「コート空けてって言ってるの」
「いや、今あたしが練習してるんだよ。見ればわかるだろ」
その言葉を聞くと、あいつは露骨に鬱陶しそうな顔をして、苛立ちながら言う。
「……大体あんた、別にテニス好きじゃないでしょ？　邪魔だからどいてよ」
「テニス好きだよ。別にいいだろ練習しても」
あいつはあたしを見つめて、ひとつため息をついてから言う。
「……はぁ。よくいるのよね。別に好きでもないのに何となくコート使ってる人。普通に迷惑なんだけど」
「いや、好きって言ってるだろ。何勝手に決め付けてるんだよ」
「あーはいはい、好きなのね。そのわりに全然ヘタクソだけど」
「好きかどうかと、うまいかどうかは関係ないだろ」
「関係あるわよ、何言ってるの？　やらされてる人と、やりたくてやってる人と、どっちの方がうまくなるかわかる？　っていうか、何で別に好きじゃないのにテニスやってるのあなた？」
「だから、好きだって言ってるだろ！」
「あーそう。じゃあテニスの楽しさって何？　具体的に言ってみてよ。私はテニスが好

CamScannerでスキャン

きで好きで仕方なくてもうテニスのことしか考えてないくらいテニスが好きなんだけど、あなたももしかしてそうなの？　違うわよね。ねぇ、あなたはテニスが好きなの？　それとも──ただラケットを持ってる自分が好きなの？」

「……」

「あなたってどうなの？　私にはどうも、あなたはただラケットを持ってるのが好きなだけの別にテニスなんて好きじゃないやつで、気まぐれにコートに来てみたってだけの人に見えるんだけど、間違ってる？　間違ってるならごめんなさい。普通に謝るわ。けど、あなたがテニスを好きなわけがないのよ。ガットの換え方すらろくにわかってないあなたが、うまくなりたいとか、テニス好きとか、ウソ丸出しのことを言ってるのって、なんかバカにされてるみたいでカンに障るのよ。そんなあなたが私の大好きなテニスコートを平気で占領してるのとか、普通にムカつくんだけど」

「……ここはみんなの共用コートだろ。お前の私物じゃない」

「ああもう嫌、話になんない。私はそういうことを言ってるんじゃないの。もういいわ私帰るから。心ゆくまで自己満足してちょうだい……頑張ってる人になりたいだけの、無駄な努力で自分に酔ってればいいじゃない」

「……無駄かどうかなんて、わかんないだろ」

「バカね。努力してる時点で、向いてないのよ。だって私、こんなにうまいけどテニス頑張ったことなんて1回もないもの。じゃあね」

「………」

それだけ言い残して、あいつは立ち去った。

「……なんだぁあいつ。バッカじゃないの」

あたしが精一杯出した返す言葉は、そんなどうしようもないひと言だった。

あたしは、そのままコートでひとり、サーブの練習を続ける。球は狙った方向に飛ばないし、5球に1回くらいはラケットにすら当たらなくて空振りする。

「ふう。1年やって、これだもんなぁ。けど大丈夫。頑張ればきっと、あたしだって……」

心の奥で、何かがこみ上げてくる。けど、それだけは認めない。絶対にだ。だってそんなこと認めちゃったら、あたしはもう、どうすればいいんだ。

ガシャン、と狙いを外しすぎたサーブは地面どころか、金網に当たった。

「………」

「……っ！」

あたしは乱暴に球を握ると、力任せにもう一球打つ。デタラメな方向に飛んでいった球は、またガシャンと金網を鳴らす。そして、必死に抑え込んでいた言葉が、喉の奥から出てきてしまった。

「……頑張りたいと思って何が悪いんだよ。頑張ってる時点で向いてないだって？　じゃああたしは、これ以上どうすればいいんだよ。頑張るくらいしかできないのに……あんたに何がわかるんだよ……！　あたしだってなぁ！　何か楽しいこと見つけたいんだよ……！　でも……どんなに探しても探しても見つからないんだよわかったようなこと言いやがって！　あんたは良いよな！　見つかったんだろ!?　いいじゃんか楽しそうで、あんたのこと心から羨ましいって思うよ。逆にあんたはあたしのことみじめだって思ってんだろ？　……でも……あたしのことバカにすんなよ……。あたしだって……そういうのあったらいいなって……ずっと思ってて……。向いてないってわかってるテニスだって頑張ってやってるんだ。向いてないってわかってるのにラケットだって買ってもらったんだ。シューズも買ってもらったんだ……。練習も、あんま楽しくないけど毎日頑張ってるんだ……。これ以上どうしろっていうんだよ……。お前わかんのかよ……向いてないのに、うまくならないのに、それでも何かしなきゃって思ってラケット振ってるあたしの気持ち、あんたわかんのかよ……！」

CamScannerでスキャン

あたしの、震えた涙声が、テニスコートに響いていた。
そしてあたしは、その翌日にテニスをやめた。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「……そっか、あたしってそういえば、そうだったな」
深夜0時。ほとんど新品のテニスラケットを抱えながら、あたしは思い出している。
あたしは、そういうやつだった。この件があってからというもの、自分の中でテニスって言葉はタブーになった。記憶の奥に閉じ込めて、触れないようにした。
あたしにとっての幸運は、その翌年の中2の頃に音楽に触れたことだった。それから一気に何かが始まって、生まれて初めて夢中になって、脇目も振らず作曲して、気付いたらもうすぐ3年も経っていて、今みたいな性格になった。
クラスメイトとうまくいかなくなったのも、よく考えたらちょうどその頃からだ。以前はクラスメイトともそれなりに普通の関係でいれたけど、この頃を境にあたしは、まるであいつみたいに何でも端的に、理路整然と切って捨てるような物言いになった。それは、夢中になれるものを見つけたことであたしの中の何かが大きく変わったからなん

CamScannerでスキャン

だろうと思う。きっとあたしは、あいつの言葉をどこかで正しいと思ってたんだ。あいつはたしかに嫌な奴だったし、思い出した今でもやっぱり好きにはなれないけど、全部が間違ってたわけじゃない。実際、反論できないからこそあたしはあんな気分になったんだ。

……あたしは、いろはの気持ちがわからなかったんじゃない。ただ思い出したくなかったんだ。音楽をやる前の自分がどんなやつだったのか、すっかりなかったことにして。

……何でこんな当たり前のことに気付かなかったんだろう。

「あゆのの時か……」

いろはがあの日、どういう気持ちで作曲をしたいと言ったのか。そして何に不安を感じて、あがいていたのか。あたしはそれをわかっていなかった。

今から行くのはさすがに迷惑か。いや、会えなかったら会えなかったでもいい。とにかく行かなきゃ。今すぐに、いろはに話さなきゃいけないことがある。

CamScannerでスキャン

6日目

続く人と、続かない人の話・後編

CamScannerでスキャン

「——ん……」

痛たた。背中痛い。ちゃんとベッドで寝れば良かった。あれ？　あ、毛布。お母さんかな。部屋の電気も消してある。パソコンはつけっぱなしだけど……。

「……」

私はボーッと、暗い部屋を見上げつつ携帯をいじる。今何時なんだろ。あー。1時かぁ。真夜中だ。あと……珠ちゃんから着信1件。メールも来てる。

「………」

あんまり長いことスルーするのもあれだし、読まなきゃダメだよね。なんて書いてあるんだろう。でも珠ちゃんだし、実はあんまり怒ったりはしないかも？　そうだよね……でも、怒ったりはしてないだろうけどきっと呆れてるだろうなぁ。珠ちゃんから見て私って、わりとホントにどうしようもない奴って感じだろうし。ああ、読みたくないなぁ。なんか、珠ちゃんにグサッとくること言われたら立ち直れそうにない。

「……ふぅ。読も」

私はちょっとした決心をして、メールを開く。

『いろは、今日は来ないのか？』

『昨日のことなら気にしなくていいぞ』

……………。

『もうちょっとわかりやすいやり方考えてみたから、今日も続きやろう。3時頃うちに集合な！』

『メールが既読になってないみたいだし、電話してみたけど繋がらなかったから、ちょっとそっち行くぞ』

何で。なんなの珠ちゃん。どう考えても悪いのは私なのに。何で……。

『今外にいる』

今外にいるって、そっか。珠ちゃん昼頃待っててくれてたんだよね。……？　あれ？

このメール……届いたの1時間前……？

「外にいるって、もしかして……」

私は、何となくよぎった予感に顔を上げる。珠ちゃんならありえる。

「今、外にいるの……？」

2階の私の部屋の窓から玄関口の方を見る。するとそこには、珠ちゃんの自転車。玄関の石段のところでコートを着て座っている人影がひとつ。私は大急ぎで階段を駆け下

りると、玄関のドアを開けた。
「珠ちゃん!?」
「……ぉ……。よぉ～ぃろは……ご、ごこんばんわぁ……」
キンと肌を刺す冬の深夜の路地、薄く雪が積もっている中、珠ちゃんは震えながらコートにくるまっていた。
「何してるの!?」
「何って、そ、そりゃ、待ってたんだよ。ズビビ…… 夜だからインターホン押すのはあれだし、出てくるかもしんないから、……もう帰ろうかと、ぉ、思ってたけど……」
鼻水をすすりながら、珠ちゃんがニッコリ笑っている。
「とにかく入って！」
「え、でも夜中だぞ？」
「関係ない！　早く！」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

夜中だから静かに、私の部屋に珠ちゃんを案内する。部屋のストーブを強くして、雪

に濡れた珠ちゃんのコートを乾かしながら、ホットミルクを入れて珠ちゃんを迎えた。
「あったかい！　うまい！　やっぱり冬はホットミルクだよな！　あ、いろは、ハチミツある？」
「え、あるけど？」
「お、ちょっともらえるかな。ホットミルクにハチミツを入れると超おいしいんだぞ！」
「そうなの？」
「ああ。それに白糖より自然な甘さだから体にも良いんだ。太りにくいしね」
「へぇ～。そうなんだ。はいこれ。どれくらい入れるの？」
「お好み」
「……あ、ホントだおいしい。なんか急にリッチな飲み物みたいになったね！」
「だろ～！　あたしこれ大好きなんだよね～♪　ちなみにこの飲み物の名前はハニーハニーエクセレント牛乳スペシャルだ」
「名前大袈裟だね～」
「それくらいおいしいだろ」
「うん」
「………」

「……あの、珠ちゃん」
「なんだ?」
いつものテンションの珠ちゃん。私は、どういう言葉から切り出せばいいのかわからず、喋ろうとしては止まって、でも何か言わなきゃいけない気がしてまた喋ろうとする。
「……あの……その……」
「ん?」
「昨日のこと、ごめんね」
「ああ、気にするな。あたしも悪かったよ」
はぁ。良かった。ちゃんと謝れた。そうだ、この流れでちゃんと言わなきゃ。
「ねぇ珠ちゃん。私から言い出したことなのにこういうこと言うのはめちゃくちゃなんだけど、やっぱり私、作曲はやめとこうかなって思ってるんだ」
「そうなのか」
「うん。まだ1週間も経ってないけど、珠ちゃんの話いっぱい聞いて、ちょっと手に負えないなってわかったから……。でもね、それがわかったからむしろ良かったんじゃないかなって思ってるんだ。だから、ありがとう珠ちゃん。自分でわかったんだ。珠ちゃんが思ってる以上に私ってダメな――」

「ダメじゃないぞ」

「……え？」

鼻水をすすりながら、力強い目と声で、珠ちゃんはまっすぐ私を見つめながら、続ける。

「いろは、お前は大丈夫だ。何でかって言うとな、あたしだって同じだったんだよ」

……いや、それはない。それは違うよ珠ちゃん。

「同じじゃないよ。珠ちゃん。私と珠ちゃんじゃ全然違うって、それくらい私でもわかるよ……」

「いや、同じだ。本当に本当に、同じなんだ」

繰り返して、少し目を伏せながら、らしくもなく自信のなさそうな声で珠ちゃんは続ける。

「……あたしさ、テニスやってたことあるんだ。誰がどう見ても下手で、実は大して好きでもなくて、でも、それでもやってみようとしたんだ」

「テニス……？」

少し言いにくそうに、珠ちゃんは言う。

「……結局、いろいろあってテニスはやめた。よくある話だけどさ。やってみようとして、挫折して、自分を嫌いになって……。

あたしにとってテニスは、嫌な思い出のままだ。

誰にも触れてほしくない、一番思い出したくない自分だ。……今のあたしからじゃ想像がつかないだろ？　けど、そうだったんだ。あたしも、いろはと同じだったんだよ」
「たしかに、珠ちゃんぽくないね……」
なんだか、いつもと感じが違う。いつもの自信満々の珠ちゃんじゃない、なんていうんだろう、言い方はあれだけど、すごく普通な女子高生みたいというか……。
「珠ちゃんがそういう話すると、なんか変な感じだね。なんていうか……その」
私っぽい。でも、そう言ったら失礼じゃないかな。珠ちゃんは私なんかとは全然違う、すごい子なのに…。
「いろはっぽい、だろ？」
「えっ……」
「な。あたしも、いろはっぽいとこあるだろ？　あたしだって、生まれつき自信満々だったわけじゃないし、やりたいことを最初から見つけてたわけでもないんだ」
「……うん」
変な感じ。弱気な目に、自信なさげな声。不安定な感じの、普通の……。うん。そう、普通。急に珠ちゃんが、私と同じ普通の女子高生のように見えた。
「だからこそあたしが言いたいのは、いろはに聞いてほしいのは、ここからなんだ」

CamScannerでスキャン

顔を上げて、明るい声で珠ちゃんが喋る。
「あたしがその自己嫌悪スパイラルから抜け出せたのは、『嫌いにならないところまでとりあえずやる』っていうことを1回やり切れたからなんだ。どんなスポーツも、創作も、遊びも、最初は難しくて本当のおもしろさなんて絶対にわからない。でも、そこでやめたら、ただそれを嫌いになるだけじゃなくて、自分のことまで嫌いになる。だから、ちゃんと遊び方を覚えて、何がおもしろいのかをちゃんと理解して、それでもつまらないと思ったならその時はやめればいい。そう決心して、あたしが初めてちゃんとできるようになったのが、作曲だったんだ」
「……そうだったんだ」
「きっとあたしは、放っておけなかったんだ。いろはが自分に見えて。あたしも不思議だったんだ。何で面倒な作曲レッスンなんか引き受けたんだろうって。あたしは、昔の自分みたいな誰かをどうしても放っておけなくて、だから作曲を教えようとしたのかもしれない。……最終的に、やり方を覚えたとしてもやっぱりどうしても夢中になれないものだってあると思う。けど、楽しさもわからず嫌いなままで終わるなんて、そんなのつまんないだろ。だからさ、その……」
珠ちゃんは、少し目を泳がせながら言う。

「……どうまとめればいいかわかんないんだけどさ……またあたしん家に来いよ。待ってるから」

「……うん」

私は、勘違いしていたのかもしれない。できる人は最初からすごくて、別に悩むこともなくどんどんうまくなっていくものなのかと思っていたけど、たぶん、どうやらそうじゃない。こんな風に、誰だってみんな同じように悩んで、同じように自分を嫌いになったりしながら、それとひとつずつ向き合っている。

珠ちゃんがすごいのは、作曲ができるとかできないとか、そういうことじゃなかった。好きな自分、夢中な自分を見つけるために一生懸命やれるその気持ちの強さが、珠ちゃんのすごさだったのかもしれない。

私には、そういう気持ち。まだ残ってるのかな。わからないけど……。

珠ちゃんが背中を押してくれるから、もう少し頑張ってみようと思う。

今日はここまで……！

珠美のひと言

快適な耳コピのために

耳コピのコツというか、道具についてちょっと言及しよう。
耳コピは、やってみたらわかると思うけど、同じところを何回も何回も巻き戻して聴き直す。その作業がストレスなくスパッとやれる、気になる場所をすぐに再生できるっていう手軽さが、「耳コピって遊び」をもっと快適にするものだったりする。

あたしは、たとえばマウスのスクロールボタン（コロコロして画面スクロールするやつね）の設定をちょっといじって、音楽プレイヤーの再生位置とスクロールボタンをリンクした状態にして、さらにスクロールボタンを押し込むと曲が再生／停止するようにしてたりする。この設定をすると、指１本だけで再生位置を好きなように移動させて再生と停止をパパッとやれちゃう。
これは多少パソコンに詳しい人のやり方ではあるけど、もし周りにそういう人がいるなら、「本にこう書いてるんだけど、こういう設定ってできる？」って聞いてみるのもいいかもね。
ちなみにヘッドホンは安物でもいいけど、それだと音がモコモコして聴き取りにくいこともあるから、なるべく音がクリアに聴こえる「モニター用」ヘッドホンを選んだ方がやりやすいかな。『HPH-MT220』（ヤマハ）や『MDR-CD900ST』（ソニー）などがおすすめだ。

よくわかんないとこまでいっちゃってた

CamScannerでスキャン

7日目

最初の壁を越える話

CamScannerでスキャン

一夜明けて。薄く降り積もった雪に気持ち良いキンと冷えた風。そこに差し込むのは、雪を照らし返す太陽の光。心機一転、もう一度頑張ってみることにした私は、この前より少しドキドキしつつ、でもやっぱりちょっとだけ不安もありつつ、自転車をこいでいる。私が作曲をしようと思った時に欲しかったものが、この壁の向こうにあるのかもしれない。もしかしたら違うのかもしれないけど、それをたしかめてからじゃなきゃやめられない。珠ちゃんの言った言葉を思い出しながら坂を上がり、坂を下り、時刻は朝10時。もうすぐ珠ちゃんの家。

『ピンポーン』

「……あれ？」

『ピンポーン』

「…………」

反応がない……？　留守なのかな？　でも10時って約束だったと思うんだけど……？

私は、昨日の珠ちゃんからのメールを確認してみる。うん、間違いなく10時だよね。寝てるのかな？　あ、珠ちゃんからメールだ。

『ごめん、開いてるから入って』
ん？　何でメールなんだろ。あ、ホントだ開いてる。
「お邪魔しまーす……？　あれ？　家の人はいないっぽい？　まぁいっか。とりあえず珠ちゃんの部屋に行こ」
階段を上がって廊下の奥の部屋、ある意味ではあんまり珠ちゃんっぽくないかわいいレタリングの文字で『たまみのへや』と書かれたプレートの扉を開けてみると、珠ちゃんはベッドで寝たままだった。
「おはよ～珠ちゃん」
「おぉ……いろはか……ゴホッ……ケン！　ケンケン！　ごべん、ティッシュ取って」
「珠ちゃん⁉　風邪ひいたの⁉」
「え？　いやぁ違うよ。ただ頭がフラフラして吐き気がして体が熱いだけだ。なんかテンション上がってるのかなぁあたし……ゴホッ……」
「それを風邪って言うんだよ！　ああ……昨日のが原因だぁ……ごめんね珠ちゃん……！」
「何⁉　これが噂の風邪なのか⁉　ゲホッ！」
「珠ちゃん、もしかして風邪ひいたことないの……？」

「うん。風邪って、ズル休みの暗黙の了解みたいなやつだと思ってた……なるほど、これが風邪なのかぁ……ウップ……」
「わあああ！」
「ごめ……トイレ……」
「トイレまで我慢してね！　うわああ大変だぁ‼」

——そんなこんなで。

汗でびっしょりだったパジャマを別のパジャマに着替えさせて、毛布も押し入れにあるやつに変えたりしつつ、大急ぎでコンビニで風邪薬とスポーツドリンクをたくさん買ってきて、部屋をあったかくしたり、氷水を作ったりいろいろしてるうちに時刻は11時過ぎになっていた。
「……まさかあたしが風邪になるとは……このまま死ぬのか……？　まだやり残したゲームがたくさんあるんだ……」
「風邪くらいで死んだりしないから大丈夫だよ。熱は結構あるけど……38度かぁ。ごめんね。私のせいで風邪ひいて……。ところで、家の人は？」

「……お父さんは山へ芝刈りに、お母さんは銀座のセレブなパーティに……」
「お父さんなんだか可哀想だね。……で、ホントはどうしてるの？」
「お父さんは仕事で、お母さんは年末忙しい系のパートに行ってて夜まで帰ってこないっぽい」
「じゃあ今日は私が夜まで看病してるから、大人しく寝てるようにね？」
「うーん、つまんないなぁ」
「悪くなったら明日も風邪のままだよ。寝て治さなきゃ」
「むむむ……」

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

しばらくすると、珠ちゃんはようやく寝てくれた。それにしても、今まで風邪をひいたことないって一体どういう体なの珠ちゃん。健康優良児すぎる……。まぁでも、こうやって寝てる様子を見ると、実は普通に私と同じような女子高生のひとりなんだなぁと思う。喋ってることが達観（たつかん）しすぎてててたまに忘れるけど、そういえばそうだった。
改めて、昨日珠ちゃんが言った「あたしも同じだったんだ」っていう言葉を思い出す。

珠ちゃんも、私と同じように夢中になれることを探して、自分のことを嫌いになったりしながら、好きなこと見つけたんだよね。だったら私も、もしかしたら何か見つけられるのかな。

珠ちゃんの制作机の方に目をやると、つけっぱなしになっているパソコンのモニターには音楽ソフトの画面。仕事中だったのかな。……と思って画面をよく見てみると、それは私が途中まで耳コピしてた曲のデータだった。

「……そっか。私が来るから用意してくれてたんだ……」

でも、音出したらダメだよね。今日はお休み。

「ぐふふふ……さんじゅっこもむりだよぉぐふ……いいのか？」

「え？」

「たいへんだぁ……むにゃむにゃ……ほっぺたが……おちてしまう……」

……なんだ寝言か。なんか幸せそうな夢みてるなぁ。何食べてる夢なんだろ。

「……しっぽのところはダメだってぇ……生クリームがいちばん……」

「しっぽ⁉　生クリーム⁉　ホントに何食べてるの⁉」

ああ、寝ててもこれだもんなぁ……やっぱり珠ちゃんは普通じゃないかも……。

水が溶けてぬるい水になったアイスバンドを外して、冷やしてあったやつに替える。

ゴソゴソしてると、珠ちゃんは目を覚ました。
「いろは、パソコン……」
「ん？　どうしたの？」
「パソコンだけど」
「ああ、消しとくね」
「じゃなくて、耳コピやりやすいようにしといたから、やってみて」
「え……？」
「そこにヘッドホンあるから、ヘッドホンでやって」
「あ、えっと……うん……？」
そう言うと、珠ちゃんはまた眠った。今日はもうずっと看病だけしとこうかと思ったんだけど……うーん……。まぁ、そっか、ヘッドホンならうるさくないし大丈夫かな……？
寝息を立ててる珠ちゃん。元はと言えば私のせいでこうなってるわけだし、珠ちゃんが寝てる間にできるだけのことはしておこうかな。うん。できなくても、とりあえずやってみよう。
私は珠ちゃんの机に座ると、音楽ソフトを使ってこの前みたいな感じで耳コピの続き

CamScannerでスキャン

を始める。スピーカーは切ってあるみたい。再生してみると、ヘッドホンから音が出ていた。
「あれ……？」
なんか、意外と聴き取れる……？　ベースがわりと聴き取れるっていうか、結構ハッキリ聴こえる。これって、ヘッドホンだから？　あれ？　え？　うわぁ。聴こえる！
これだったら大丈夫かも!?
「やりやすいようにしといたって……こういうことなのかな……？」
うん。やっぱり聴きやすい。前は何となく鳴ってるかなって感じくらいだったのが、たしかにもっとハッキリと聴こえる。あとはこれに合ってる音をどんどん打ち込んでいくだけなんだろうけど……うん。これならなんとかやれるかな。やってみよう。
すでに打ち込み終わってる《カントリー・ロード》のメロディに、ベースの動きを打ち込んでいく。合ってるのか間違ってるのかについては、あんまり深く考えない。まず最後まで、間違っててもいいから打ち込んでみる。そのあとでもっとちゃんと見直すればいい。まずはやり切るのが大事だ。それに、たしかに合ってる部分っていうのもちょっとわかる気がしてきた。このサビの部分のとこ、この音だよね。こういうのをハモってるっていうのかな。絶対この音で合ってるよね。なんかバッチリはまってるっていうか、気

持ち良い感じ。あー でも、サビのあとのところのここ……わかりにくいなぁ。何回も聴いたらわかるかな。ここはいいや。後回し。わかるところから順にやっていこう。あ、そっか、1番と2番あんまり変わんないんだね。ちょっと違うところもあるかも？　へぇ。なんか2番の方が動いてるなぁ。でもカッコいいかも。

「!」

この前珠ちゃんが言った、音楽の聴き方。それぞれのパートを聴き分けられると楽しくなるっていうあの話、もしかしてこういうことなのかな。なんか、今までは音楽って一個の塊（かたまり）みたいな感じだったんだけど、こういう風に聴いてみたら何個かのメロディが重なって……なんか、上手に言えないけど、キャッチボールっていうか、会話っていうか、なんかそういう感じがちょっとわかるかも。あ、ごめん。今の珠ちゃんの真似で言ってみただけだ。でも、わからなくはないかも。このハマり方じゃないと気持ち良くないっていうの、なんかあるっぽい。

……耳コピ難しいとこ、間違ってても別にいいかも。気持ち良い感じに聴こえる音だったらそれでとりあえずオッケーってことにしちゃおうかな。そういう適当なのってダメなのかな。

「……」

CamScannerでスキャン

私は、珠ちゃんの方を見てみる。たぶん珠ちゃんならどう言うだろ。

「大丈夫なんだよね。私が好きだって思ったんだから」

間違っててもいい。間違うことより、やらないことの方がダメだって、もう私はわかり始めている。最初から間違わないなんてことの方が無茶なんだから。間違ってることを恐がらないで最後までやってみよう。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

耳コピをしながら、たまに珠ちゃんのアイスバンドを変えて、それからまた耳コピをする。速いペースじゃないんだろうけど、それでも、1日中それを繰り返していたら、いつのまにかベースの耳コピは終わっていた。メロディとベースが耳コピできているデータを何度も聴き直して、ふたつのメロディが気持ち良く絡み合ってるのを改めて感じてる。

「……いろはぁ……」

「あ、何？　珠ちゃん」

私は、ヘッドホンを外して珠ちゃんに振り返る。

CamScannerでスキャン

「お腹減った……」
「うん。りんごむこっか」
私は、買ってきておいたリンゴをむいてお皿に入れ、つまようじを刺して部屋まで運ぶ。
「病人ってあれだな、何でもやってもらえて超ＶＩＰだな」
「あはは、その代わり吐き気とかするけどね」
「吐き気さえなければ最高だな。今度から怠けたい時は病気のフリしよう」
「……それを仮病って言うんだよ」
「ああ、なるほど、仮病って最高だな」
リンゴを食べながら、体温を計り直す。熱は37度強のまま。まだもう少し休んだ方が良さそうかも。
「食べたらまた寝てね」
「ええ～。つまんないなぁ」
「風邪の人はいろいろやってもらえる代わりに、ちゃんと寝なきゃいけないんだよ。あ、ところで珠ちゃん……」
私は、ちょっとドキドキしながら言ってみる。
「私、ベースの耳コピできたかも」

「えっ　ホントか？」
「うん。耳たぶちゃんが寝てる間にやってたんだ。なんかちょっとコツがわかった気がする。っていうか、音程を掴めてきたかも」
「そっかー！　やったなあいつは！」
「うんー！　なんか不思議なんだよね。昨日は全然わかんなかったのに、今日やってみたら感覚を取れたっていうか、なんかできそうな感じしたっていうか」
「それはな、実はちょっと秘密があるんだよ」
「え、そうなの？」
「うん。昨日は音源を再生してそれを耳コピしてたけど、あれはよく考えたら練習曲っていうか、あたし向けだったんだ」
「そうなんだ……」
「それでさっきは、あたしが練習の曲をやって耳コピしたのを思い出してみたら、キーボードで耳コピって取りにくかったなって思い出したんだよ」
「そっか！　ヘッドホンでやってたら、なんか全然聴き取れたー！」
「まあ、確かにスピーカーで全体的に鳴らすよりは、ヘッドホンの方がやりやすい
っていう意見もあると思うよ。それぞれかな」

「まだあるの？」

「うん。もうひとつは、これは音楽ソフトの方でやっといたことだけど、再生速度をちょっと遅くしたんだ」

「そんなことできるんだ！　っていうか……そんなことしてたんだ……気付かなかった」

「まぁ、最初はそんなもんだよ。再生速度を80パーセントくらいにして、普通よりゆっくりな感じにしといた。そしたら、速い動きのところもちゃんと耳で追えるしね」

「うん、なんでか聴き取りやすくなってたのはそういうことだったんだね」

「さらにもうひとつ」

「まだあるの？」

「うん。これも音楽ソフトの方でやったことだけど、〝イコライザー〟っていう聴こえ方を設定するやつで、低音の音量を大きくしといた」

「そんなこともできるんだ！」

「うん。ヘッドホン、再生速度を下げる、低音を上げる。この3つを用意しておいたから、たぶん前より断然耳コピしやすかったと思う」

「……な、なるほどぉ……」

そっか、そんなにいろいろやってくれてたんだ。どおりで、別にそんなに成長してなかっ

たはずの私でも耳コピできたはずだよね。
「でもいろは、じゃあちょっと……よっと、おっとっと、失礼。これをこうして……」
珠ちゃんはベッドから起き上がると、パソコンの音楽ソフトをいじる。
「さぁ、これでもう一度耳コピしてみるといい。その聴きやすい設定を全部一昨日と同じ状態に戻した」
「え、それじゃちょっと難しいんじゃ……？」
「それがね、そうでもないんだよ。一度聴き取れたらもう捕まえたのと同じなんだ。もういろはは、この普通の状態でも耳コピできると思うよ。やってみればわかる」
「う、うん……」
私は、珠ちゃんに促されて曲を再生してみる。ヘッドホンから聴こえてくる曲は、たしかにさっきよりほんの少し速く感じるし、低音もさっきより小さめに聴こえる。……けど。
「珠ちゃん、聴き取れるね」
「だろ」
ベースが聴き取れるようになってる。曖昧だった音が、どういう音で鳴ってるのか、完璧じゃないと思うけど前より全然わかるようになってる。

「ありがとう珠ちゃん！」
「どういたしましてだ！　ところでぉ……ちょっと寝る……吐き気するかも……」
「ああ！　ごめん珠ちゃん！」
「いいってことよ。寝たらたぶん大丈夫」
「うん。こっちはこのままやっとくから、しっかり寝ておいてね」
「あたしが次に起きる頃には、ベース以外の音も全部耳コピが終わってるのか！」
「……それはちょっとキツいかも……？」
そんな冗談を言いながら、珠ちゃんの看病と耳コピを繰り返す一日。ベース以外の音はどれが何なのかよくわかんないけど、とりあえず聴き取れそうなやつだけちょっと耳コピした。
夕方になって家の人が帰ってくる。その頃には珠ちゃんの熱は平熱に近いとこまで下がっていた。帰り道、珠ちゃんの助けはあったとはいえ、自分で掴んだ感覚がなんだか嬉しい。音が重なる気持ち良さのことが、少しだけわかった気がした。

今日はここまで！

CamScannerでスキャン

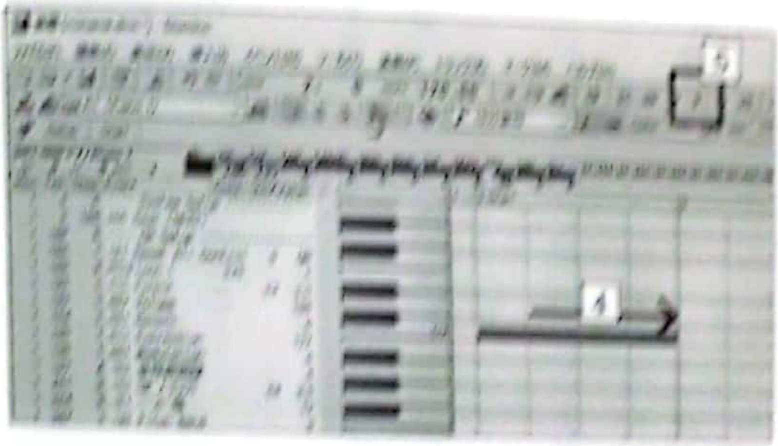
コラム

作曲ソフトの操作

DTMの基礎「打ちこみ」に挑戦してみましょう！

たとえば「Domino」を立ち上げると、鍵盤が縦に表示されています①。この鍵盤の部分を、「エンピツ」ツールを選択し②、クリックすると音が出ます③。下は低い音で、上に行くほど高い音が出ます。鍵盤の右にある横軸は時間（または小節）を表していて、バーが長いほど音は長く鳴ります。鍵盤の右部分、「C2」の１小節目の先頭をクリックしてみましょう。指定した音色が鳴ります。

次に、先ほど入力したバーの右端を２小節目の頭までドラッグします④。そして「再生」ボタン⑤を押してみると、低めの「ド」の音が１小節鳴ります。あとは、自分の好きな長さ、高さの音を自由に入力してみましょう。



ちなみに、バーを入力した部分のことを「ピアノロール」と言います。Macの「GarageBand」でも見方や使い方は同じです。詳しい使い方はインターネットなどで「○○（ソフト名） 使い方」などで検索するとたくさん出てきます。

CamScannerでスキャン

8日目

耳コピ最大の難関の話

CamScannerでスキャン

「んー♪　んー♪　どぅん♪　ドゥードゥードゥン♪」

「ご機嫌だないろは」

「え？　そうかな～♪　なんか昨日から頭の中でずっとベースが鳴っちゃってて……」

「あー、あるある。それね、作曲するようになったらもっと症状が重くなるよ」

「あはは、症状って」

8日目の午前。私は今日も珠ちゃんの家に来ている。症状と言えば、珠ちゃんの風邪はもうすっかり全快して、いつものパワフルさを取り戻している。昨日でメロディとベースの耳コピが終わり、ついに耳コピがどういうものか掴みかけている私は、大きな壁を越えた気分でなんだかちょっとウキウキしていた。

「耳コピって楽しいね珠ちゃん！」

「ほほう、つい一昨日まで意気消沈（いきしょうちん）して諦め切っていたいろはからそんな言葉が出るとは、先生は嬉しいぞ！」

「ぐ……いじわるなこと言うなぁ……」

「あははは！　まぁ耳コピの楽しさがわかってきたならそれは一番良いことだ。そもそもこれは勉強じゃないしね。聴いた音がそのままとれるってのは、それだけで楽しい遊

びだ」
「だね！　まぁ、相変わらずドレミで言うと何なのかはわかってないんだけど……」
「知らなくてもできただろ？　だから、それはあとでいいんだ」
「そうなんだね。うん。覚える順番は楽しい順でいいのかも」
「その通り！　音楽をやる上で一番大事な、そして入門者が気を付けるべきことは、『勉強っぽいことをしなきゃダメな気がする』っていう先入観を捨てることなんだ」
「うん。でも勉強っぽいことした方が上達する気がするよね」
「『気』はするね。でも、そんな数式みたいなことを覚えたところで、実際にそれをもとにして曲を作っても、そんなのぜ――んぜんおもしろくない曲だし、よっぽどわかってる人じゃないと仕上がりすらしないしね。大事なのは、いかに早く楽しさを見つけるかなんだ」
「楽しいのって、なんだかサボってるみたいなイメージあるけど、それでいいんだよね」
「言っただろ？　繰り返すけど、『努力は夢中に勝てない』んだ。楽しいと思って耳コピができるなら、それはもう努力でも勉強でもない。でも一番しっかり身に付く練習になってるんだよ」
「うん。なんかそんな気するかも。……ところで珠ちゃん、メロディとベースが終わっ

たけど、あとは何をすればいいのかな……？」
メロディとベースの耳コピは終わった。あとはそれ以外の音ってことだけど、それ以外の音ってなんかゴチャゴチャしてていっぱい鳴ってて……。たぶん、これも耳コピするんだよね……？
「うむ。メロディとベースが終わったら、次は耳コピ最大の難関『和音の耳コピ』だ」
「和音の耳コピ？」
「ちなみに、これは結構くじけるぞ。ここが峠だ。これさえ越えればもうほとんどゴールみたいなもんだ」
「そうなんだ……な、なんだか緊張するね……」
和音ってあれだよね、ドミソーみたいな同時に鳴らすやつ。
「さて、ではさっそく《カントリー・ロード》を再生してみよう。まぁもう飽きるほど聴いただろうけど」
そして珠ちゃんは、《カントリー・ロード》を再生する。メロディとベースの動きはほとんどバッチリ耳で追える。
「次はな、このピアノ伴奏の音を耳コピするんだ。よく聴いてみてくれ」
「うん。やってみる」

何度も聴いた《カントリー・ロード》。そのピアノの音に注目して耳をすませてみる。
「……」
「……ん？」
ちょっと、もう一回再生。
「…………」
「わかりそうか？」
「えっと珠ちゃん、これって、和音っていうことは同時に何個かの音が鳴ってるっていうことなんだよね？」
「そうだな」
「ホントに？　これ、1個しか鳴ってなくない？」
「いや、これは和音だ。用語的に言うとコード弾きをしている」
……？　うそだぁ。だってひとつしか聴こえないよこれ。
「この部分のことだよね？　このジャーンジャーンって鳴ってるピアノのとこ」
「そう、そこだ」
「だったらこれ、えっと……この音じゃない？　ほらこの音」
私は、ハッキリ聴こえてる音と同じ高さの鍵盤を鳴らす。

「うん。その音も鳴ってるな。あとどれだ?」

「あとって……」

いや～、いやいや、ひとつしか鳴ってないと思うんだけど……?

「よお～～～……く、聴くんだ。その音だけじゃない。重なって同時に鳴ってる音がある」

「……う～ん……」

でもたしかに、今鳴らしてみたピアノの音ひとつじゃ同じ感じの音には鳴ってないっていうのはわかる。なんかシンプルすぎるっていうか、分厚さが足りない。っていうことは、ホントにこの音以外の音も鳴ってるってことなのかな……?

「ホントのホントに鳴ってる?」

「ああ、鳴ってる、鳴りまくりだ。でもこれはさすがに、ちょっと難しいと思うよ」

「……う～ん……」

「よし、じゃあヒントを――」

「ちょっと待って、もうちょっと聴いてみる」

「あ、そう」

……鳴ってるんだよね……? え、これベースの時と比べて急に難度上がってない?

ベースは聴こえちゃえばもう見失わない感じだったけど、和音ってこれ、まったく音の

気配がしないんだけど……。
「うぬぬ……聴こえないよ珠ちゃん……」
「うん。これはまぁ、最初からパッと聴き取れる方がすごいかもね」
「何かコツみたいなのあるの？」
珠ちゃんは、前よりさらに私の頭の中を読んでいるのか、私の顔を覗き込んでは楽しそうにしている。
「コツってもんでもないけど、ある種の法則みたいなものはある。これを覚えておくと、和音をとる時に役に立つよ」
そう言うと珠ちゃんは、私の後ろから鍵盤を押さえる。
「ピアノの音だけで考えると、和音をとるのは難しい。和音ってのは大体3和音か4和音で構成されてる分厚い音の重なりなんだけど、でも実はいろははもうすでに、4和音中2和音は耳コピできてるんだ。それが、この音と——この音」
そう言いながら珠ちゃんは、あるふたつの音を鳴らす。でも、それは私がさっき鳴らした音ではない。
「えっと……それ……なのかな？」
「これはな、『メロディとベースの音が鳴らしてる音』だよ。ピアノ伴奏はこの音も鳴ら

してる。つまりいろはは、実はこの曲で2和音はすでに耳コピできてるんだ。和音は大体4和音か3和音。ってことは、耳コピするのはあとひとつかふたつなんだよ」

「そうなの!?」

「そう！　何のコードとか全然わかってなくても、実はこれで和音がとれる場合がある！」

「……っていうことは……えっと……メロディがこの音で、ベースがこの音で、さっき私がこれって言った音がこの音だから……」

「うん。その3つを同時に鳴らしてみるといい」

『ジャーン』

「こ……これは……！」

「似てるだろ！」

「似てるね！　なんかこう、分厚い感じで、さっきよりちょっと複雑だけど曲っぽいっていうか……」

「今いろはが押さえたのが、3和音ってやつだ。一番シンプルな和音だね。4和音とか、もっと複雑なのとかもあるけど、とりあえずそれは無視していい。3和音でいいから、ピアノの耳コピをしてみてくれ」

「うん。なるほど……」

　そっか、メロディとベースがとれてる時点で、それも和音のうちに入るんだ。っていうことは私が耳コピする音はひとつだけ……そっか。そんな仕組みもあったんだ……。

「急に音楽っぽい感じになってきたね珠ちゃん！」

「だろ。実際、メロディとベースとコードが鳴ってれば、それはもう十分曲って言えるんだ」

「……ところでその『コード』っていうの、つまりどういう意味なんだっけ。なんかギターとかでよく使ってる言葉のイメージあるんだけど……」

　私の質問に、珠ちゃんはちょっと考えてから、ひらめいたように答える。

「たとえばさ、コードネームって言葉あるだろ。映画とかで使うやつね。スパイの名前とか、そういうの。作戦コードとか言ったりさ」

「うん」

「要は、仲間内で覚えやすい略式呼称のことを、コードって言ったりするあの感じ、音楽で言うところのコードも、実はそういう感じの意味なんだ」

「そうなの？」

「たとえば今鳴らしてみるこの適当な和音、ジャラーンっと。この響きに名前があった

ら、人とその話をする時にわかりやすいだろ？ もともとはそこに名前なんかなかったんだけど、音楽が体系化されて進化していくうちに、和音にはコードっていう整頓された呼び名がつけられるようになったんだ。まぁ、民族音楽とかにこのルールはあんまり当てはまらないけどね」

「っていうことは、コードっていうのは和音の名前のこと？」

「そうだな。イメージとしては、色のセットって感じだ。水色にベージュに白、それぞれはひとつずつだと別にそれ以上の意味はないけど、並べると配色っていう『意味』が生まれるだろ？」

「ああ、うん。そうだね」

「その配色のイメージでさ、たとえば水色にベージュに白だと、優しくて淡い感じになる。逆に、赤茶に深緑に濃紺だと、ドッシリとしたイメージになる。つまりコードってのはね、そのパターンに名前つけてるってだけなんだ。ギター弾きがよくこの話をするのは、ギターって楽器が特性上、ジャカジャカと配色パターンを鳴らして使う楽器だからだね。別にピアノでもコードって言葉は同じ意味で使うし、和音演奏のできない笛とかラッパとかの人でも、意味としては同じように理解してる」

「みんなすごいんだね……」

「音楽におけるその音の配色パターンがコードネーム。見たことくらいはあると思うけど、具体的には短いアルファベットで書かれた暗号みたいなもんだ。たとえばＣとか、ＣｍとかＣｍ７とか、その短い文字でどういう和音が鳴ってるのかっていうのをみんながわかるようにしたのがコード（暗号）だ」
「そうなんだ……ちなみにコードってどうやって使──」
「うん！　それはまぁ今度にしよう！　まだ大丈夫！　覚えなくて平気だ！　まずは『そういうのがあるらしい』ってくらいで全然オッケーだ」
「あ、うん」
「そうとも。名前なんてあとでつけられたものなんだ。『ハモってる音が気持ち良い』。この感じが一番大事なんだよ。暗号は、そのあとで便宜的に用意されただけのものだ。気持ち良さの答えはいつも感覚でしかないんだよ」
「えーっと……うん。わかんないけどたぶんそうなんだね！」
まぁいっか。コードとかの話はたぶんあとでわかることなんだよね。
「えっと、じゃああとはどうすればいいんだっけ」
「和音のとり方がわかったら、まずはピアノの和音を最後まで耳コピしてしまおう」
「……これは、疲れそうだね……」

「耳コピの中では一番頭使うかもな。でもこれが感覚でできるようになったらもう大体のことはできるよ」

「うん。とりあえずやってみるね」

そして私は、曲を再生しながらピアノ伴奏の音をよく聴く。まだやっぱり、ひとつの音しか聴こえない。けど、鳴ってるってことくらいは少しわかる気がする。ああでも、ん～っ？

「むむむ……難しいね……」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

それから3時間くらい経過して、私はなんとかピアノの和音（結構いい加減）も耳コピした。

「ふぅ……珠ちゃん、これ合ってる……？」

「合ってるとこと微妙なとこがあるね。でもこれでオーケーだ。１００点じゃなくてもまずは完成させることが大事だからな」

「これは難しいねぇ……」

「うん。これはさすがに難所だね。でもなんだかんだで耳コピできたなら、あとはこれを繰り返すだけだ。やってるうちにもっと耳も良くなるから、もっと精度の高い耳コピもできるようになっていくよ」
「これで耳コピは完成なのかな？」
「んー、厳密にはまだまだいろいろ鳴ってるからそれもやりたいところだけど、まぁあとは似たようなことばっかりだし自分で好きにやればいいんじゃないかな」
「じゃあこれで……！」
「いや、早まるないろは。実は最後にもうひとつだけ耳コピしておくべきものがある」
「あ……そうなんだ……」
耳コピ、なかなか終わらないなぁ……。
「大丈夫、これが耳コピの最後の部分だ。そしてこれは、一番簡単で楽しいやつだぞ！」
「え？　簡単なやつ？」
「そう、これは簡単だ。それすなわち、ドラムの耳コピ！」
「ドラムの耳コピ！　打楽器だね！」
「今簡単って言ったけど、とりあえずこの曲の場合はね。難しいやつはむしろほかの楽器より一番難しくなるけど、とりあえず完璧じゃなくていいものならわりとなんとかなっ

ちゃう部分だから、楽しんで耳コピするといいぞ」
「うん。やってみる」
珠ちゃんが音楽ソフトの設定をちょっといじって、キーボードがドラムの音になる。
こんなこともできるんだ。
「さて、この音がバスドラム。『ドッ！』って感じの低く叩く音がこれだ。そして『タッ！』
ていうキレの良い音、これがスネアドラム。まずこのふたつを交互に鳴らしてみて」
「うん」
バスドラムとスネアドラムの音を、指で交互に鳴らしてみる。ドッ、タッ、ドッ、タッ
……。
「そうそう、そんな感じだ。そしてそこにもうひとつ、『チッ』ていうハイハットって音
を加えてみよう」
「ハイハット？」
「ドラムセットの中で、シンバルがふたつ重なって帽子みたいになってるやつあるだろ？
あれが、ハイハットだ。『チッチキチッチキ』って小気味の良い音が鳴る」
「ああ、何となく見たことあるかも」
「バスドラムとスネアドラムを交互に鳴らして、ハイハットは常に同時に鳴らしてみる

と……」

『ドッ！　チッ！　タッ！　チッ！　ドッ！　チッ！　タッ！　チッ！』

「おお！　なんかドラムっぽい！」

「とりあえず使うのはこの3つでいいや。ほかにもいろいろあるけど、まずはこの3つだけ何となく耳コピしてみてくれ」

「うん、とりあえずやってみるね」

そして私は、ドラムを耳コピしてみる。わりといい加減だけど、なんかそれっぽい！

「うわ、うわわ、なんか急に曲っぽくなったよ珠ちゃん！　すごい！」

「そう、ドラムを入れると急に曲っぽくなるんだ。『世界観が決まる』しね。ビックリだろ」

「なんか活き活きするっていうか、あれだね、音楽！」

「あはは！　そうだな！」

すごい、メロディとベースと和音の耳コピでもかなりそれっぽくなってきたと思ってたけど、ドラムを入れたらもうこれ完全に曲だ。うわぁ。これ曲だよ！　ビックリ！

「……これは楽しいやつだね珠ちゃん……」

「だろ。これはデザートみたいなもんだから、楽しく耳コピすればいい。ドラムもちゃんと耳コピするなら、音程のあるタムっていうドラムもあるし、クラッシュっていうハ

シャーンって感じのシンバルとかもある。そのへんは、好きにどんどんやってけばいいんじゃないかな」
「うん。なるほど～」
「そして、次にやることは……」
「え。まだあるの……?」
「ない！　耳コピはとりあえずこれで終了だ！」
「おおおーっ！　ついに耳コピ終了なんだね！」
「ついにひとつ目の難所を越えたな！　まぁ細かくやったらもっといろいろあるけど、とりあえずこれだけできれば十分だ！」
「うん！　はぁ～～、耳コピ終わりかぁ。永遠に終わらないかと思ったよ……」
「あとは暇な時に自分の好きな曲とか耳コピして練習すればいいと思うよ」
「うん。できるようになると楽しいね」
「そうだな。そして明日は第二の関門、キーの話に入る」
「……第二の関門……」
ひとつ目でこんなに苦労したけど、ふたつ目どうなんだろう……。

CamScannerでスキャン

「大丈夫、ふたつ目の方が簡単だ。なぜなら、いろはは音楽の感じってのを何となくでもわかりはじめてるからな。次のは身に付けるというよりは知識って感じだし」
「そ、そうなんだ。ちょっと安心かも……」
「身に付ける技術として必要なのは耳コピだけだ。そういう意味では、その部分で苦労するっていうのはもう終わりだよ」
「うん！　良かった！」
「よし、じゃあ あとはドラムの耳コピをして、ついでにほかの曲とかも遊び感覚で耳コピしてみてくれ」
「うん！」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

覚えることが多かった今日。けど、和音の耳コピの仕方とドラムのことが少しだけわかって、あと何より、なんか耳コピした曲がすごい曲っぽくなってものすごく前進した気分。まぁ、和音のトコについては正直ギリギリな気もしたけど、とりあえずはこれでいいんだよね。

そして、明日からはついに第二の関門、「キー」の話らしい。なんか未知数すぎて何の準備をすればいいのかわからないけど……。

今日はここまで！

CamScannerでスキャン

キーの話

「さて、今日は予告通り、第二の関門だ。正直、よく第一の関門を越えられたと思ってる。すごいぞ」

「いろいろ迷惑もかけたけど……うん、越えられて良かった……」

「まぁ、耳コピは遊び心でやり続ければそれでオッケーだ。一度できちゃえばもう何となくわかるしね。今日話すもうひとつの関門『キー』の話は、知識的な理解の話だ。徹底していわゆる一般的な音楽学習ルートを避けて通ってるあたしのレッスンでも、どうしても唯一避けられないちょっとだけ理数系な話」

「うん。ちゃんとわかるかな……」

キーの話。たしか2日目に、耳コピと並んでもうひとつの大きなポイントって聞いたのが、この『キー』っていうやつだった。

「そうだな、音楽は全体的に文系だけど、耳コピは体育会系、キーの話は理数系だ。けど、これで覚えることは全部だ。約束しよう。これを覚えたら、あとはその組み合わせや応用ってだけで、もう新しいことを覚えることはない。最低限、曲を作るって段階にはたどり着ける」

「……もしかして、もう結構良いところまで来てたりするのかな……？」

「そうだな、全体の60パーセントくらいじゃないかな？　キーの話が終われば70パーセ

CamScannerでスキャン

ント、耳コピとキーを組み合わせた話で90パーセント、実際に曲を仕上げて100パーセントって感じだ」
「あ、だったらなんか、ちょっとゴールが見えてきた感じだね」
「そうだな。あとひと踏ん張りだ。このふたつ目の関門を越えたら、たぶん間違いなくゴールまで行けるだろう。……ちなみにこの話はね、ずっと前にいろはが気にしてた『ドレミがおかしい』の件も含まれている」
出た！　ドレミがズレてる話っ……！
「お、顔に緊張感が出てきたな。そう、あの忌まわしいドレミの謎を、ついに紐解いていこうというわけだよ」
「ついに戦う時が来たんだね……！」
私がくじけそうになった原因のひとつ、ドレミの謎。珠ちゃんの言う『ド』とピアノの『ド』が違う位置だった、あのよくわかんない話。これはたしかに、このまま放っておくわけにはいかない……！

「じゃあさっそく行ってみようか」
「よろしくお願いします！」

「うん。ちなみに『キー』という概念を説明する時に一番わかりやすいのは、カラオケボックスでの出来事だったりする」
「カラオケ？」
「カラオケボックスでさ、曲入れて、なんか伴奏がCDのやつより低かったり高かったりすることってあるだろ？」
「うん。『原曲キー』ってボタンがあったり……あ、キーってもしかして……」
「そう、原曲キー。プラスボタンやマイナスボタンを押して、曲の高さを調整するあのカラオケシステム。実はあれが一番わかりやすく、キーっていう概念を使っているものだったりするんだ」
「そういえば、カラオケって何で全部CDと同じ高さにしてないの……？」
「それは、CDと同じ高さ——つまりオリジナル楽曲キーの高さが、一般人が歌うには高さ的にキツいから、カラオケの音を作ってる会社が歌いやすくするためにキーを下げてるんだよ。良かれと思ってね」
「へぇ～そうなんだ。歌いにくくても普通のやつで歌いたいのに……変だね」
「その感覚は、いろはがある程度耳が良いってことの証明でもある。気付かない人は音が下がってることも気にせず……というか気付かず、そのまま低く歌えたりするしね。

耳が良いと、記憶してる音程とのズレで歌い心地の悪さを感じるんだ」

「へぇ～そうなんだ。でも、あの高さ調整ボタンがそんなに大事なの？」

「そりゃあもう、大事も大事。あれが答えみたいなもんだよ」

カラオケのあの高さを調整するボタン、あれが答え……？

「まぁ言葉で説明するより体感した方が早い。よしいろは、普通にドレミファソラシドを鳴らしてくれ。はい鳴らして」

「え……えっと……」

この場合のドレミって、どういうやつのことなんだろう……なんか、ドレミは信用しちゃいけないみたいなイメージが……。

「ピアニカの『ド』から、白鍵を横に順番に押していくだけでいい」

「あ、うん。『ドレミファソラシド』……こう？」

「そう、白鍵を順番に鳴らすことで鳴るドレミ。これがいろはの信じるドレミだ」

「うん。これがドレミだと思ってた」

「これ〝も〟ドレミだ」

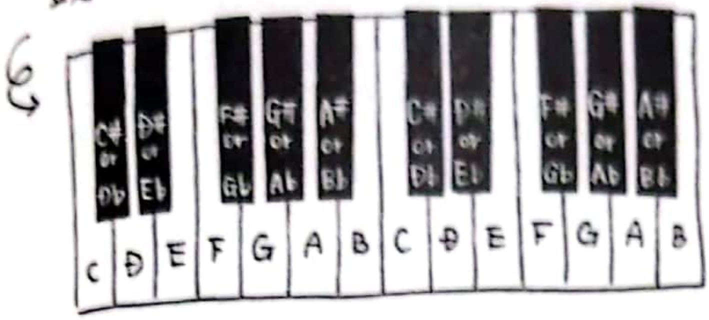
「……？」

「うん。じゃあいろは、目を閉じてくれ」

「？　……うん」
「この音は『ファ』だよな？」
「うん」
珠ちゃんが、さっきのファの音を確認するように押す。うん。間違いなく『ファ』。
「じゃあこれは何だ？」
「え……」
そして珠ちゃんは『ファの音から始まる、でもドレミに聴こえる音』を弾いた……！
「え？　え？　どうなってるの？」
「これがすべてだ。つまりね、白鍵と黒鍵合計12鍵盤、すべての鍵盤に、『その鍵盤からスタートするドレミファソラシド』が存在するんだ」
「え、えっと……え？」
「さぁ、集中していこう。ここが混乱しやすい、けどわかればすべてスッキリする正念場だ」
「う、うん……」
「そもそもね、ドレミファソラシドって言い方が良くないと思うんだ。一見わかりやすいように見えて、実はこの呼び方こそが混乱のもとだったりする」

「そうなの……？」
「あたしがさ、ＣとかＦとかなんとか言ってたの、覚えてる？」
ああ、あの謎のアルファベット……。
「うん。たまに言ってたね」
「あれこそが実は、鍵盤それぞれにつけられた〝固有の名前〟なんだ。ドレミってのは本当の名前じゃない」
「え？　そ、そうなの？」
「ドレミってのは、役割の名前なんだよ。今いろはがドレミファソラシドだと思ってるのは、鍵盤の正式な名前で言うとＣＤＥＦＧＡＢＣ。これでドレミファソラシド。Ｃから始まってＣで終わる。これが一番一般的な、ピアノの白鍵をただ順番に鳴らした時に鳴るドレミだ。でもさっきみたいに、〝ファだと思っていた音〟、つまりＦの鍵盤から始まるドレミっていうのも存在する。これについては鳴らした方がわかりやすい。この図に書いてあるやつを一通り鳴らしてみてくれ」
「うん」
珠ちゃんがサラサラと描いてくれた鍵盤がたくさんある絵を見ながら、私はピアニカを弾いてみた。

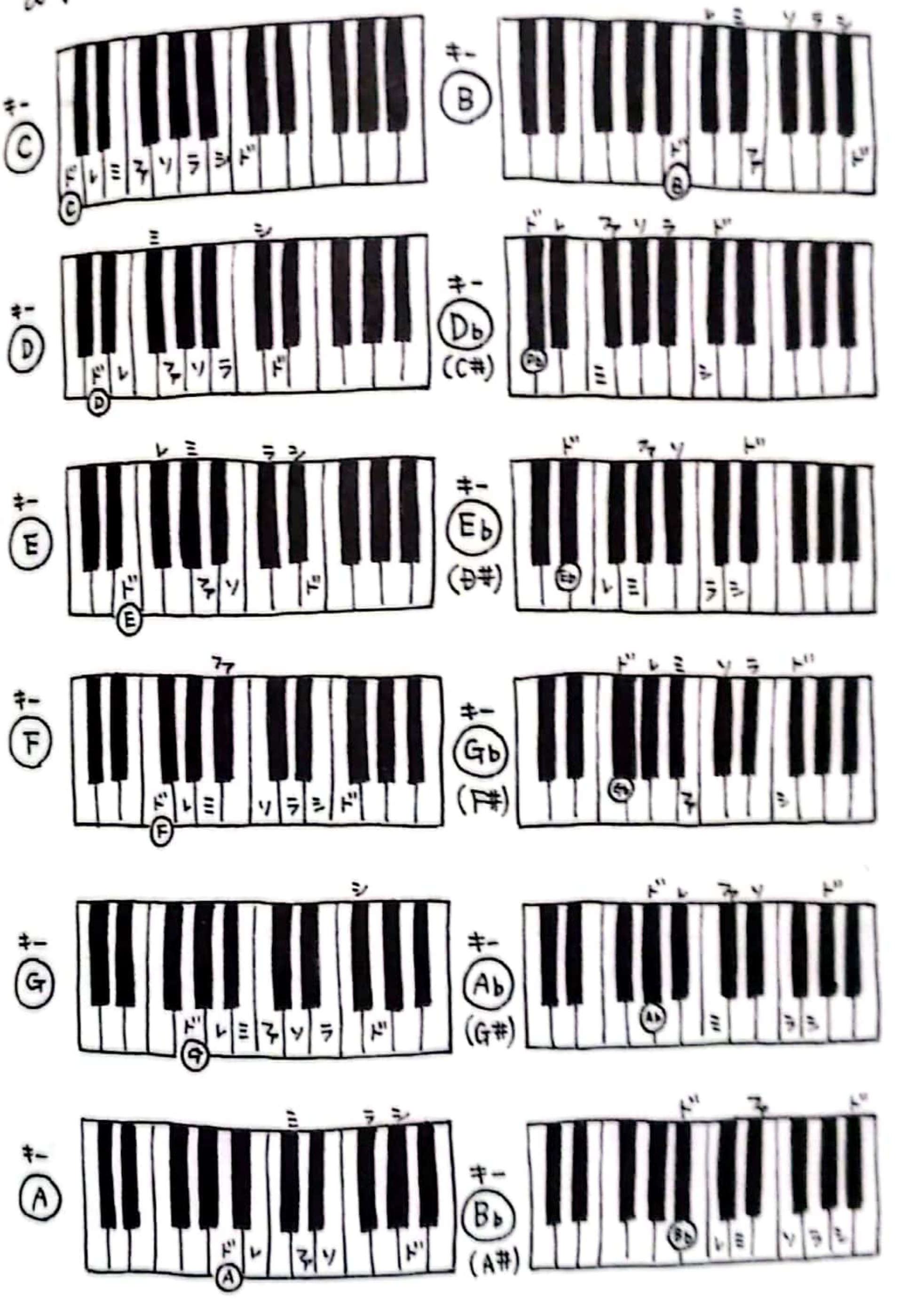
鍵盤についてるアルファベットの名前



❀C〜Bで鍵盤が12コだから

12キー

❀ドのスタート地点がその曲のキー！とりあえず鳴らせばわかるよ



CamScannerでスキャン

「うおお……ほんとだ。どこから始まってもなんだかドレミみたいな感じに聴こえるね……！」

「これを見てわかる通り、すべての鍵盤がドレミのスタートポジションになり得る。別の言い方をするなら『ドレミファソラシドっていう曲』をいろんな高さから弾き始めることができる。弾いてみた通りだけど、ピアノやキーボード、ピアニカ、それにアコーディオン、いわゆる鍵盤と言われているこの世界基準の規格には、白鍵と黒鍵合わせて合計12のパターンの『ドレミファソラシド』が存在するんだ。そして、起点になるその鍵盤が『ド』と呼ばれ、その曲全体の秩序を決める『キー』とも呼ばれる」

「そ……そうなんだ……でも、だったら何で幼稚園とかではあの鍵盤だけを『ド』って呼んでたの？」

「それはな、今の話が幼稚園児には難しすぎるからだ」

「……ああ、そうだね」

「そう。この鍵盤規格にはスタート地点が違う12種類のドレミファソラシドがある。そんなことを幼稚園児に理解させるのは不可能だ。実はおおむね、それだけの理由なんだよ」

「鳴らしてみたらなるほどって感じだね。そっか、ドレミっていろんなところから始められるんだ……」

CamScannerでスキャン

「そして、良いことを教えておこう。これは結構衝撃的な事実だ。12パターンのドレミがあるってことがとりあえずわかった。それでさ、さっきの表を見てわかると思うけど、それぞれのキーで、実は使ってる音ってかなり少ないと思わないか？」
「え？　ああ。たしかに、鳴らしてないけど……でも、ほかの音も使うんじゃないの？」
「実はそれがそうじゃないんだ。とりあえずポップスの場合は特に、曲の中で使うのはほとんどこのドレミファソラシドだけだったりする」
「え？　うそだぁ。この音だけで曲作るって、音足りないんじゃない？」
「それが実は足りてるんだ。試しに《カントリー・ロード》のメロディを弾いてみるといい。キーはFだ。つまりさっきの図のFのパターン」
「う……うん」
ドレミファソラシドだけで《カントリー・ロード》のメロディ全部の音を弾くって、そんなの本当に……え、あ、え!?　うわっ!?　ホントだ!?
「ほ……ほんとだ……」
「な。ビックリだろ」
「たったこれだけの音で作られてるメロディだったなんて……」
「まあ、奇抜なことをしたら一瞬これ以外の音が鳴るってこともあるけど、あくまでそ

CamScannerでスキャン

れは一瞬のことだ。《カントリー・ロード》については全部、ほかの曲についても、ほとんど全部、曲ってのはほぼこのドレミファソラシドの中で成立している」

「そうなんだね……衝撃……」

「もちろんジャンルが大きく違えば例外は多々あるけど、今回あたしらが作る〝普通のポップス〟の常識においてはその認識でオーケーだ。さまざまな例外は、それこそ曲が作れるようになって理論書を理解できるようになった時に覚えればいい」

「うん。ああ……なるほど、ホントにこれだけで《カントリー・ロード》弾けちゃうんだなぁ……不思議っていうかなんていうか……」

「この限られた音の組み合わせで山ほど名曲があるっていうのは、考えてみるとすごい話だよな。でも、12種類のスタート地点でどの曲もバラバラだから、バリエーションが多いように感じるってところもあるね」

「……黒い鍵盤って何のためにあるのかと思ってたけど、ドが始まるところが違う場合にドレミファソラシドを鳴らしたい時に使うんだね」

「まあ、そういう解釈でおおむね正解だ。黒い鍵盤は都合を合わせるために存在してる」

「なるほどぉ……。でも妹ちゃん、率直な質問なんだけど」

「ん？　なんだ？」

「ドレミのスタート地点が白鍵とか黒鍵とか使って12種類あるっていうのはわかったけど、こんなにややこしい感じになるんだったら、もうみんなCから始まるドレミで曲作ればいいんじゃない？　それだったら白鍵だけで済むんだよね？　何でわざわざ変なとこから始まるキーを選んだりするの？」

「………」

え、あれ？　珠ちゃん黙っちゃった……？　変なこと聞いたかな……？

「なるほど。音楽ができるようになってしまったあたしには思いもよらない角度からの質問だ。うん。そうだよな。みんなCのキーで曲書いたらわかりやすくていいよな」

「だよね！　絶対わかりやすいよね！」

「しかし世の中ではこの12の鍵盤から始まる12キーが使われている。それにはちゃんとそれなりの意味があるわけだ」

「……だよね」

「たとえば、いろはが着物を買うとする」

「え、急に着物……？」

「いいから。買うとするだろ？　何色がいい？」

「えっと、暖色系がいいなぁ。えーっと……オレンジよりは淡い感じの……ピワ色みた

いなの!」

「複雑なの選んだなぁおい。じゃあオレンジでいいや」

「ええー？　ビワ色がいいなぁ」

「こだわるね」

「うん」

「まぁ、それと同じなんだ。この12のキーっていうのは、『12色のコーディネート』だと思えばいい」

「……？　どういうこと？」

「キーにはね、明確に『色』があるんだ。聴覚的なイメージだから受け取り方は人それぞれ違うけど、キーが変わると明確に聴覚イメージも変わる。その差は、服の色のコーディネートに近い」

「そうなの……？」

「ちょっとこれを聴いてみてくれ」

そう言うと、珠ちゃんは偽《カントリー・ロード》の音楽データに〝何か〟をしてから再生する。

「ほい」

「え……あれ？　なんか全体的にちょっと低い？」
「うん。まとめて全部下げてみた。これで、この曲のキーはF色ではなくE色になっている。同じ色のイメージに聴こえるか？」
「いや……なんか……わりと違う感じかも……」
「色で言うと何色っぽいと思う？」
「色で……？」
言われてみれば……たしかに、何色っていうのがある気がする。もともとのが赤っぽいピンク色だったんだけど、下げたやつだと……ベージュ……？
「ちなみにあたしには、さっきのが水色で、今のEのキーにしたやつは赤っぽく聴こえる」
「私は、さっきのは赤ピンクで、この下げたやつはベージュみたいな感じかも……」
「そう、その感じだ。キーにはたしかに、明確じゃないけど人それぞれ感じる"色"がある」
「不思議だね……」
「曲を作る人はみんな、そのイメージを選んで曲を作ってるんだ。今回は青だなとか、今回はグレーだなとか、今回はピンクだなとか。……っていうことを踏まえるとさ、全部の曲をCで統一したら……わかるよな？」
「うん。全部同じ色になってつまんないね」

CamScannerでスキャン

「そう、だからキーは12色あるんだ。色鉛筆みたいにね。鍵盤の配列的に多少面倒くさくても、みんなC以外のキーも頻繁に使う。どうしても使いたい色のキーがあるっていう、こだわりでね。オレンジじゃなくてビワ色がいいって言ったいろはのそのこだわりと、それはほとんど同じだ」

「なるほどぉ……」

「あとはまぁ、ボーカルさんが歌いやすい高さとか、楽器の種類によって演奏しやすいキーとか、そういう事情かな。まぁとりあえずそれは置いとくとして、キーのイメージは鍵盤の数、白鍵黒鍵合わせて12色あるっていうことをよく覚えておいてくれ」

「うん。なんか不思議だね。高さが変わるだけで何でこんなに印象変わるんだろ」

「それについてを言及し出したら、本が1冊書けちゃうね。人体の謎レベルの話だと思うよ」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「さてと、曲には軸となる『キー』という概念が存在し、それは12色あるということを話してきたけど、じゃあ世の中の曲がそれぞれどのキーなのか、それを調べる『キーチェッ

ク』の方法を教えてみようか」
「キーチェック？」
「つまり、12色のうちどれが使われてるのかってのを当てる方法だ」
「おお！　なんかテクニックっぽい！」
「これができるようになると『この曲のキーは……Dだね！』とか、わかってる人っぽいことが言えるようになるぞ！」
「すごそう！」
「すごそうだろ！　さて、ではさっそくだ。いろはの耳コピしたこの曲、《カントリー・ロード》。これのキーはどれかわかるか？」
「え、えー……」
うわぁ、急に難度高い……。あれ？　でもそれさっき弾いたような……どのキーだったっけ……。
「難しく考えることはない。キーなんてね、"弾けばわかる"んだ」
「そうなの？」
「鳴らしてみるとわかる。ほら、黒鍵を使うところが1カ所だけあるだろ？」
「うん。あるね。……そっか！　さっきの図！」

「そう、あの図に当てはめれば、この曲のキーが何なのかはハッキリする！」
「Fだね！」
「正解だ！」
「おおお〜！　F！」
「キーがわかったら、さらにおもしろいことを教えてやろう。いろは、曲を再生しながら、Fのキーの音、つまり〝さっきのFの図の印のついてるだけ鍵盤〟を使って、メチャクチャに弾いてみてくれ。アドリブができる演奏者になった気分で」
「え、メチャクチャでいいの？」
「ああ、メチャクチャでいい」
言われた通りに再生しながら、Fのキーのドレミで適当に弾いてみる。すると……。
「あれ？　適当に弾いてるのにわりと大丈夫っていうか……間違ってない感じ？」
「曲はキーにあるあの限られた音で作られてる。逆に言うと、キーに入ってる音なら大体の音は間違いに聴こえないんだ」
「へえええええええ！　衝撃！」
「なんか急に音楽できるようになった人の気分だろ！」
「うん！　ピアノ全然弾けないのに、なんかちょっと弾ける人みたい！」

「この遊びはなかなか良いもんだぞ！　こんな風に自分の好きな曲をどんどんキーチェックして、なんか適当にアドリブっぽい感じで弾くだけで、なんか楽しい！」

「すごいねこれ！」

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「さてといろは、曲にはキーという軸になるものがあり、使っていい音はある程度決まっている、逆にその音ならわりと何でもオッケーという理屈はわかったかな？」

「うん。大体だけど」

「大体でオッケーだ。こうじゃなきゃいけないって厳格な決まりは音楽にはないから、そのへんはむしろいい加減に捉えるくらいのおおらかさがあった方がいい。たまに『これキーにない音だけど……？』って音が入ってても、あーそういうこともあるよねーくらいのテンションで受け流す感じだ」

「う、うん。やっぱりそういうのってちょっと気になるけど……」

「やはり気になるか。じゃあもう一歩だけ踏み込んだ説明をしておこう。『キーのドレミからはみ出してる音が鳴ってる時』、こういう場合ももちろん存在する。そしてそれはっ

まり何なのかという話。わかるかどうかは置いといて、一応その音の意味を説明しとくよ」
「うん」
「実際ね、キーの指定するドレミだけで作ったメロディっていうのは間違いがないし、わりと普通にキレイな感じになるんだ。さっき適当に弾いた感じでもね。でも、それはそれで起こる問題がある。何だと思う？」
「え？」
んー……間違いがないならそれにこしたことはないんじゃ……？　何かマズいのかな。
「あ」
「何だと思う？」
「えっと……合ってるかわからないんだけど……ありきたりな曲になる、とか？」
「そう、おおむね正解だ。でも、言い方をもう少し変えるとだ、あたしがたしか2日目くらいに話したことをここでもう一度思い出してほしい」
「2日目のこと……？」
2日目……2日目って何話したっけ。ポップコーン食べた話？　えーっと……。
「2日目に話したこと、それは『間違うことでおもしろくなる』だ」
「あーっ！　あったあった！」

「あっただろ！」
そっか、その話だ。お笑いの話とかあったやつ。
「キーのドレミに当てはまらない音を使うっていうのは、ある意味では〝間違ってる〟。だからこそ、それはその曲の『ボケ』になり、イコールその曲のおもしろさになるんだ」
「なるほど……」
「物語でも曲でも、『ボケ』や『事件』があるからおもしろい。朝、学校に行って、勉強して、帰ってきて、お風呂に入って、寝る。それだけじゃ何のドラマもない。そこに、いつもと違う何らかの事件が起こるから、物語は物語になるんだ」
「そうかも……っていうことは、事件を起こすならドンドン間違った音を入れればいいっていうこと？」
「そのへんは節度(せつど)だね。ワンポイントって方が引き締まることもあるし、実はツーポイント、スリーポイントってやり方もなくはない。けどまぁ、最初はワンポイント入れれば十分なんじゃないかな。事件を起こすのはひとりでいい」
「なるほど……」
「事件……つまりキーの指定するドレミにない音が出てくる時は、それがその曲のチャームポイントになる。1個の方がおもしろいかもしれないし、2個の方がいいかもしれ

CamScannerでスキャン

ないし、それはお好みだね」
「なるほど！　わかりやすい！」
「しかしね、チャームポイントにはそれなりに気を付けなきゃいけないルールもある」
「そうなの？」
「そりゃそうさ。本来間違ってるものがそこにあるんだから、ただ入れただけだと間違いでしかない」
「あー……それじゃダメなの？」
「ダメじゃないけどちょっと大胆すぎるね。事件は、事件を起こしただけじゃなく、ちゃんと解決もしてワンセットだ。メロディが事件を起こしたなら、コードやベースはそれを〝なんとかする〟動きをする。そしてハッピーエンド！」
「なるほど、そういえば事件起こりっぱなしだったもんね」
「キーにない事件音のトラブルの種類はいろいろだから、それは自分の好きな曲をもっと聴いて具体的にいろんな例を見て覚えるのが早いね」
「なるほど……でもそのコードやベースを変えるっていうの、どうすればいいの？」
「それはな……」
「それは……？」

「ケースバイケースだ。いろいろ試して気持ち良いと思うやつを使えばいい」

「ええ〜……」

ここにきてまさかの目分量……。

「そこについてはまた今度にしよう。今日はもう十分すぎるくらい詰め込んだしね」

「うん、はぁ……頭いっぱい……」

「これで『キー』の話は終わりだ」

「え、終わり？」

「ああ。終わりだ。これで、いろはが身に付けるべき技術と知識は揃った。あとはこれの応用で、具体的に作曲に取り掛かれるようになったぞ」

「そ、そうなの……？」

なんかあんまり実感わかないんだけど……そうなのかな？

「第二の関門もめでたく突破だ。おめでとう！」

「あ、ありがとう……でもなんか、耳コピよりはだいぶあっさりしてるね」

「もし物足りないと思ったなら、さっきの図のドレミを全パターン弾きまくってくれ。それだけで頭に刻み込まれる理解度が断然変わってくる」

「え？　あの表のドレミを弾くのって、何か役に立つの？」

「そりゃあもう。表を見なくても全パターン弾けるようになったら最高だ。筋トレ気分で意味なんか考えず弾いててもいい。手癖で体が覚えてると、理屈ではなく感覚で音楽を扱えるようになるからな」

「……そうなんだ」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

ふう。今日はなんか、かなり頭使ったなぁ……。えーっと、曲にはキーがあって、使っていい音はキーで決まる。メロディの中でキーにない音が出てきた時はトラブル発生ポイントで、そこがその曲のチャームポイントかぁ。はぁ。いっぱい。

今日のとこはちょっとしんどかったなぁ。でも……。

「なんか結構、いよいよって感じ！」

長い道のりだったけど、なんか、ちょっと作曲感出てきてる気がする。明日はいよいよ作曲に関係あるとこらしいし、たぶんもう少しだよね！

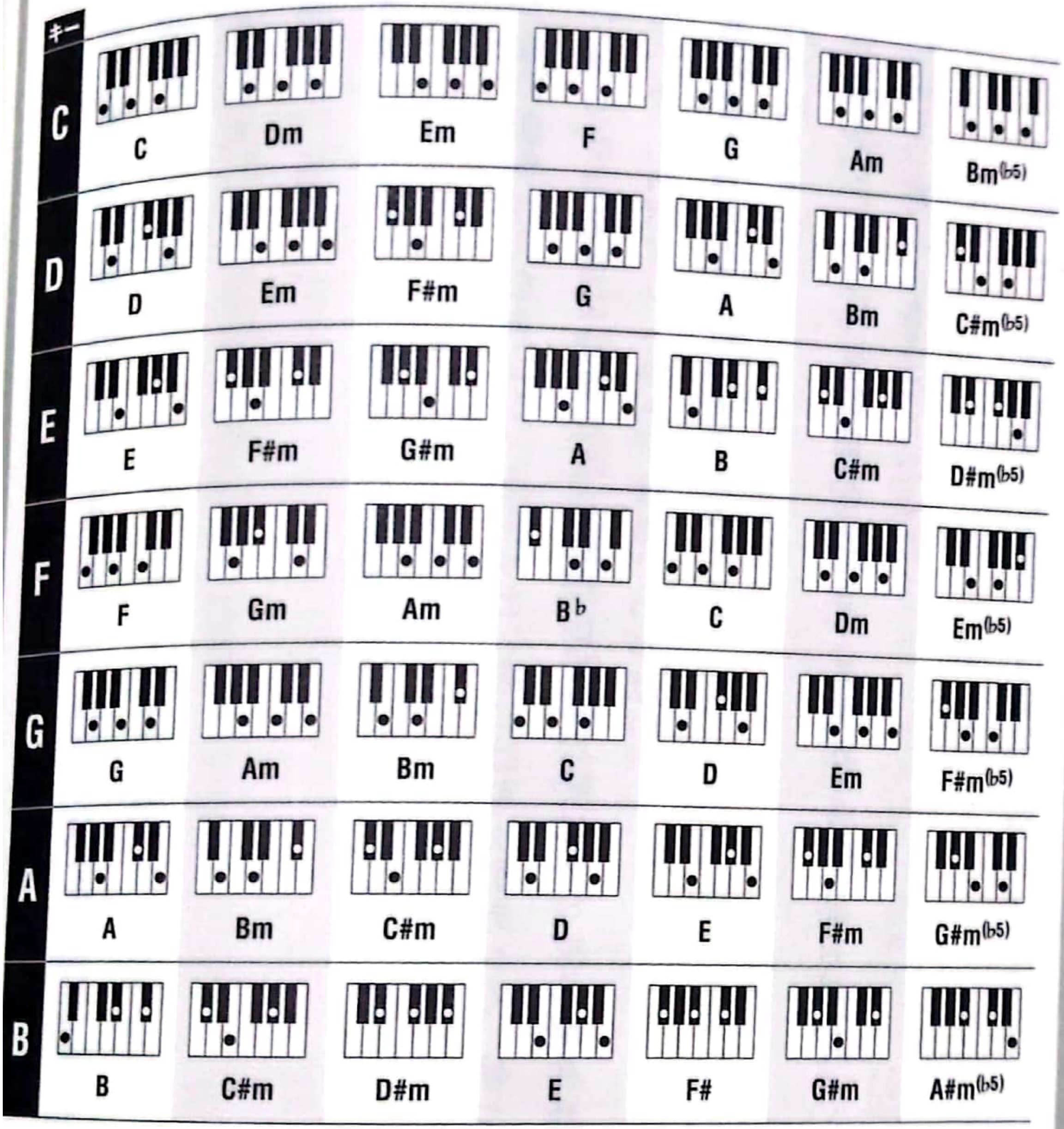
今日はここまで！

コラム

キーごとの基本的なコード

ここでは、３つの和音からなる基本的なコードを紹介していきます。

それぞれのキーには基本的な７つのコードがあります。「m」はマイナーと読み、これがついているコードは少し悲しげな響きになります。７つのコードを鳴らしながら組み合わせて、ハーモニーを作ってみましょう（最低３つは使うのがおすすめです）。



CamScannerでスキャン

10日目

メロディラインと構成の話

CamScannerでスキャン

作曲レッスン10日目。日付的には、今日は12月31日、大晦日。冷え込む道を自転車で通り過ぎて、私は今日も珠ちゃんの家に向かう。

珠ちゃんが言うには、私はもう一番大変なふたつの関門を越えたらしい。あんまりその実感はわかないんだけど、私ってもう結構いろいろできたりするのかな……？

「おはよういろは」

「おはよう珠ちゃん」

いつもの部屋でいつもの感じ。そういえば、いつ頃からか珠ちゃんに対する距離感みたいなものは、もうまったく感じなくなっていた。近寄りがたいとかみんな思ってるみたいだけど、その理由すらちょっと忘れそうになってる。

「大晦日だけど、来ても平気だったのかな……？」

「ん？　ああ、平気平気。そういえば、明日と明後日ってどうしてるんだ？」

「えっと……明日は元旦だから、おじいちゃんの家に行ってるね、明後日はお母さんの方のおじいちゃん家かも」

「まぁ正月はお互い身内の何かとかあるし、三が日はとりあえずレッスンもやめとこうか」

CamScannerでスキャン

「そうだね。じゃあ今日でレッスン納めだ」
「そういうことだな」
「じゃあ、今日もよろしくね」
「おう、あと一息だ」
「ところで、今日って何するんだっけ……？」
「うん、いろはがあと残してるカリキュラムは、『メロディの作り方』と『曲の構成』、あと、耳コピとキーを両方使った応用テクニックがひとつ。それが終わったら、あとは1曲仕上げておしまいだ」

それがあと少しなのか結構遠いのか私にはわからないけど、どうやらかなり作曲に近付いたみたい。

「というわけでだ、今日は『メロディの作り方』と『曲の構成』ってところをやるぞ」
「うん。よろしくね♪」

「メロディを作る……つまりこれはいよいよ、作曲の領域だ」
「だよね。ついに踏み入れたんだね」
「そう！　よーし！　良いメロディを作るぞっ！」

「うん！　頑張る！」
「…………」
「……で、何をすればいいのかな……？」
「さぁ！　思う存分好きなメロディを作ってしまえ！」
「え」
「ん？」
「いや、えっと……うん。えーっと……『ミー♪』……『ドーミー♪』……」
「……」
「あの……珠ちゃん……」
「…………」
「…………えっと……」
「うむ！　こうなることは知っていた！」
「だ、だよね！　ああ良かった、まさかあとは自分でどうにかするのかと思ったよ～！」
ああビックリした。珠ちゃん、たまに天然でこういうノリになるからドキッとするよ……。
「メロディを作ると言ってもだ、それができたらそもそも苦労などない」

「うん。本当にそうだと思う」
「理論的なことを言っても、抽象(ちゅうしょう)的なことを言っても、結局それはセンス任せでまともなものなんて出てきやしないんだ」
「……うん……本当にそうだと思う……」
「そこでだ！　作曲入門者向けのとっておきの技を紹介しよう！」
「わぁ～！　そういうの待ってた！　何か方法あるの？」
「もちろんだとも。伊達(だて)にこの10日間いろいろやってきたわけじゃないからな。さぁいろは、パソコンの前に座るのだ」
「うん」
そう言うと、珠ちゃんは音楽ソフトを立ち上げる。そして画面に出てきたのは見慣れた曲データ。私が耳コピした《カントリー・ロード》だった。
「さぁいろは、まずこのメロディを消すんだ」
「え？」
「消すんだよ。カラオケみたいな状態にするんだ」
「う……うん……？」
私は、とりあえず言われた通りにしてみる。なんか、消すの嫌だなぁ。せっかく耳コ

CamScannerでスキャン

ピしたのに……。

「さて消えたな。じゃあこれを再生してみてくれ」

「うん」

そして再生してみる。もちろん、流れるのはカラオケみたいな、メロディのない曲。

「……あ、わかった珠ちゃん」

「わかったようだな。そう。つまり……」

「このカラオケに、自分のオリジナルのメロディを入れていくんだね」

「そういうことだ！」

なるほど……たしかにそれだったらできそうかも……けど……。

「珠ちゃん、これってなんていうか……ズルくない？　盗作っぽいっていうか――」

「たわけがぁあ――――っ!!」

「ひぃ――――っ！」

珠ちゃんは急に、どこからか取り出したハリセンで私の頭をスパーンと叩いた！

「ど、どこにあったのそのハリセン!?」

「いいかいろは！　パクリだの盗作だのという概念は、一人前になってから考えるんだ！」

CamScannerでスキャン

あ、スルーなんだ。

「え、えっと……うん」

「どんな創作だってそうだ。漫画を上手に描けるようになりたい人は、とにかく好きな漫画家の絵を一生懸命真似する。トレースから始まって、模写をして、見ないで描くようになって、しまいに自分で自由に描けるようになる。好きなものは何でも上り次第に真似をする。そういうプロセスを踏んでみんな、一人前になっていくんだ。音楽だってそう。好きな音楽があったら、まずそれを真似る！　分析して反復して体に覚えさせる。そして作れるようになっていく！　盗作云々のことはまったく考えなくていい。そもそもこの曲は誰かに聴かせるってわけでもない練習曲だからな。そう考えた方が気分的にもラクだろ？」

「それはまあ、そうかも……？」

「このカラオケ型メロディ作曲は、言ってみれば補助輪付きの自転車みたいなもんだ。まずはベースとハーモニーのガイドラインを使って曲を仕上げてみる。そして、メロディの作り方に慣れたら補助輪を取ってベースもハーモニーも自分で作る。その段階が作曲ができるようになったっていうラインだ」

「なるほど……」

CamScannerでスキャン

単なる練習でやってたつもりの耳コピだけど、まさかこういう使い方をするためのものだったとは……珠ちゃん、どこまで考えて言ってるんだろ……。
「さぁ、わかったらこのカラオケ版《カントリー・ロード》に勝手なメロディをつけてしまえ！　似てる曲になるけどそれでいい！」
「うん、やってみるね」
そして私は、カラオケ版《カントリー・ロード》を改めて再生する。頭の中に鳴ってるもともとのメロディがかなり強烈に主張してくるけど、それを頭の中で消しながら別のメロディを思い浮かべてみる。
「……たとえばこういう感じとか……？」
そして打ち込んでみるメロディ。うん。《カントリー・ロード》ではないけど、《カントリー・ロード》のニセモノみたいな感じのメロディ。
「いいぞ。その調子だ。実に良い感じのパクリだ」
「……うん」
なんか、パクリって言われるとあんまり良い気分ではないかも……まぁそうなんだけど。
「この曲のキー、Fのキーの音なら大体正解だぞ」

CamScannerでスキャン

「うん、そうだったね」
それから1時間くらいかけて、私は《カントリー・ロード》に別のメロディをつけてみた。これは結構簡単っていうか、そんなに悩まずにできたかも。……でも……。
「……やっぱり、《カントリー・ロード》のメロディが一番しっくりくるね……」
「そりゃあ当然だ。だってこのハーモニーもベースもリズムも、全部《カントリー・ロード》のメロディ用に作られたものだからね。誰かの体型に合わせて作られたドレスを別の人が着てるみたいなもんだよ。ピッタリくるってことはほとんどあり得ない。けど、メロディをつけてみると何となく作曲の雰囲気はわかるだろ？」
「うん。ちょっとだけ作曲した気分かも。……ねぇ珠ちゃん、このベースの音って変えちゃダメなのかな？」
「お！　欲が出てきたな？　そう。そうなるだろ？　良い傾向だ。メロディをオリジナルで考えようとすると、ほかの曲の伴奏じゃどうしてもピッタリこなくて気持ち悪い。気持ち良い状態にするにはベースやハーモニーをいじらなきゃいけない。……というわけでだ、じゃあベースをいじってみてくれるか。しっくりくるように」
「うん。やってみる」
オリジナルのメロディを当てた偽《カントリー・ロード》。でも、作りながら思ったのは、

このベースのとこってもっとこうならこのメロディが気持ち良いのに、とかいう感覚だった。ベースを気持ち良いところに動かしていいんだったら、もっと良くなるかも！

「……あれ……？」

「どうしたいろは？」

「いや、えっと……ベース動かしてみたんだけど……なんか変な音になっちゃった……」

なんか、気持ち悪いっていうか、しっくりこない……。何でなんだろ……？

「うん。ピアノの鳴らしてるハーモニー（和音）がさっきのままだからな。ベースだけ変えてもダメだよ。ハーモニーも丸ごといじらなきゃ、そのベースは気持ち良くならない」

「ええ～……」

うわぁ……複雑。そっか。ベースだけじゃなくてハーモニーも変えなきゃいけないんだ。でも……だったらどういう風にすればいいかなんてわからないよ……。

「や、やっぱりさっきのベースのままでいいかも……？」

「あっはっはっは！　まぁ、慌てることはないよ。今日の目標は偽《カントリー・ロード》のメロディを作るってとこだからね。ひとつずつやっていけばいい。順を追えば必ず1曲仕上げられるようになるぞ」

「うん。ちょっと調子に乗っちゃったみたい……」

CamScannerでスキャン

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「さてと、偽《カントリー・ロード》を作ったことで、なんとなーくだけど作曲っていうことの雰囲気がわかったかと思うけど」

「うん」

「歌詞のあるいわゆる歌モノにはおおむね、決まりごとのようなものがあるんだ。様式美的なね」

「そうなの？」

「それは、Aメロ↓Bメロ↓Cサビ……ってやつだ。見たこととか聞いたことないか？」

「あ〜。バラエティ番組のクイズとかでなんか見たことあるかも……？」

「そう、実は歌モノって、ある程度構成が決まってるんだ」

「へぇ〜」

「《カントリー・ロード》の例はポップスよりシンプルな構成だね。Aメロのあとにすぐ Cサビが来てる。まぁBサビって言ってもいいけど、そのへんは好きに言えばいい」

「ふんふん」

「なんか好きな曲、ほかに例出してみようか。何でもいいよ」
「えっと、だったらそうだなぁ……《未来予想図Ⅱ》とか」
「おお、渋いね」
「お母さんがドリカム好きで、よく車で聴いてるんだ」
「そうだな、あれなんかまさにベーシックなAメロBメロCサビ展開だ。ちょっと再生してみよう」
そう言うと、珠ちゃんは《未来予想図Ⅱ》をライブラリから再生する。
「……やばいな。超良い曲」
「……うん。こういう曲作れるのホントにすごいよね……」
「うーむ。すごい。普遍的でドラマチックだ。何世代にも渡って愛されてる曲ってのはやはり違うな」
「もう一回聴こー!」
「ああー　こりゃもう一回聴かなきゃダメだ!」
そうだ、私、こういう曲とか作れるようになりたいなぁ……。
「……おっと、うっかり話がそれてしまったけど、構成って感覚、ちょっとわかったかな」
「うん。メロディの雰囲気っていうか、曲の感じが違う景色になるってことだよね」

「そうだな。落ち着いたスタートから、サビに向かって盛り上がって、サビを歌い上げるみたいな。良い曲っていうのは、この構成がうまいから人の気持ちをグッと持っていける。扱い方はまだ置いておきつつ、まずはこういう明確な分け方があるってことを覚えておいてくれ」

「うん。何となくは知ってたけど、改めてなるほどって感じ」

「よし。今日教えることはここまでだ」

「あ、そうなの？」

「うん。この先にちょっと大きなブロックが1個残ってるからな。ここまでにしておこう」

「そっか。じゃあ今年の作曲レッスンは、これでおしまいだね」

「ああ、そうそう、そういえば宿題がひとつあるんだ。三が日なんだけど、朝でも夜でもいつでもいいから、昨日教えた12キーを全種類1回ずつ弾いといてくれ。1回ずつでいい」

「え？　うん。でも、1回ずつでいいの……？」

「ああ。1回ずつでいい。その代わり、毎日ちゃんとやるんだぞ」

「わかった。ちゃんとやっとくね」

「おう。あとまぁ、なんか適当に自習しといてくれ」

「自習？」
「うん。まぁ、時間があったらでいいけど」
「わかった。じゃあ、来年もよろしくね珠ちゃん♪」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

良いお年を、と言いながら、私たちは今年最後のレッスンを終える。珠ちゃん家からの帰り道、私は今日のことを頭の中でおさらいしてみる。偽《カントリー・ロード》のメロディ、あんまりカッコいい感じじゃないんだけど、一応私が考えたやつなんだよね。ちょっとだけ前進した気分。まぁ、珠ちゃんの言う通りまだ補助輪付き自転車だけど……でも、それってもう自転車にはまたがってるってことだよね。

なんてことを、日が落ちた冬の外で自転車に乗りながら考えてる私。この自転車みたいに、自分の思った通りに作曲できるようになったら、きっと楽しいだろうなぁ。

今日はここまで！

パクリチェック

CamScannerでスキャン

11日目

〝珠ちゃんビックリ大作戦〟の話

CamScannerでスキャン

年が明けてお正月。親戚の集まりや家族と過ごすいかにもなお正月を2日ほど満喫して、今日は1月3日。珠ちゃんのレッスンは明日からだけど、私はその前に、やっておきたいと思っていることがある。

「〝珠ちゃんビックリ大作戦〟……始動だね……！」

珠ちゃんから出された宿題は、毎日12キーを1回ずつ弾いておくこと。それくらいだったらすぐ終わっちゃうし、2日間たっぷり休んだ私は、なんだかエネルギーを持て余していた。『なんか自習しといて』って言われたけど、だったらここは本気で取り掛かって、何でもいいから珠ちゃんをアッと言わせてみたい。そして計画したのは、珠ちゃんの力を借りず〝自分だけで作曲しちゃう〟というサプライズだった。新年最初のレッスンで『実はもうできてまーす♪』とか言っちゃったりして♪　さっき珠ちゃんに『ちょっとおもしろいこと考えてるんだ。珠ちゃんビックリするかも』ってメールしちゃったし。そんなわけで私は、自分の部屋の制作机に座って、音楽ソフトを立ち上げた。

「さ・て・と！　作曲しちゃおうかな！」

珠ちゃんが言うには、あとは応用のことくらいで、作曲に必要な知識と技術自体は〝ふ

たつの関門"でもう教え終わってるっていう話だった。っていうことは、あとは私の工夫次第で曲は仕上がるっていうことでもあると思う。
「ふふ、よーし……ではさっそく……」
「……」
んーっと。ん？　さっそく……。
「……何するんだっけ……」
あれ？　えーっと……ああそうそう、そうだ。
「そうだ、メロディ考えなきゃだよね」
メロディ。うん。オリジナル曲なんだから、今度は《カントリー・ロード》の偽者っていうわけにはいかない。オリジナルのメロディ考えなきゃ。えーっと……。
「ふんふふーん、ふふん……ふんふ……うーん……」
むむむ……やっぱりそう簡単には良いのは出てこないよね。うーん……。

――そして20分後。

「ハッ！　こ、ここ……これだぁ――っ！」

出た！　降りてきた！　天才的なメロディー！　思いついちゃった！　うわあああ！　こんなことが私にもあるんだ！　どうしよう！　これすごい名曲になっちゃうんじゃない⁉

「た、大変……！　早くパソコンに打ち込まないと……！」

私は、突如降りてきたスゴいメロディをドンドン打ち込んでいく。耳コピやってて良かった。珠ちゃん家で音楽ソフトを使うのに慣れてたおかげで、メロディを打ち込むのは意外とすんなり行けた。

「……やった。やった！　すごいの思いついた……！」

打ち込んだ単音のメロディを再生してみる。サビの部分だけだけど、これかなり良いんじゃないかな。自分でビックリ。正直凡人中の凡人だった私が、まさかこんなの思いついちゃうなんて……！

「修行の成果が出てきたようだね……」

やばい、なんか変なテンションになっちゃう。よし、すごいサビを思いついちゃったし、この調子でどんどん行こう！　えーっと次は……。

「あれ、次って何するんだっけ……？　次は……」

……えーっと、次はたしか……ハーモニーをつけるんだっけ？　いや、その前にこれ

サビだけだし、メロのとこも考えなきゃだよ。そうそう、構成的な。えっと、メロのとこかぁ。メロのトコ……う～ん……。

「サビが良すぎてメロが全然出てこない……。しまった……これサビが良すぎるよ……」

困ったなぁ。でもサビはこれで行きたいしなぁ。うーん。うーん……。

「珠ちゃんならこういう時どうするんだろ……ハッ！」

ポツリと呟いたひと言に、私はひらめいた。珠ちゃんならきっと……！

「よし！　おやつを食べよう！」

私は踵（きびす）を返すと、台所のお菓子ボックスの中からクッキーとチョコとポテトチップと、あと冷蔵庫からオレンジジュースを持ってきた！

「ふっふっふ……珠ちゃんならきっと、こうするよね……！」

そして私は、お菓子を食べる。おいしい！　いや、別に珠ちゃんがとかそういうわけじゃなくて、ぶっちゃけ自分が食べたくなっただけなんだけど、でもなんかそれって珠ちゃんっぽいっていうか、むしろアリな気がするし、いいかも。うん。モグモグ。おいしい。

私は、お菓子を食べる。モリモリ食べる。そしてついでに動画サイトを開いて、お笑いの動画を再生した。ムシャムシャ、もぐもぐ、もぐもぐムシャムシャ。ゴクゴクゴクリ。

「おっと……」

気付いたら1時間が経っていた。いつのまに……！

「……さぁてと、これでインスピレーションの充電は完了だよ！　もっと思いついちゃおう！」

ちょっと遊びすぎたけど、これくらいでちょうどいい。と思う。さてと、曲の続き作ろうかな。なんて、鼻歌まじりに私は音楽ソフトを開くと、もう一度曲を作り始める。

……が。

「あ、あれ……？」

さっきのメロディを鳴らしてみる。シンプルな単音で鳴る、短いサビのメロディ。でも……なんか……。

「こんなのだったっけ……？」

おかしい。さっき思いついた時はこんなのじゃなかったはず。もっとなんていうか、切なくて勢いがあってイイ感じだったのに、あれ？

「同じやつだよね……？　あれ？　こんなのじゃないはずなのに……」

でもたしかに、よくよく思い出してみたらこのメロディで間違いない。っていうか変わりようがない。このメロディは間違いなく私がさっき書いたメロディなんだけど、なんだか、まるで別物みたいに感じた。

CamScannerでスキャン

「……え、っていうかこのメロディ、ダサくない……？」

ほんの1時間前はとんでもなく名曲に聴こえたメロディなのに、今はなぜか、ただのよくあるありふれたメロディに……どころか、むしろちょっとダサいようにすら聴こえた。サビって言ってたけど、これサビって、ダメじゃない？

「……な、何で？」

この1時間で私に何があったの……？　どんな心境変化があればこんなに違う気分になるの!?　どうして？　……さっきの名曲は一体どこに行ってしまったの……？

「これは、どういうことなんだろう……」

腑に落ちない。でも、聴けば聴くほどダサい。これはナイ。だったら、さっき私が感じた名曲感は……。

「……まあ、とりあえずもう一回サビ考えよう……」

よく考えたら、あれがいけなかった。お菓子休憩。あの時お菓子休憩せずにそのまま作ってたら、もしかしたらあのまま良い曲になってた……？　いや、それもどうなんだろ。今となってはそれもあやしい。

「うーん……良いのが出ない……」

う～ん……う～ん……。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「私、才能ないかも……」

あれからさらに2時間、私はずっとうなり続けてる。ビックリするくらい何も進んでない。最初のひらめき（？）以来、私のインスピレーションは閉じっぱなしだった。

「……こういう時って、どうすればいいんだっけ」

今までさんざん珠ちゃんに教えてもらったはずなのに、ひとりになるとこんなもんなのかって感じる。あーそっか……私、わかった気がしてただけなのかも。珠ちゃんって説明上手だから、なんか私も一緒にわかった気でいたけど、実は全然わかってなかった説。なんだろ、私真面目に聞いてなかったのかな。いや、そんなわけじゃないと思うんだけど……。

私は、ちょっと途方に暮れつつ部屋の天井を見上げる。この10日間、わりといろいろ教わったつもりだったけど、実はわかってなかったのかな……？

「そうだ……！」

私はひらめいた。今こそ、高いお金を出して買ったあの理論書を読む時なのかもしれ

CamScannerでスキャン

ない。10日前の私にはわからなかったことでも、今ならたぶんわかるんじゃないかな……？

「よし……！」

そして私は、いつか開いたあの本『サルでもわかる作曲入門』をもう一度開く。

「えーなになに。『鼻歌で作曲してみよう』かぁ。なるほどフムフム」

……それはさっきからやってる。けど良いのが出ない場合は……。

「『良い曲をたくさん聴いて、体に覚えさせましょう』。……なるほど」

良い曲をたくさん聴くかぁ。でも、良い曲ってそもそも何なんだろう。私の好きな曲って良い曲なのかな。良い曲をたくさん聴く……。

それはまぁ置いといて、次のページは……。

「『ワンフレーズ作ってみましょう』……うーん……」

それができたら苦労しないっていうか。

「『スケールを決めましょう』……？　スケール？」

……何言ってるんだろう。スケールって何？

「『コード進行の基本はT・D・SD』……」

………。トーキョー・ディズ……あー。じゃないよね。なんだろうこれ。トニック

にドミナントに……？　サブドミナント……？　初めて聞いた言葉……。
…………。
「サルにこんなのわかるかぁ——っ！」
そう叫びながら私は本をベッドに投げると、そのまま自分もベッドにダイヴする。そして枕に抱きついてゴロゴロした。
「んんんん！　どうすればいいんだぁ～～ぁあ！」
ビックリするくらい八方塞がり。私10日間も何してたんだろう。何で？　え？　ちょっとは成長したはずだよね？　耳コピもできるようになったし、ベースとかハーモニーもちょっとだけどわかるようになった。だったらもう少しいろいろわかっても良さそうなのに……。
「……むむむ……頑張れいろは。珠ちゃんをビックリさせるんだぁ～……」
もっともっと考えなきゃ。わかる、わかる、わかるはず。だってあとは工夫次第なんだよね。
「負けるかぁ～！」
私はもう一度、『サルでもわかる作曲入門』を開く。……どこを読めばいいんだろう。
「『ベースのつけ方』……？　そうだ、ベース！　ベースが必要なんだよね！　耳コピの時もそうだったもん！　メロディの次はベース！　そしたら曲っぽくなったよね！」

わかった。私のさっきの曲が輝きを失ったのは、ベースをつけてなかったからだ。そうとわかればこっちのものだよ!

「そうだそうだ、このメロディにはベースがあってこそだよ。危ないところだった!」

そして私は、名曲になる予定だったけど今は全然良いと思わないメロディをもう一度聴く。うん、そうだ。その通りだこれ。私、このメロディ書いてる時に頭の中でベースの音とかもなんかざっくり想像してた。そうだ、それさえあれば、このメロディはまたあの輝きを取り戻すはず。蘇れ名曲……!

「このメロディにつくベースは、たしかこんなイメージの……」

何となく想像していたベースをつけていく。でも、その手は途中で止まった。

「いや……これじゃない。これなんだけど、これじゃない……」

たしかにこういうベースのイメージだったと思うんだけど、メロディと一緒に再生したら、むしろさらにダサくなった。これはいよいよ、人に聴かせるわけにはいかないレベル。私の頭の中からこんなにダサいものが生まれるなんて、逆にすごいって思うほど。

「……これはダメだ。……うぅ……じゃあどうすればいいの……」

あぁ……どうにもならない……。どうしよう……。珠ちゃんビックリ大作戦は完全に破綻だよ……。これを聴かせたらビックリはするだろうけど……そういうビックリじゃ

なくて……。

「トホホだよ……やっぱりひとりじゃまだ難しいみたい……お餅食べよ……」

醤油をたらした焼き餅を食べながら、私はそっとパソコンを閉じた……。

今日はここまで。あ、どうしよ。珠ちゃんに思わせぶりなメール送ったんだったった……。

CamScannerでスキャン

珠美のひと言

天才女子高生の参考文献

ここでは、あたしや、あたし以外にも多くのプロの作曲家たちが絶讃している、理論書の中でも特に圧倒的な名著を紹介してみるよ。

○伊福部昭 著『音楽入門』（全音楽譜出版社）

音楽を始める前に、すべての人に読んでほしい本。「商業派」にも「芸術派」にも「同人派」にも通じる、音楽というものはつまり何なのかっていう話に触れてる本。

○藤巻浩 著『聴くだけ楽典入門～藤巻メソッド～』（ヤマハミュージックメディア）

音楽の基礎ルール〝楽典〟について、ていねいにわかりやすく、それでいてユーモアも備えた感じのやさしくて確かな一冊。付属ROMに入っている講義音源を聴きながら一つひとつ読み解いていけば、まず間違いのないちゃんとした楽典知識を身に付けることができるだろう。

○マーク・リヴァイン 著『ザ・ジャズ・セオリー』（エー・ティ・エヌ）

タイトルはジャズっぽいけど、実際のところは〝即興音楽を演奏するために演奏家が理解しておくべき音楽の仕組み〟の本。値段はすごい高いけど、音楽理論の全体像を知ることができた最高の一冊だった。あたしの理論学習はこの本で終わったというか、これ以上はもう別にいいかなと思えたんだ。

○日本作編曲家協会 著『編曲の本』（ヤマハミュージックメディア）

名だたる大御所編曲家の先生方が、〝かなり個人的な偏りのあるアプローチ〟をそれぞれに語っている、現場直送の赤裸々な本物の現場テクニックが満載の一冊。これも超高いけど、買って後悔することはまずない！

○藤子・F・不二雄 著『藤子・F・不二雄のまんが技法』（小学館）

まんがの作り方の本。一見関係ないように見えるけど、この本は創作に関するものすごく重要なことが毎ページひしめいてる究極の一冊。

CamScannerでスキャン

わかりすぎたいろは

たーまちゃんっ！あけましておめでと〜♪
おお いろは あけまして お
めぁっ!?
おお〜獅子舞か!?
えへへ♪そう〜！
珠ちゃんこういうの好きかと思って!!
作ってきちゃった!!
うわぁ あたしの印象どうなってんだ

12日目

テクスチャーの話

CamScannerでスキャン

「いやぁ、しかし驚いた。この獅子舞帽子も自分で作ったのかぁ〜！」

「うん♪」

1月4日。三が日は過ぎてるけど、今日は珠ちゃんと初詣に行ってきた。今は珠ちゃん家。レッスン初め。

「ビックリさせるってこれかぁ〜！　いやぁ一本とられた。すごいないろは」

「……う、うん」

……昨日あれから私は、珠ちゃんビックリ大作戦をプランBに変更、なんか珠ちゃんがビックリしそうなぬいぐるみ帽子を作るって作戦に変更した。……ホントは作曲でビックリさせるつもりだったんだけど……。

「あたしはてっきり、なんか作曲関係のことで驚かすのかと思ったよ。斜め上だった」

「ァ、あ〜……それは思いつかなかったなァ〜〜そっかぁ、それやれば良かったなぁ」

ぐぐ……ホントはやろうと思ったのに……。

「さてと、新年一発目のレッスンだな。とはいえ、レッスン自体ももう大詰めだ」

「うん。今年もよろしくね」

「ちなみに、自習って何した？」

CamScannerでスキャン

「う……」

「う？」

どうしよう、なんて言おうかな……。

「何もやってないとか？」

「いや、えっと……そうじゃないんだけど……」

「ああ、何かはやってるんだ。だったらオッケーだ。何やったんだ？」

「エ、えっと……その……」

珠ちゃんが、すごい見てくる。ああ、なんかもうダメだ、ちゃんと言おう……。

「実は……曲作ってみようとしたんだけど、変なのになっちゃったから……」

「おお！　曲作ろうとしたんだ！」

「うん……」

「ちょっと聴かせてみてよ！　思った以上にやってるんだな！」

「……絶対言うと思った……だから言いたくなかったんだ……」

「え、何で？」

「だって、変だし……」

「変で普通だって。大丈夫大丈夫。ジョン・ウイリアムズだってきっと初めての曲は変

な曲なんだから。たぶん」

「……え～……」

やだなぁ……聴いてほしくないなぁ……。

「……と、まぁ、どうしても聴かせたくないならそれはそれだな」

「あ、うん」

良かった、引いてくれた。

「でも、実際十分だ。曲を作ろうとしたっていうのは、ものすごくいいぞ」

「できなかったけどね……」

「そんなことはどうだっていいんだ。自分で考えて、悩んで、失敗する。これを繰り返して初めて、答えの価値がわかるんだ」

「それは本当にそうかも。今まで珠ちゃんから答えだけ聞いてる感じだったけど、今すごいいろいろ教えてほしいし……」

「だろ。悩めば悩むほど、答えを知りたくなるし、聞いた答えも忘れない。もしかしたらと思ったけど、作曲やろうとしてくれたのならバッチリだ。1日は完全に自分の力でやってみるっていう日を作ろうと思ってたけど、自発的にやってくれたならそれはもういいな」

「え……うん……そうかな」

あれ、なんか珠ちゃんすごくご機嫌だ。作曲しようとしたのってそんなに驚かれることだったのかな。

「さぁてと、だったら今日教えることはものすごくいろはの心に残る、とっておきのレッスンになりそうだぞ」

「そうなの？」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「――でねメロディは結構良い感じにできたと思ったんだ。なんか、どっかで聴いたような気もしなくはないけど……でも、うん。メロディはなんとかそれっぽいのができたと思う」

「問題はそこからだな。曲を曲として仕上げるためには、メロディだけじゃなくベースやハーモニーをつけなきゃいけない。でもいろはの良い感じだったはずのメロディは、ベースを入れた瞬間から『なんか違う曲』になってしまった、こうだな？」

「うん、そう」
私は、昨日の自習でやったことを珠ちゃんに説明した。珠ちゃんは、なるほどそれか、みたいな顔をしながらうんうんと頷いている。
「……実はこれは初心者がぶつかりがちな難問のひとつでね。この壁にぶつかった作曲ビギナーは、ほとんど必ず理論書を開いて長いこと悩み続ける」
「やっぱりそこは理論書とか読んだ方がわかりやすいのかな……?」
「いいや、読んでもわからない。わからない人の方が多い。理論書を読んでこの問題が解決したって人は、その本のおかげじゃなくもともと感性が良かったってだけだと思うな。この問題『ベースをつけたら変になった』を解決するのに必要なのは、理論書じゃなくて発想の転換だ」
珠ちゃんの目が、なんだかいつもより爛々としてる。楽しそう……?
「ベースとハーモニーをどうやってつけるか……。この話は、あたしのレッスンの中でもっともアクロバティックな部分になるだろう」
「アクロバティック?」
「すべての理論書を読んだわけじゃないけど、たぶんこの方法をとっている理論書はこの世にないと思う。そしてここそが、作曲修得の鬼門。"1曲作る"を達成する上で一

番難しく、教えることが難しい部分だ」

なんだかちょっとテンションの高さを抑え込んでるような雰囲気の珠ちゃんは、続ける。

「大体ね、普通に考えて、まったく音楽経験のない人がたった2週間で曲を仕上げるなんて、まずあり得ないんだよ。特に、ベースやハーモニーをつけるっていうのはコードワークについての最低限の知識や、センスや慣れが必要になってくる。数値的な説明をいくらしてもそこはやっぱり〝感覚〟で理解するしかないし、その分時間もかかる。身に付けようとしてる間はそれで合ってるのかもわからなくて暗中模索だ」

「うん……もともとかなり無茶だよね、14日って……」

「でも今回それを実現するのは、あたし自身の挑戦でもある。実はね、これについては昨日の夜、いろはが来る前に自分でもいろいろ検証してみたんだ。『本当にこの方法で曲が仕上がるのか』っていうのを調べるためにね」

「この方法……？　って……む、難しいやつ……？」

「いや、ごくシンプルだ。使うのも『耳コピ』と『キー』だけだ。このふたつだけで曲を仕上げる。このふたつだけでだ。あたしの計算では、分厚い理論書に書いてある細かいことを覚えなくても、これさえ覚えればあとは感覚だけで曲を作れる。……はずだ」

「す、すごいね……」
「さて、じゃあやっていこうかモルモットこといろは」
「なんだか動物実験みたいだね……」
するとちゃんは、ひとまず私を立たせてひとりでピアノ椅子に座った。
「繰り返すようだけど、状況をもう一度整頓しよう。いろはは今、メロディっぽいものを作るところまでは何となくできた、でもベースやハーモニーを自分なりにこうかな？って一生懸命つけてみても、やっぱり変な感じにしかならなかった、こうだよな？」
「うん。なんか、すんごいダサくなっちゃった」
「ところでいろはは、その曲をどんな曲にしたいと思ったんだ？　具体的な曲名を挙げてくれていい」
「え？　えーっと……そうだなぁ。歌っぽいやつにするつもりで、えーっと……たとえばなんだけど、《となりのトトロ》みたいな……ああいうのとか……」
「トットロ、トットーロのやつ？」
「うん」
「ジブリ好きだなぁいろはは」
「うん。すごく好き」

CamScannerでスキャン

「なるほど。好きなものをしっかり自覚するのは大事なことだ。いいぞ、そういう完成形のビジョンがあるのは素晴らしい」

「うん。ボンヤリとだけど。でも、頭ではそう思ってても私のメロディじゃあんまりああいう感じにならなくて……」

「いいや違う。ちょっと乱暴かもしれないけど、ハッキリ言って、どんなメロディだったとしても《となりのトトロ》みたいな雰囲気にはできるんだ。メロディの内容は関係ないと言い切ってしまってもいい」

「え……そうなの？　それはさすがに……」

「それを証明するのが、今から教える秘中の秘のテクニック――『テクスチャー』だよ」

「テクスチャー？」

「これはもしかしたら理論書には載ってない言葉かもしれない。これはあたしに編曲を教えてくれたある人が使ってた言葉だ」

⁉

「珠ちゃんに編曲を教えた人⁉　そんな人いるの⁉」

「ああ、いるいる。そりゃもちろん。あたしはバカだけど行動力だけはあるからな。好きな感じの曲を書いてるプロの人に会いに行って、その時にいろいろ聞いたんだ。相手

にされないかと思ったけど、意外なくらい真剣に教えてくれたよ」
　ああ、やっぱりどうかしてるよこの子。何その行動力……。
「で、だ。その『テクスチャー』という技術が、今回の目玉商品というわけだよ。すごいんだぞ。これを知った時、あたしの音楽の世界は一気に広がりを見せた。言うなればこれは、裏技みたいなもんだ」
「裏技！　良い響きだね！」
「裏技って良いよな！　ショートカットしてる感じして！」
「う……うん！　なんかズルそうだけど！」
「作れてしまえばこっちのもんだ。道筋なんてどうだっていい」
「それもそうだね」
「さぁてと、じゃあ今からいろはにおもしろいものを聴かせてあげよう。ちょっと5分ほど準備させてもらうよ」
　そう言うと、珠ちゃんはパソコンの中の音楽ライブラリから《となりのトトロ》を選んで、再生し始めた。
「耳コピするからちょっと待ってて」
「え、耳コピするんだ!?」

CamScannerでスキャン

そう言うと、珠ちゃんは《となりのトトロ》を耳コピし始めた。その手つきの速さ……ああ、これが上級者のスピード感なんだなぁ……あざやか……。……ん？

「珠ちゃん、これ、メロディじゃなくてベースじゃない？」

「うん、ベースだ。その通り。これでいい」

《となりのトトロ》のベースだけをどんどん耳コピしていく珠ちゃん。1回曲を聴いて2回目を聴く頃にはもうほとんどリアルタイムで耳コピしてる。3回目は最終チェックの微調整くらいで、本当に5分ちょっとで耳コピしちゃった……。

「さて、これで《となりのトトロ》のベースが〝手に入った〟」

「手に入った……？」

「そして次。それとは関係ないもう1曲を耳コピする。……この曲だな」

そう言いながら、珠ちゃんは同じ手順でもう1曲耳コピを始める。あっ。

「『アラジン』の《ホール・ニュー・ワールド》！」

「うん。ディズニー映画『アラジン』で有名なこの曲だ。一瞬で打ち込むからちょっと待ってね」

そう言って珠ちゃんは、再生するより速いんじゃないかってくらいのスピードで《ホール・ニュー・ワールド》を耳コピしていく。……ん？

「こっちはメロディを耳コピするの？」
「そうだ。ちょっと待ってろよ」
そして、また超絶技巧の素早い耳コピ。
「……よし完了」
「……本当にすごい早業だね……」
私だったらこの耳コピだけで30分以上はかかるのに……。
「……さてと、何をするのかもう大体予想はついてる気がするけど……」
「実はもしかしてとは思ってるんだけど、つまりそういうことなの……？」
トトロのベースと、アラジンのメロディだけを耳コピ……。このあと珠ちゃんがやることは……まさか、まさかだけど……。
「このふたつを混ぜる……とか……？」
「そうだ」
「……そんなことってできるものなの？」
「それがなんと、できてしまうんだよ」
いや、それはさすがに、私音楽詳しくないけど、そんなことできちゃったらメチャクチャっていうか、そんなに音楽の仕組みって単純じゃないと思うんだけど、ホントに？

「あはは！　疑ってるな。じゃあさっそく、実践してみせよう。このふたつを混ぜる時にまずやるのは、テンポは当然片方に合わせなきゃいけない。なのでとりあえずは、トトロの方にテンポを合わせる。この音楽ソフトなら、打ち込んだ《ホール・ニュー・ワールド》の演奏データ自体をトトロの方にコピーしたら、テンポも勝手にトトロと同じになる。さて、これで同じ曲データの中にそれぞれ別のメロディとベースがある状態になった。これを再生すると……」

そう言うと珠ちゃんは、トトロのベースと《ホール・ニュー・ワールド》のメロディと同時に鳴らし始める……すると……！

「……え、あれ？　変だよ……ね……？」

「おう、変だな」

やっぱり、こうなるよね。うん、私の予想はハズレてなかった。そうだよ、そんなに簡単な話なわけないって思ったし。こうなるよね。グチャグチャ。《ホール・ニュー・ワールド》のメロディとトトロベースを混ぜた曲は、なんか心が不安定になる気持ち悪い曲になった。

「こ、これでもオッケーってこと……？　じゃないよね」

「もちろん、これじゃダメだ」

「だよね。良かった」
「耳コピを使うのはここまでだ。そして次にやるのが……」
「やるのが……？」
「『キー』を使った調整だ」
「キーを使った調整……」
「この合成曲が気色悪いものになったのには、明確な理由がある。それはたったひとつ。『キーが違う』からだ。つまり、基準になる『ド』の位置がそれぞれ違う」
「うん。具体的にはわからないけど、たぶんそれぞれ違うキーなんだよね？」
「だから、これを片方に合わせる。今回の場合はトトロの方に合わせようかな。ちなみにトトロのキーは『F』、《ホール・ニュー・ワールド》のキーは『D』だ。宿題で12キーを弾いただろうし、何となく感じはわかるよな？　《ホール・ニュー・ワールド》の方がちょっと低い。だから《ホール・ニュー・ワールド》のメロディを鍵盤3つ分、全部こうやって高くしたら……この《ホール・ニュー・ワールド》だって『F』のキーの《ホール・ニュー・ワールド》になる！」
「ん⁉　なんか今すごい複雑なことしなかった⁉」
「文字にしたら複雑だけど、要するにメロディの音の高さを丸ごと上げたってだけの話

CamScannerでスキャン

だよ」
「な、なるほど……」
「さ、お楽しみはここからだ。『F』のトトロのベースと、『F』に合わせた《ホール・ニュー・ワールド》のメロディ。その状態でふたつを一緒に鳴らすと……」
そして珠ちゃんは再生ボタンを押す。
「……こ、ここ、これは……っ！」
そして再生された曲は、ビックリするくらいちゃんとした曲だった。たしかにトトロっぽい雰囲気。だけど、メロディは《ホール・ニュー・ワールド》。……何これ!?
「驚いただろ。ベースとメロディって、実はほかの曲のものでもわりと普通に使えてしまうんだ」
「こ、こんなのアリなの!?」
「アリかナシかで言ったら、アリだ。……おっと、トトロと《ホール・ニュー・ワールド》じゃ曲の長さが違うから、ちょっとだけ調整しないといけないね。AメロBメロCサビに対応する部分にメロディをズラして……よし。まぁこんな感じで多少の手作業はいるけど……ほら、これでもっと完璧だ」
「うわぁ……」

すごい。なんか、もともとこういう曲だったんじゃないかってくらい自然だ……。別々のメロディとベースをくっつける……そんな、できそうでできなさそうなことが普通にできちゃうなんて……。

「な。言っただろ。『とりあえず曲を作る』っていうコンセプトなら、この方法で曲を作ることはいくらでもできると言っていい。ああ、もちろん、実際にこれをやる場合はメロディはオリジナルのものってのが条件だ。今は既存の曲をふたつ合成してみたけどね。それこそ、昨日いろはが作ったらしいオリジナルのメロディとかね。でも、メロディ以外はとりあえずこれでいい。とにかく模倣。模倣に次ぐ模倣。それをちゃんとやって、『良い状態のベースとメロディ』とは何なのかを体に覚えさせていくのがまずは肝心だ」

「……そうなんだね。なんか、これはちょっとビックリ……たしかにこれは裏技だね」

「だろ」

「でもやっぱり……これってパクリみたいな感じじゃないのかな……?」

おそるおそる聞いてみる。たしかにこれは驚愕の事実だったけど、でも、だったらこのベースって私が考えたものじゃないわけだし、それって悪いことなんじゃないかな……?

「……そういう感覚を持ってるのはすごく良いことだ」

そう言うと、珠ちゃんはちょっと笑いながら続ける。

「大丈夫だいろは。このやり方が続くのは、せいぜい3回くらいなもんだよ」

「え？　そうなの？」

「個人差はあるけどね、3回か5回か、人によっては1回か。それくらいでこれはもうしなくなる」

「どうして？　こんなに便利な裏技なのに……？」

「理由はひとつ。バランスがある程度わかったらね、『もう自分で作りたくなっちゃう』んだよ」

「……そうなの？」

「実際これは、ほとんど人の絵をなぞってるようなやり方だ。でも、ちょっとでも絵が描けるようになったらみんな、自分で好きなポーズや表情を書きたくなる。大事なのはね、こうやって1回でもちゃんと写し絵をするってことなんだよ。そうすれば、あとは自分で好きにやりたくなる。これはほとんど、誰でもそうだ。心配しなくても、この裏技に頼りすぎてしまうなんてことはない」

「そ、そうなんだ」

「あともうひとつ言うとね、この技、別の曲のベースを貼り付けるっていうテクスチャー

という技は、大なり小なりプロもよく使ってるものだったりする」
「え、そうなの？」
「もちろんだ。何でかっていうとね、音楽のプロと言っても世界中のすべての音楽をわかってるわけじゃない。だから、依頼された種類の音楽について詳しくないなんてことも結構ある。そういう時に、このテクスチャーという技を使って、雰囲気を借りてくるんだ。メロディはもちろんオリジナルでね。そうすると、依頼された通りの雰囲気のある、でも自分のオリジナル曲っていうものを用意することができる。これは作編曲のプロになる上で必須のテクニックだと言ってもいいくらい、誰でもできるし、誰でもやっているものだ。まぁもちろん、手は加えないといけないしそのままってことはないけどね」
「そ、そうだったんだ……すごいね……」
「完成されたバランスを体に叩き込む、そして、自分のバランスはその中で見つけていく。みんな、そういう順番でうまくなっていくんだ。いろはは読んだことないかもしれないけど、それこそあたしの大好きな藤子・F・不二雄先生が手塚治虫先生のところに持っていった原稿なんて、モロに手塚治虫先生の影響を受けてる、ほとんど模写みたいな絵柄だった。でもそうやって、一番完成されたものを体に叩き込んで、そしてそのあとに、自分のバランスを見つけて数々の名作を生み出していった。だからまずは、好きなもの

の真似で全然いいんだ」

＊～＊～＊～＊～＊～＊

「さて、これであたしが教える技術と知識と応用は全部だ。あとは、これを駆使して曲を作るのみ。次は最終工程、ズバリ『作曲の仕方』だ」

「うん。いよいよなんだね……」

全部で12日間、いろんなことを覚えてきたけど、ついに曲を1曲作るところに来たみたい。

「最後の仕上げは、明日と明後日の2日がかりでやる。ここがクライマックスだな！」

「うん！　あ、ねぇねぇ珠ちゃん、だったら、泊まりで2日かけてやるのって駄目かな……？」

「え？」

お泊まり会で作曲のレッスン。実は、前から言おうと思ってたんだよね。

「お、おう、泊まりか、うん、いいよ。ど、どっちの家？」

あれ？　なんか珠ちゃん、変な反応？

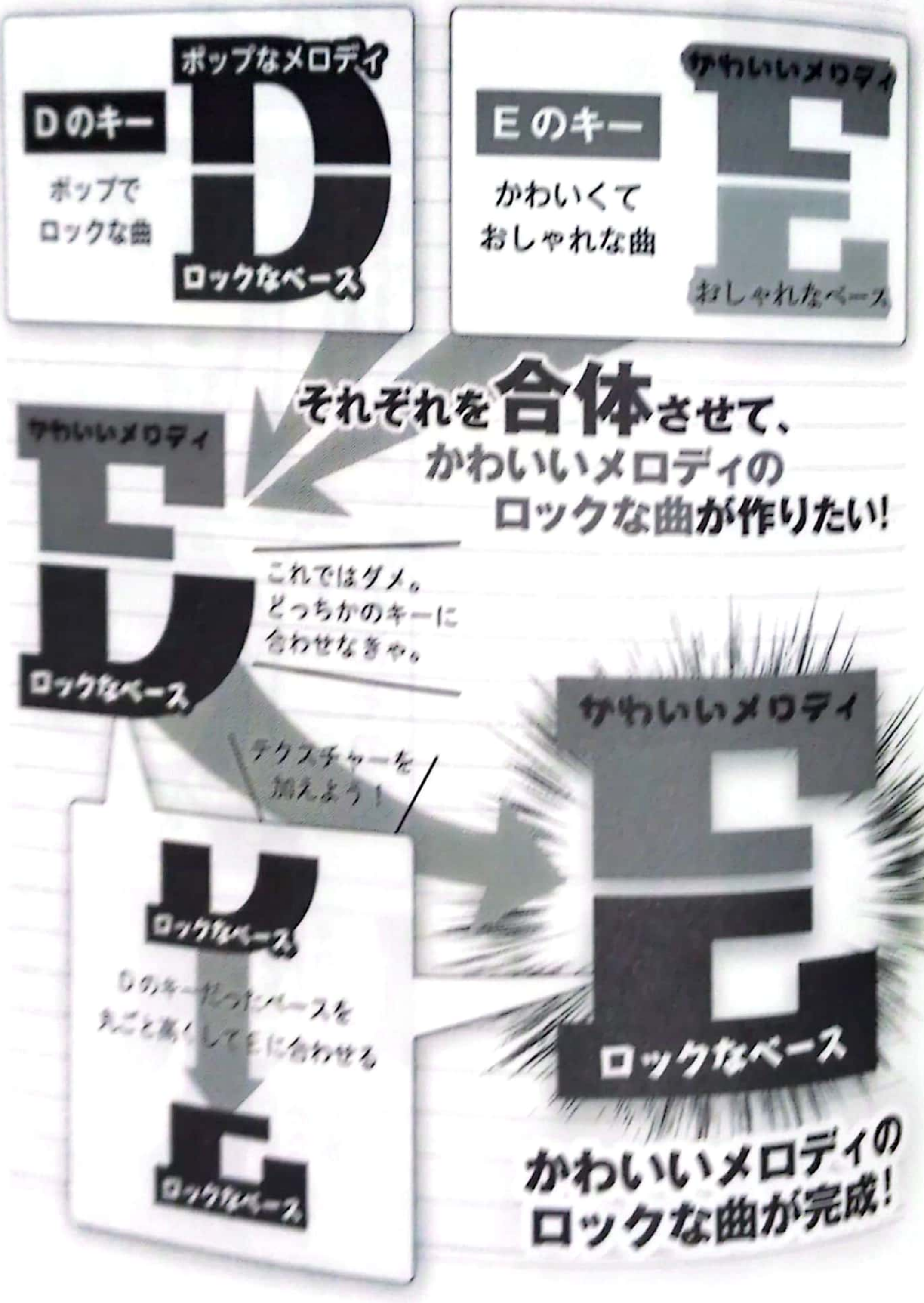
「うちは大丈夫だけど、珠ちゃん家はどうなの？」
「あ、ああ！　じゃあ聞いとくよ！　うん！　またメールする！　どっちでもいいよ」
「……？　うん」
――玄関で手を振って、いつもの帰り道を自転車で走る。そういえば、何回も通ったこの道も、レッスンで通うのはもう明日でおしまいなんだ。そう思うと、なんだかちょっと、いろんなこと思い出しちゃうな。
お正月の、冬の冷えた夕方の風を頬に受けながら、私の自転車は行く。
今日はここまで。

CamScannerでスキャン

珠美のひと言

テクスチャーって要するにこんな感じ

「テクスチャー」とは、雰囲気の違うふたつの曲のメロディとベースを合体するという裏ワザだ。実際には調整が必要なこともあるが、まずは概念として理解しておいてくれ！



わかりすぎたいろはⅡ

……
なにをお願いしたの？
ん？…ああ今年も楽しいことありますようにって
えっなにその顔
いや…珠ちゃんならもっとこう……その……うん
だからあたしの印象どうなってんだよ

13日目

作曲合宿の話・前編

CamScannerでスキャン

「おはよう珠ちゃん」
「よお、来たな」
いつもどおり、珠ちゃん家に来た私。でも、今日はいつもとちょっと違う。そう、今日はついに、作曲レッスン最終日。最後の詰めはお泊まりセットを持っての集中合宿だった。
……という名のお泊まり会だった。
「なんか、いつもよりワクワクするね！」
「そうだな！　お菓子は買ってきたか？」
「うん！　あとお母さんが、これお家の人にって。ドラ焼きの詰め合わせかな？」
「おお！　いいな！　あたしらで食べよう！」
「え？　えーっと……うん！　食べよう！」
いつのまにか10日以上経ってる作曲レッスンも、今日で最後。なんだか、そう考える

とちょっと寂しい。

「さて、改めて。今日までよく頑張ったな」

「ううん。こっちこそ、今日まで面倒見てくれてありがとう」

「うん。実感はわかないだろうけど、今日までいろはに教えたことで、作曲に必要な最低限のものがすべて揃っている。いわば、部品が全部揃ってるみたいな状態だ」

「まだ作れる気はそんなにしないんだけど……」

「うん。部品があっても、組み立て方がわからないなら作れない。というわけでだ、ついに今日は集大成、今まで教えた全部のことを使って、1曲作っていくぞ」

「うん。よろしくお願いします！」

「よーし！　始めるか！　さぁ、好きな曲を作るんだいろは！」

「うん！　……え!?」

ここにきて投げっぱなし……？　いや、いつものやつだよね。わかってる。

「……と見せかけて、っていうやつだよね♪」

「何を言ってるんだ。自分でやるんだよ」

「え、え～……」

どうしよう。こういう振りの時はいつも「できないもんだろ?」って感じの流れだったのに……。

「私が教える最後の工程は『自分で考える』だ。一昨日も自分で考えただろうけど、今度は全部のパーツが揃ってる。考えれば必ず自分で1曲作れる状態になってるってことだ」

「ん~……。でも、一昨日と同じことになる気がするんだけど……」

「じゃあ、思い出してみようか。いろはが今まで何を覚えてきたのか」

「えっと……」

私が覚えてきたこと……。

「ん~……いろんなことあったけど、多すぎてどれから話せばいいか……」

「一番覚えてることは何だ?」

「えっと……」

一番覚えてることは、そうだなぁ。……珠ちゃんとちょっと喧嘩みたいになったこと……。

「……一番覚えてるのはやっぱり、最近の話だったからだけどキーとか、テクスチャーの話……かな」

「そうか。あれもまぁ大事な話だよな。たしかにいろいろ話したから、これっていう感じでもないかも。よし、改めておさらいしていこう」

「うん」

「あたしが話したのはざっとこんな話だ。『自分の好きなものを思い出す話』『音楽理論の意味と必要性の話』『映画と作曲は似てるっていう話』『耳コピのやり方の話』『キーの話』『メロディと構成の話』『テクスチャーの話』。それぞれ、どんな話だったか思い出せるか?」

「えっと……うん、大体だけど思い出せると思う」

「この全部を使って、オリジナル楽曲を作っていく」

——11時　コンセプトタイム

「さぁ、やってみようか。最初の手順はこうだ。まずは、自分の好きなものを思い出す」

「好きなものを思い出す……それって、音楽で?」

「何でもいい。音楽でも、音楽じゃなくても。好きなものを思い出すんだ」
「好きなもの……。猫。チーズケーキ。飲むヨーグルト……」
「あー、それもいいけど、この時に思い出すのは〝感動したもの〟だ。チーズケーキは感動するけどね」
「あ、うん。感動したもの……遊園地のパレード、昔読んだ少女漫画……えっと……あと……」
「まだまだあるだろ。修学旅行に卒業式、好きなゲームのエンディング、毎週楽しみにして観たドラマ、グッとくる絵画、誰かからもらった手紙、欲しい服にアクセサリー」
「うん、いろいろあるね」
「それに感動した時のことを、まずは思い出すんだ」
感動したこと……いろいろありそうなものだけど、改めて考えると意外と出てこないなぁ。ワクワクしたこと……楽しかったこと……あ。
「……たとえばだけど『サンタクロースを待ってるクリスマスイヴ』とかもそれに入るのかな」
「おお！　入るよ。超入る。それどころかそれは一番強力な感動のひとつだ。良いの選んだな」

「だよね！　ああいうのってワクワクしたよね！」
「そう、ワクワクしたことやドキドキしたもの思い出す。映画でも実体験でも、それはどっちでもかまわない。まずはそれが原点だ。それが作曲をするために一番必要なもの、〝伝えたいこと〟だ。さぁ、それをもっと深く思い出すんだ」
「うん。じゃあ私、サンタクロースを待ってるドキドキ感みたいなのを曲にしたいな」
「よし、じゃあメモしておこう！　この紙に書く！」
「書くの？」
「うん。書くんだ。今回作る曲のコンセプトは『サンタクロースを待つドキドキ感』」
何でわざわざ書くんだろう。
「頭にハテナが出てるな。これを書く理由は、〝狙いを定めるため〟だ」
「狙いを定める？」
「作曲をしていく上で、あたしたちが扱うのは音っていうものすごく曖昧なものだ。これかな？　あれかな？　って感じでいろんなアイデアを出してると、うっかり『ズレてるけど良いアイデア』が出ることがある。良いアイデアだから使いたくなっちゃうんだけど、それはズレてるからダメなんだ。料理でたとえるなら『作るものを決める』っていうことかな。どんなに良いプリンが手に入ったとしても、それをカレーに入れるっていう

のはナシだろ？」
「ああ……それはナシだね……」
「もし作るものがカレーなら、そのおいしいプリンみたいなアイデアはNGだ。でもプリンっておいしいから、どうにか使えないかなって思ってしまう。そしてコンセプトを間違えたまま進むと、結果、なぜか白米の上にプリンも乗ってるヘンテコな料理になってしまう」
「あ〜……そういうことかぁ……」
「だから書くんだ。今から作るのは『サンタクロースを待つドキドキ感』。これに合うアイデアを採用していく。作ってる途中で迷いそうになったら、この紙を見る。何が大事で、何をすればもっと狙い通りになるのか、そこを何度も思い出しながら作っていく。要するに、目印だね」
なるほど……それくらい覚えておこうと思えば覚えていられそうなものだけど、そうでもないのかな。
「じゃあ次の行程だ。"伝えたいこと"は決まった。でもまだこれじゃ足りない。足りてる場合もあるけど、あたしにとっては足りなく見える」
「え、何が……？　よくわかんないんだけど」

「だってさ、良いテーマだけど、普通じゃない？」
「あ〜……。まぁ、そう言われてみれば普通だけど……」
「さて、ここで次の工程に入る。次に思い出すのは2日目の話だ。『音楽理論の意味と必要性』の話」
「それってどういう話だったっけ……」
「『ルールを知ってるからこそわざと間違えることができる』、お笑いをたとえにした話だよ」
「あ〜！　あった！　そんな話もあったね！」
「うん。意外性を足す話。それを使うのがここだ。『サンタクロースを待ってるドキドキ感』を曲にする。ってことは、〝普通にやったら〟それってどういう曲になるんだ？」
「え？　普通に？」
「そう、普通にやるんだ」
「そうだなぁ……サンタクロースのドキドキ……『ジングルベル』とか、『サンタが街にやってくる』とか、ああいう曲かな……？」
「そうだな。それがまさに〝普通にサンタクロースのドキドキをやる〟って場合の音楽だ。それを踏まえた上で、じゃあどういう裏切り方をしたら〝意図的に間違ってる〟ってこ

となると思う？」

「う～ん……」

意図的に間違う……意外性……。

「クリスマスなのにロックっぽいとか……？」

「べタだな。それじゃ今ひとつだ」

「う……う～ん……」

たしかにベタかも。でも、じゃあ何がいいんだろ……？

「ちなみにここがね、実はかなり重要なポイントなんだ。その曲がおもしろいものになるかつまらないものになるか、ここで決まるって言ってもいい」

「何となくそんな感じするね。なんか音楽っぽくなってきたかも」

「いや、音楽のことはいったん考えなくていい」

「え？」

「今いろはが、『クリスマスなのにロックっぽいってどうかな』って言っただろ。この時点ですでに、考え方としてちょっとズレてるんだ」

「……う～ん……そうなの？」

「そうだ。ここで考えるのは、まだ音楽の話じゃなくていい。さっき考えた『伝えたい

て話そうとしてる」

「う、うん」

「いろはが作ると決めた『サンタクロースを待つドキドキ』ここに2日目の『意図的に間違う』を入れる。それは、クリスマスソングなのにロックとか、そういう何となくの話じゃないんだ。この〝伝えたいこと〟自体に、もう少しドラマ性をつけていく」

「……？」

「大丈夫だ、集中して考えてくれ。『サンタクロースを待つドキドキ感』が今回のテーマだ。けどさ、じゃあもっと具体的に、それってどういうシチュエーションなんだ？」

「シチュエーション？　それはもちろん、えっと、家でクリスマスケーキとか食べて、靴下とか手紙とか……」

「そうだろうな。それがいわゆる〝普通の場合〟、つまり『正しいクリスマス』だ」

「あ、うん」

「そういう正しいクリスマスを踏まえて、意図的に何か普通じゃない角度を用意する。たとえばそうだな……主人公は誰だ？」

「主人公？　えっと……考えてなかったけど……小さい頃の私？」

「だったらそこを変えてみよう」
「変えるの？」
「そうだ。主人公を変えると視点ももちろん変わる。自分以外の角度だと、たとえばどういうものがある？」
「そうだなぁ……えっと……サンタクロースから見たクリスマスとか……サンタクロースをやってるお父さんとか……」
「そうそう、そんな感じだ。いいぞ」
「トナカイから見たクリスマスとかは？」
「それは『赤鼻のトナカイ』とまったく同じだ。良い着眼点だけどね」
「あ、ホントだ……あ、だったら、たとえばこういうのってどうかな。『サンタクロースをもう一度信じてみながら寝てる、16歳の私』」
「いいな！　そう、そういうことだ！」
「え、こういうこと!?」
「そう、今のは抜群のアプローチだな！　『サンタクロースを待つドキドキ感』に、ひとつ新しいニュアンスが加わった。これでこの曲のコンセプトはただの童謡ではなく、いろはの妄想を閉じ込めた特別なシチュエーションになった！」

CamScannerでスキャン

「妄想⁉」
「そう、妄想だ。とてもいいぞ。よし、メモに追加だ『サンタクロースを待つドキドキ感』の下に『主人公は16歳の私。サンタクロースをもう一度信じてみながら寝てる』だ。書くんだ！　早く！」
「え⁉　う、うん」
言われるままに、ふたつ目のメモをしてみる。珠ちゃんが何でこんなに今の言葉に反応したのかちょっとわかんないんだけど、でも、良い意見だったみたい……？
「さてさて、見えてきたぞ、見てみろいろは。このメモを」
「うん。見てるよ」
そこには、今書いたメモ。うん。見てるけど……。
「聴こえてこないか？」
「何が？」
「何がって、曲がだよ」
「え」
やばい、珠ちゃんが……もしかして、〝プロのモード〟に入りかけてる……。
「珠ちゃん、あの……ゆっくり教えてね……？」

「ん？　ああ！　うんうん、大丈夫大丈夫、わかってるよ、うん。いやさ、このコンセプトを見た時点でもうすでにあたしの頭の中には、『これだな』って曲が鳴り始めてたりするんだよ。でもこれについては放っといてくれ。職業病みたいなもんだから」

「うわぁ……」

あ……危ない……やっぱりあのモードになりかけてた……。

「さてと、うん。いろはの言う通りだ。この状態じゃまだどんな曲になるのか曖昧だよな！」

「うん」

「そこで出てくるのが3日目の話だ」

「3日目って……どんな話だったっけ……」

「映画館に行った時の話だな」

「ああ、行ったね。映画の話……たしかえっと……」

映画館に行った時の話はたしか、映画館出たあと感想言い合うのって空気読むの難しいよねって話だったっけ。ああ、そうそれで、たしか、自分の好きなものを人の意見で変えるのはどうなのって話とか……あれ？　あれ？　それ今役に立つの？

「『映画と音楽は似てる』って話だったよな」

「……あ、ああ！　うん！　そうそう！　その話だった！」
そういえばそういう話もしたっけ……。
「さてと、この曲という物語がこの部分でもう一歩具体的になっていくぞ。山波いろは16歳が、年甲斐もなくまだこの年齢で改めてサンタクロースを信じる曲、その物語の詳細な筋書きがここで決まる」
「年甲斐もなく……って！」
「うん！　年甲斐もなく！　でもそれはすごいことだぞ。自信を持っていい。音楽を描くものすごく重要な絵の具のひとつは『ロマンチック』っていう絵の具だ。これをいっぱい持ってる人は、それだけで強いぞ。16歳にもなってサンタクロースがテーマの曲を作りたいなんて、なかなか言えることじゃない」
「え、えっと、褒められてるのかな……？」
「もちろん。全力で褒めてるよ。そこいらのスレたカッコつけな連中よりよっぽどストレートでロマンチックだ。それでいて、懐かしさもある。大人っぽくなんてならなくていいよ。音楽は、理想を叫ぶから価値があるんだ」
「えーっと……うん。ありがとう」
微妙な気分だなぁ……。私としては、もうちょっと大人っぽくなれたらなって思って

るんだけど……。

「さてさて、もっと具体的に考えていこう。３日目に考えたのは、物語としての音楽についてだ。ところで音楽には、ある程度の構成・筋立てがある。これは10日目に話したことだっけな」

「それって、AメロとかBメロとか、サビとかのやつ?」

「うん、それだ。Aメロ、Bメロ、サビ。それぞれでどんなドラマが起こるのか、ざっくり考えてみよう。これはメロディを作るための構成という作業だ。わざわざそんなことを意識的に考えながら作ってる人はあまりいないけど、みんな無意識にほぼ必ずこれをやっている。さて、この曲はどんな物語なのかな?」

「えっと……」

急に難しいなぁ……。どんな物語?　いや、だってまだ何も考えてないし、そんなの言えないよ……。

「う～ん……。何も考えてないかも……」

「何も考えてないのはそりゃそうだ。だから、今〝作る〟んだよ。作り話だ。どんな物語を作ろうか」

「う～～ん……」

CamScannerでスキャン

これがいわゆる、創作っていうことなんだろうな……精一杯考えてみてるけど、私ってこういうの全然出てこないなぁ……。
「難しく考えなくていい。じゃあ、この曲で一番良いシーンはどういうシーンだ?」
「それは、サンタクロースが私のところに来てプレゼントを置いていくシーンと、朝それを見つけた私……とか?」
「この物語のサンタクロースは、ファンタジーとして実在するものか? それとも、幻か?」
「え?」
何を聞かれてるんだろう……?
「どういう物語にするかって部分だよ。サンタはいないけどサンタを信じるっていうのがテーマなのか、実際にサンタに会っちゃう話なのか。この部分で方向性は大きく変わる。どっちだ?」
「だったらえっと、サンタを信じる気持ちがテーマの方がいいかも。そうだね、実際サンタさん来ちゃったらちょっと冷めるよね」
「そうか。だったらその方向で行こう。サンタを信じる心がテーマ。ってことは、サンタかもしれない誰かがプレゼントを置いて、朝それを見つけるいろは、っていうのが名

シーンなんだな？」

「うん！　でも、実はサンタさんはいなくて、ちょっとだけ良いことがある、みたいなのがいいかな」

「お、いいね。もっとそのへんを詰めてみよう。良いことってのはたとえばどういうことだ？」

「う〜ん……そうだなぁ……」

「こういう時、できるだけいろんな可能性について考えてみるんだ。たとえば、もしかしたら主人公はいろはじゃなくてもいいのかもしれないとか、そういうのも含めてね。守らなきゃいけない大前提のルールは、このコンセプトメモに書いてあることだけだ」

「うん」

「いろんな可能性を考えるんだ。これが、この曲の物語性を決めるアイデアの部分。そして、これこそがほとんどすべてだ」

「うん……あ、たとえばだけど……」

「おう」

「サンタを信じてない人がいて、その人のところにサンタが来るとか」

「なるほど、悪くないね」

CamScannerでスキャン

「ん～でもイマイチ？」
「いや、良い感じだ。だったら逆にさ、『サンタをいまだに信じてる友達』がいて、その友達のために頑張るいろは、とかどうだ？」
「わぁ～！　いいねそれ！」
「でもあれだな、それじゃ最初のテーマからちょっとズレような気もするな」
「そうかな」
「ズレすぎてるわけでもないけど、なんかこう、もう一歩グッとくる感じにできないかな」
「そうだなぁ……」
「う～ん……」
「たとえばだけど……」
「おう」
「友達のためにサンタになる私だけど、朝家に帰ったら自分にもサンタさんからプレゼントが届いてる……？」
「おお～、いいね！　そうそう、そういう感じだよ。良い感じにオチがついてる気がする」
「だよね！　やったぁ！」
「その話を聞く感じだと、むしろあれだな、その友達ってのはむしろ、そのドッキリに

付き合っているいろはの『サンタを信じたい』って気持ちを大事にするために逆ドッキリを仕掛けたって感じに見えなくもないな」
「……あ～。実は黒幕の逆サンタはその友達だった、的な？」
「その方がおもしろくないか？」
「そうだね、なんか、イイ話みたいになったね！」
「う～む、悪くない。じゃあ筋書きはどういうことになるんだいろは？」
「えっと……」
今の話をまとめると……。
「『サンタを信じてない友達をビックリさせるために私がサンタになってプレゼントを届けるんだけど、家に帰ったら私のベッドにプレゼントが届いてて、それはその友達の仕業だった』かな」
「そうだな、でもって、いろははそのことに気付かない方がロマンチックかもね」
「うん、そうだね。サンタいたー！ってなるほうが楽しいね」
「よしよしよし、ほら、だんだん見えてきたぞ。いろはの作る曲が！」
「見えてきたかな……？」
「ここで出てくるのが、3日目に話したことだ。『映画と音楽は似ている』。主人公や敵

役（ライバル）、脇役、世界観、そのへんが決まってくる。Aメロ↓Bメロ↓サビってのもここで出てくるな」
「うん。っていうことはえっと……主人公の私はメロディで……ライバル？っていうかその友達が珠ちゃんだから、珠ちゃんがベースで……」
「あ、その友達ってあたし？」
「え？　うん」
「おお、そうか。なるほど……」
あれ？　なんかおかしいこと言ったかな。なんか珠ちゃん変な顔してる……？
「それで、あれかな、脇役の人たちはクラスメイトとか、お母さんたちとか。世界観は普通に私たちが住んでるこの町だよね」
「うん、そうだな。はからずもまさかあたしがキャスティングされてるとは思いもよらなかったが」
「だって、そういうことするのって珠ちゃんくらいしかいないし」
「言われてみればそれもそうだ。うん。じゃあその役はあたしが引き受けることにしよう。さてと、じゃあAメロ、Bメロ、サビ、それぞれどういう展開になるんだ？」
「ここが一番悩むんだよね……」

「まあそうだな、そうなりがちだ。だからそういう時は、決まってるところから決めていくんだ」

「決まってるところ？」

「さっきの話だよ。いろはがプレゼントを渡すところと、いろはが家に帰って自分にもプレゼントが来てるのを見つけるところ、ここがサビだろ？」

「あ、そうだね、そこがサビだね」

「ってことは、Aメロはどうなる？」

「えっと……珠ちゃんが『サンタなんていないよ』って言ってるシーンかな」

「そうだな。あたし・ザ・現実主義者がサンタの存在を否定するところがAメロだ」

「いや、そこまでは……」

「いいんだって、創作なんだから、そういう風に振り切った方がおもしろいだろ？」

「あ、そうだね」

「そして、Bメロでは『だったら私がサンタになって……』っていろはがあたしを驚かせるために計画をするシーンだ」

「うん。間違いないね」

……ビックリさせる計画してたこともあったしね。失敗したけど。

CamScannerでスキャン

「そしてCメロ、つまりサビで実際に行動を起こす。寝まくってるあたしのところに現れたいろはサンタ。あたしがずっと欲しかったトナカイの帽子を枕元において、こっそりと帰る。しかし、寝て起きた枕元には、いろはのところにもプレゼントが届いていた」

……珠ちゃん、トナカイの帽子欲しかったんだ。今度作ろう。

「うん。そんな感じだね。いいね！　なんかすごい良い歌になりそう！」

「だな！　ほら、見えてきたぞ！　ベースとかハーモニーとかについては、実際に作りながらまた具体的なことを決めていこう。これで全体の構成はバッチリだ。うん、かなり良い感じにまとまったんじゃないか？」

「そうだね、作るのが楽しみ！」

――15時　メロディタイム

「さてと、いよいよだ。いよいよ、どんなものを作るのかも決まって、実作業の始まりだ」

「うん。なんか、良い曲になりそう」

「実際のところさ、作曲ってあたしの中ではもうここまでで終わりに近いんだよ」
「え？」
「たぶんほかの人もそうだろうと思うけど、経験を積むと実際に曲に書き起こすっていう工程はもうそれほど頭は使わないんだ。大事なのは、今かなり細かく考えた『どんな曲を作るか』っていう部分で、ここから先はもう作業なんだよ。プロのあたしたちからしてみたらね」
「そ、そうなんだ……私にとってはここからが一番難しそうなところなんだけど……」
「うん。それも間違いなくそうだ。まぁあれだよ、技術は、覚えてしまったらあとはもうアイデアしか勝負するところはなくなっちゃうって話。今のいろはは、その技術をひとつずつ覚えていく段階だからそれで普通だ。いつかいろはも自分の思う通りに曲を作れるようになったら、きっと同じことで悩むと思うよ。最終的には、アイデアが作曲のほとんど全部なんだ」
「うん、わかんないけど、たぶんそうなんだね」
「さてさて、じゃあ実際に曲を作っていこう。作るものもハッキリしてる。ってことは、あとはやるだけだ」
「うん」

CamScannerでスキャン

「最初にやることは何だ？」
「えっと……メロディを作る？」
「そうだな。いわゆる鼻歌メロディってやつだ。やってみよう」
「うん」
そして私は、オリジナルメロディを考えてみる。ふんふ～んふ……ふふーん……。
……なんかあんま良くない。
「なんかイマイチだね。良いの出ない」
「待て待て、もうちょっと頑張ってみろ」
「うん……」
……ふふーんふんふ……んんん～♪　あ、フフーンフンフン……どうだろ……。
「今のは悪くないかも……？　どう？」
「良いか悪いかを決めるのはいろはだ」
「ええ～……」
それが一番困るんだけどなぁ……。
「良いか悪いかを自分で決めるのはたしかに難しい。何を基準で言ってるのか自分でもわかんなかったりするんだろうしな。そこでだ、これを見るんだいろはは」

「え？」

そして珠ちゃんは、またさっきのメモを私に見せる。

「『サンタクロースを待つドキドキ感』『主人公は16歳の私。サンタクロースをもう一回信じてみながら寝てる』……だね」

「そう。いろんな仕掛けをしながら、結局はいろは自身が一番サンタを信じてるっていうこの感じ。この感じがこの曲における〝正解〟だ。自分の判断に不安を感じても、これが表現できてるものはオッケーだ。忘れそうになったらこれを見て思い出す。わざわざメモに残した理由は、こういうことだ。さぁ、これができてるメロディを、もう一度考えてみてくれ」

「うん……」

私はもう一回メロディを考える。それだったら、たとえば……ふふふんふふふん、ふーふーんふん……ふふふんふふふんららららんらーんらん……あ、いいなこれ。あ、でもダサいかも……？

「たとえばこういうのってどうかな。ふふんふふふん、ふーふーんふん……ふふふんふふんららららんらーんらん……ちょっとダサい……？」

「いや、いいね。良い感じだぞ。しつこめにねっとりとロマンチックで妙にクサい」

CamScannerでスキャン

「……それって褒めてるの？」
「褒めてる褒めてる。クサいメロディってのは、その人らしいってことだ。人の真似じゃ絶対に出ない一番自分っぽいメロディだよ。それが一番大事なメロディでもある」
「……うん。じゃあこの感じで行こうかな……」
「良いと思ったメロディはドンドン打ち込んでいけ。あと、何となく歌ったものでも今のメロディには明確に『キー』があっただろ？　そのキーは何だ？」
「え……何のキーだろ」
「キーボードで鳴らしてみればいい。白鍵と黒鍵のどれを使うかを見れば、そのキーがどれかってのは例の一覧表を見ればわかる。それと同時に、そのキーで使っていい音とダメな音もハッキリする。ほら、いろいろ決まってきたぞ。AメロとBメロはそのキーに沿って作ればいい」
「おお……なるほど……」
私の考えたサビのメロディは、たぶんキー的にはGが基準のドレミだった。
「よし。これでサビと、キーが決まった。今いろはが打ち込んだサビはなかなかいいね。サビってのはある程度到達感というか、音の高さみたいなのが必要になってくる。要は、〝盛り上がってる〟ってのが大事だ。ポップスにおけるサビっていうのをものすごくざっ

くり言っちゃうと、『音が高いからテンションも高い』ってことだったりする。Aメロはそれほどテンション高くないし、Bメロはそのサビに向かうために階段を駆け上がるような準備ってところだ。ポップスの構成っていうのはある程度パターンがある」

「……なるほど」

「さぁ、それを踏まえて、続きを作ろう。次はどうする？」

「えっと……メロを考える？」

「そうだ。メロを考える。ドンドン考えていこう」

「うん……でも、何か手がかりが……」

「手がかりはあるぞ。簡単だ。よく思い出すんだぞ、Aメロでやることは『珠ちゃんがサンタを信じてないシーン』だ。そして、使っていいのはこの曲のキー、Gのキーに出てくるドレミファソラシドだけ。ほら、この条件で必要になってくるメロディって、どんなだと思う？」

「お、おお……なるほど、ほんとだ、意外と手がかりっていっぱいあるね」

「そうだ。決まったことが増えていくと、クロスワードパズルみたいにほかの答えも限定されていく。大事なのは、その手がかりを忘れずに、必要なメロディをちゃんと用意するってことだ。あと、Aメロはあんまり高くない音使うようにね。サビが頂点だから、

CamScannerでスキャン

それもある程度計算してちょと低めくらいなところの音をAメロにするのがいい。盛り上がるのはサビ前のBメロで一気にって方がドラマチックだね」

「なるほど……」

たしかに、言われてみればAメロのメロディって結構条件が決まってる感じするかも。なるほどなぁ。曲作る前にあんなにいろんな話したのって、つまりここで迷わないようにするためなんだ。手がかりがしっかりしてると、たしかに無駄な迷いはない感じする。選べる音もGのキーの音だけだから、全部で鍵盤7つだし。

「たしかに、《となりのトトロ》も《ホール・ニュー・ワールド》もAメロは大人しめっていうか、音は低いね」

「だろ。サビは高いんだ。シンプルだけどまず間違いなく、ポップスはそうすればしっかり到達感のあるものになる」

「じゃあAメロは、こういう感じかな……」

そう言いながら、私は鼻歌ではなく直接キーボードで音を鳴らしてみる。

「うん。悪くないね。でもってね、ここにもちょっとコツがあるんだ。たとえば《となりのトトロ》だと「誰かが　こっそり」がAメロの頭だろ？　で、これってよく聴いてみるとさ、こっそりの『り』以外はただの繰り返しなんだよね。『り』のトコが高くなっ

てるだけで」

「ほぉ～！　ほんとだ！」

「テクニック的にはこれを『モチーフ』って言ってね、ひとつのフレーズをちょっと変えて何回も使うってやり方なんだけど、これをすると、その曲は同じことを別の形で何回もやることになるから、覚えやすい曲になる――すなわち、1回で覚えられる、キャッチーな曲になる」

「……キャッチーな曲！」

一昨日、どんなに頑張ってもキャッチーな曲にならなかったのは、つまりそういうことか!?

「お、なんかひらめいた顔してるな。ビックリだろ。実はキャッチーな曲の理由って、覚えやすい仕組みがあったんだ。モチーフの繰り返し。それをリスナーに気付かれない形でどれだけ上手に盛り込んでるか。たったそれだけのことで、キャッチーってのはできる。センスでそれにたどり着く人もいるけど、そうじゃないなら必要なのはロジックだ。実際、やってること自体は別に変わらない。トトロなんてわかりやすいサンプルだよな。サビの『トットロ！　トットーロ！』なんて4回も同じモチーフで歌詞までトトロで同じ。そりゃ1回聴いただけで覚えちゃうよ」

CamScannerでスキャン

「な……なるほど……ほんとだ」

ホントだ。考えれば考えるほど、その通りだと思う。同じことといっぱいやってたんだ……。

「なんか、流れで次々に違うことが起こってるのがメロディだと思ってたかも……」

「不思議なもんだろ。かなり近いことをやってるのに、同じことの繰り返しには感じない」

「うん。そこ。それって何でなの？　私がやったらたぶん、ホントにただの繰り返しになっちゃうのに……」

「その秘訣はね、ベースだ」

珠ちゃんは、待ってましたとばかりに喋る。

「ここで思い出してほしいのが、3日目に話した主人公と敵役の関係性の話だ。メロディとベース。たとえばね、メロディ（いろは）が『サンタって良いよね』って言ってて、ベース（あたし）が『サンタなんていないよ』って言ってるとする。でも、次のフレーズではいろはがさっきと同じように『でもサンタって良くない？』って言ってるのに対して、ベースは『あたしもそういうの信じられたらな』って言ってる。3回目は、4回目は、って感じで、メロディは変化してなくても状況が変化してるんだ。それによって、メロディが同じことを繰り返していたとしても、それはただの繰り返しってことにはならない。

物語はちゃんと進行してるんだ。ただの繰り返しになってしまってるって時は、同じことを主人公と敵役が繰り返してしまってる時。ふたりとも同じことをやっちゃうと、本当にただの冗長、無駄な繰り返しになってしまう。これが、『同じメロディの繰り返しなのに繰り返しっぽく聴こえない』のメカニズムだよ」

「……なるほどなぁ」

本当に、一個一個に理由があるんだなぁ。

「さてと、理屈より実践だ。そのことを踏まえて、もう一度いろはのAメロを聴いてみよう。と、なると、ちょっとこのAメロはとりとめがないっていうか、どこに落ち着きたいのかよくわかんない感じだよな」

「そうだね。繰り返してないし」

「必ずしも繰り返したら正解ってわけでもないけど、良いと思うならそれで行くのもいい。正しさは常に、さっきのメモに起因する。作りながら何度も思い出すんだ。何を大事にすれば、最初に作りたいと思った〝あの感じ〟にたどり着くのか」

「……」

……私は、もう一度Aメロを考えてみる。今度は、ちょっと繰り返しのフレーズとかも入れてみたりして。ちょっと一部を変えてみたりとか。うん、たとえばこんな感じな

CamScannerでスキャン

のかも。

「お、いいね。そうそう、たとえばそんな感じだ」

「うん。いいかも」

「集中を切らすなよいろは。メロディは一気に作ってしまわなきゃダメだ。この流れでBメロも考えよう」

「うん。Bメロはたしか……『サンタになってプレゼントを届ける計画をする私』だよね」

「そうだったな。とりあえずAメロと繋がってるかどうかは考えなくていい。そのニュアンスをちゃんと出せてるBメロを考えるんだ。ここでやることは、ビックリさせてやるぞっていうワクワク感と、夜の街にサンタの格好で出て行こうとするいろはだ。トナカイのソリとかはないだろうけど、でもこれは空想だからね、トナカイにもソリにも乗っちゃっていいかもしれない。そしたら、空から見た夜の街のキレイな景色だってある。そういうロマンチックな景色に一気に駆け上がっていくのが、Bメロだ」

「うん。なんかワクワクしてきた！」

「そうだ。その感じだ。いいぞ。この場合はちょっと低めの音から始まってググッとサビに向かって上がっていった方がいいかもね。そうすると、空に体が持ち上がっていく感じになる」

「なるほど……！」
「メロディっていうのは、主人公の気分を投影してるものでもある。歌って、つまりそうなんだ。だから、上に上がってほしい時にはグイッと連れていく感じにする。これも、わざわざ言葉にしてみるのも変だけど、大事なことだ。おっと、使うのはGのキーの音だけだぞ。その中の音なら何を使ってもオーケーだ」
「うん、たとえばこんな感じかな……」
そして私は、いくつか作っては消し、作っては消しということを繰り返して、納得のいくBメロを見つける。
「うん。つまりこういうことだ。いいね。Aメロのそれほど高くないテンションから、少しだけ落とすBメロ頭、そしてグググーッとサビに向かって上がっていく感じ。そしてサビ！」
「うん！　悪くないと思う！」
「ああ。ガイドラインを話しながらとはいえ、なかなかのメロディだ」
「あ、ちょっと待って珠ちゃん、サビ、もっとよくできる気がしてきた」
「どうぞどうぞ。いいぞ、そういう欲が出てきたらもっといい」
「サビも、さっきの何だっけ、モチーフ？　繰り返しのやつって使えるんだよね」

CamScannerでスキャン

「もちろんだ。モチーフは曲のありとあらゆるところで効果を発揮する」

「だったらこの方がいいかも。ほら、サビの後半のところ、前半のフレーズをちょっと変えた感じにしてみたんだ」

「うん、いいね。実にいい。ほかにも修正したい部分はないか？」

「あとね、あと……」

そんなことを繰り返しながら、私はメロディを細かく直していく。珠ちゃんに言われて守ったルールはたったひとつ、『Gのキーで使っていい音だけ』。でも実際、それだけで曲はかなりそれっぽい感じになった。

――20時　夕食、ディナータイム

「さてと、夕食はなんと、ピザだ」

「やばいね。ピザ超ヤバいね」

「うん。ピザはヤバい」
「っていうか、台所使うの悪いしちょうどいいね」
「いやぁ、うちの親とかはみんなで食べようって言ってたんだけど、あたしが拒否したんだ」
「え？　どうして？」
「親ってのはあれだよ。余計なこといろいろ喋りまくるアンチデリカシーな部分があるからな。安易に接近させない方がいい」
「へー。でも珠ちゃん、親に話されたら恥ずかしいようなことって何かあるの？」
「うちに限らず、親ってのは子供のありとあらゆる秘密を握っているんだよ。たとえば、あたしだって昔やりたいことがなくてかなりとっ散らかってたとか、そのへんのエピソードを余すことなく全部知ってるし、しかも人に話す時は大体尾ひれ背びれ胸びれがついてもう、結構面倒っちいことになるんだ」
「あー……その感じはちょっとわかるかも」
「それで子供が焦ってるのをみて楽しんでるんだよ。まったくタチの悪い遊びだ」
「へぇー。なんか良かった～」
「え？　何が？」
「珠ちゃんにもちょっと子供っぽいとこあるんだね」

「え？　何で？」
「いや、そこで珠ちゃんならもしかしたら、そういうのも受け入れて普通に対処できてたりするのかなと思ったから」
「そんなことないよ。あたしはこれでも華の女子高生だ。普通に学校に通うし普通に勉強もするし普通に恋愛とかなんかそういうのとかもするぞ」
「珠ちゃん、恋愛とかしたことあるの？」
「おーーっとそこまでだいろは！　そうはさせるか！　おいおい、いよいよ夜になってきたから修学旅行ムードだな？　そうはさせないぞ。あたしの口は堅いんだ。そんな香ばしい話はしないったらしないぞ！」
「え～♪　気になるなぁ。珠ちゃんってどういうタイプの人が好きなの？」
「やめろって言ってるだろ！　それ以上追求したら、あたしの洞察力を全力発揮していろはの好きな人を言い当てるぞ！」
「うわっ！　それ反則だよ珠ちゃん！」
「ふふ、あたしには仕事で培ったこのあり得ない洞察力があるんだ。普通の女子高生だと思ってもらっちゃ困るね。あたしはほかでもない、現役にしてすでにプロの天才作曲女子高生なのだよ」

「……それ、改めて本当にすごいね」
「ん？　あはは。だろ？　あたしなりにいろいろ頑張ったけどね」
「いや、頑張ったとかそういう次元じゃないよ。珠ちゃんと話してると、なんか私って何もしてこなかったんだなぁとか思うし……でも、なんか私も、自分のこととか、わかるようになってきた気がする」
「あたしの言ってることを全部は真に受けるなよ、いろは」
「えっ」

珠ちゃんは、ふいにちょっと真面目なトーンで話す。
「あたしの言ってることはね、あたしにしか意味がなかったりするんだ。あたしにとってあたしの言葉は全部真に迫るものだけど、実はこれはいろはにとってもそうというわけではない。たとえばあたしの言ってることが的を射てると思ったとしても、いろはにとってそれは迫真のものではないんだ。何でだと思う？」
「え……全然わかんないけど……何で？　珠ちゃん、良いこと言ってると思うんだけど」
「それはね、『体験』の有無なんだ。あたしは全部のことを体験してきて、ひしひしと思い知ってきたから、今までみたいなことを頭の中でまとめてきたし、いろはにも言って

CamScannerでスキャン

きた。けど、体験がない人にとってそれは単なる『よくできた理屈』であって、自分で使える哲学ではないんだ」

「……言ってることは、ちょっとわかるかも」

「良いことを書いてる本は、それこそ世界中に山ほどある。あたしの言葉なんかものの数に入らないくらい、そういう言葉はたくさんあるし、クリエイターはみんな、自分の発見したとっておきのことを作品にまとめてる。本当に、数えきれないほどそれはあるけど、でも、ただ読んだだけで大体の人は終わるんだ。それ以上別に何かするわけじゃない。あたしは、いろはに作曲を教えるかぎりは、そこで止まる人になってほしくないんだ。それ以上のもう一歩に踏み込めたらいいなって思ってる」

「……それってどういう……」

「『自分で考えて、作る』。これをいろはに伝え切るのが、あたしの目標だ。あたしのことをすごいとか、あたしみたいになりたいとか、そういうことは一切思ってくれなくていい。ただひとつ目指しているのは、いろはが自発的に、このレッスンを終えたあと、本当に自分で曲を作れるようになるかどうか。この部分だけが、あたしの挑戦なんだ」

「うん。珠ちゃんのことはやっぱりすごいって思うけど、自分で考えて、作れるようになりたいな」

「だから、関心したり、知ったりすることくらいで満足しないでくれよ。『知ってる』とか『わかる』なんて、別に大したことじゃないんだ。『できる』からこそ、あたしたちはクリエイターなんだ」
「うん」
「……たとえばいつかさ、いろはが自分でドンドン曲を書くようになって、あたしが言ってるようなことを自分の言葉でドンドン見つけていって、あたしをビックリさせるような仲間になったら、それは本当に、最高だよな」
「うん。それは難しい気がするけど……」
「簡単だよ。あたしくらいダメなやつでもできたんだ。よく覚えといてくれよ。あたしはもともと、ダメなやつなんだ」

——22時　ベースタイム

「よし、いい時間になってきたな」

CamScannerでスキャン

「夜10時……だね」
なんか、泊まりがけって感じになってきた。ちょっとワクワクしてきてる。
「お風呂は？」
「ん？　風呂？　入りたい？」
「え、入らないの？」
「ああ、風呂ね。うん。風呂かぁ……冬だしいいんじゃゃ……」
「……珠ちゃん、そのへんはちゃんとしようよ……女の子なんだし」
「えー……。風呂なぁ……だって髪の毛乾かすのとか面倒くさいじゃん」
「それは宿命だよ。それに私、パジャマ持ってきてるんだ♪」
「おやおや、すっかり修学旅行モードだな！　よおし、そこまで言うんだったら乗った！
うん、せっかくならうんとお泊まりっぽくした方がいいな！　いろはの情熱に乗せられてみることにしよう！」
「うん♪」
「しかし風呂はもう少しあとだ。まずは曲の続きをやろう」
「えー」
まぁ……そうだよね。今日の目的は曲を作ることだもんね。

「さてさて、どこまで行ったかというとだ、メロディがついに完成したんだよな？」

「うん！　良いメロディになったと思う！」

そう、さっきかなり時間をかけて作った私のメロディ。それなりにオリジナリティはあると思うし、個人的にはよくできた気がしてる。

「さてと、じゃあさっそくこれを再生してみよう」

「うん♪」

そして再生される私のメロディ。……ん、あれ、あれ？　このメロディって……。

「珠ちゃん、これって、私の作ったやつ？」

「そうだよ」

……この感覚は……なんか身に覚えがある……そうだ、これ、自分で作曲してみた一昨日のアレと同じだ。さっきまで名曲だと思ってたのに、全然良い曲じゃないように感じる例のやつ……またあの感じ……。

「珠ちゃん……あの……このメロディなんだけど……」

「ん、どうした？」

「あんまり良くないような……」

「そうか？　良いと思うぞ？」

「え……でも……」

どうしよう、なんて言えばいいのかな。

「どうやらまた同じことに引っかかってるようだないろは。さては『こんな曲じゃなかった』って思ってるだろ」

「え、うん」

「その現象の具体的な理由を教えよう。それはな、『脳内補完』によるものだ」

「脳内補完？」

「これは作曲する際に必ず発生する問題だ。ものすごくポピュラーな現象だから概念としてよく覚えておいた方がいい。何かっていうとね、いろはの頭の中で〝勝手に鳴ってた伴奏〟が、さっきまではあったんだよ」

「勝手に鳴ってた伴奏？」

「そうだ。しかもいろはの脳内だけでね。あたしにはそれは聴こえてない。だからあたしにとっては、この曲はさっきと変わらず同じままだ」

「ちょっと待って、私の脳内で伴奏が鳴ってたの？」

「鳴ってた。そして、ピザを食べてる間にそれは忘却（ぼうきゃく）されてしまったんだ。その幻の伴奏を失ってしまったからこそこのメロディは、いろはの脳内では少し違ったものに聴こ

CamScannerでスキャン

えるようになった」

「……そうかも」

考えてみれば、そうかもしれない。ベースをつけた時点で曲のイメージが『これじゃない』ってなった理由も、"これじゃない正解"があったからなのかも。

「えっと、つまり、忘れないうちにベースとかハーモニーも作っておけば良かったっていうことなのかな……？」

「いいや、実はそうじゃない。それができるのは、上級者だけだ」

「え？」

そして珠ちゃんは、無地のコピー用紙を1枚私に渡す。

「いろは、突然だけど、ここにできるだけリアルなパンダの絵を描いてくれ」

「え、パンダ？　ホントに突然だね……」

……何でパンダ？

「その前にまず考えるんだ。パンダの姿。想像できるだろ？」

「うん。想像できる」

「だったら描けるよな？」

「え？　えーっと……たぶん」

「よし、描いてくれ。パンダだぞ」
珠ちゃんが変なこと言うのはいつものことだし、とりあえずやってみよう。パンダ……パンダ……パンダってどんな感じだっけ。あれ？　さっきまで頭の中にあったっていうか、今もあるのに……あれ？　えーっと……あれれ？？　パンダでしょ？　耳ってどんな感じだっけ。あと、目とか。輪郭とか……アゴとか。鼻とか……。白黒ってどういうバランスだったっけ？　笹食べてる？　そうそう、あーでも、え、やばい、全然似てない。ビックリするくらい似てない。コレジャナイ……。
「できたか？」
「……できたけど……ごめん、コレジャナイパンダ……」
「アッハハッハッハッハー！　これはひどい！」
「もう！　わかってるんだから笑わないでよ！」
「アハハハー！　ヒーッ！　あーおっかし……まぁ、うん、こうなるって知ってた。知ってたけどあえてこれをしなきゃいけなかったんだ」
「これがどうしたの？」
笑いすぎた呼吸を整えて、珠ちゃんは続ける。
「……頭の中にさ、明確にパンダはイメージできてただろ？　それなのに、紙に描くと

CamScannerでスキャン

なるとまったくと言っていいほど描けない。不思議だと思わないか？」
「うん。何でなんだろうね」
「それは、実像ではなくイメージで捉えてるからだ。これはなにも、絵に限った話じゃない。音楽だってそうだ。頭の中で鳴ってる理想的なベースやハーモニーは、つまりちゃんとしたパンダだ。けど、これをそのまま出そうとしてもどういうわけか、コレジャナイパンダにしかならない」
「……うん。あ」
「そう。いろはが自主的に曲を作ろうとした時に作ったあのベース。それこそが、今いろはが描いたコレジャナイパンダと同じ理由で生まれたベースなんだ」
「な……なるほど！」
あのベースが、このパンダと同じ……コレジャナイベース！
「そう、その、なんか違うやつ。コレジャナイやつ。初心者のうちはほとんど絶対こうなってしまう。だから、初心者は初心者のやり方でこの問題を突破しなきゃいけない」
「っていうと……」
「ちゃんとしたパンダを描くなら、どうすればいい？」
「えっと……パンダの写真を見ながら描く……？」

「その通りだ。何となくではなく、ちゃんと真似をする。それが、いつか上級者になった時にほとんど何も見ず描けるようになるために、一番大事な訓練だ」

……私は、うっかり描いてしまったおかしなパンダを見つめる。なるほど。イメージだけでやると、こうなる。間違いない。こうなっちゃうよね。

「そしてだ。今回の曲については、仕上げるためにあの技を使う」

「あの技？」

「昨日教えた、あの裏技だよ」

「……テクスチャーだね！」

「そう。テクスチャー。それってどういう技だったか言えるか？」

「たしか……別の曲のメロディと別の曲のベースをくっつける……みたいな」

えっと……どんなだっけ……。

「そう、それがテクスチャーだ。今回のベースラインはそれで作る。メロディは、さっきいろはが作ったオリジナルメロディだ」

「うん」

「もともとのコンセプト的には、本来はここでベースのキャラクターあるところのあたしザ・現実主義者のライバルらしいベースを描くべきなんだけど、これについては初心

CamScannerでスキャン

者には無理だから、テクスチャーを使う。つまり、"ある完成された珠ちゃんベース"を他所(よそ)から引っ張ってくる感じだ。一番理想的なものにはならないかもしれないけど、とにかく1曲仕上げるってのが今回のテーマだからね。ここについては、まずはこれで突破する。いつか自分で全部できるようになったら、この部分も自分で好きに作ればいい」
「うん、わかった」
「さて、ベース次第で曲の雰囲気はかなり決まる。っていうのはもうさんざんダメなベースを作ったりして知ったと思うけど」
「う……うん」
「じゃあ、今回の曲はどういう雰囲気にしたい？」
「えーっと……そうだなぁ……」
この曲のイメージ……優しくてワクワクして、ちょっと元気になるみたいな……。
「あの、またこれかって感じなんだけど」
「ん、何の曲だ？」
「《となりのトトロ》のベースをテクスチャーにするのじゃ、ダメかな」
「うん、良いチョイスだ。むしろベストだと思うよ」
「ホント？」

「あの曲は複雑じゃないしね。初めてのオリジナルメロディに対してつけるベースとしてはバッチリな選択だ」
「うん！　じゃあえっと……どうすればいいんだっけ……」
「まずは《となりのトトロ》のベースを耳コピする」
「あそっか……そうだったね」
そして私は、耳コピを始める。大好きな《となりのトトロ》のベース。聴いてみたら……あれ？　意外とシンプル？
「珠ちゃん、結構これってシンプル？」
「そうだな。かなりシンプルだ」
「だよね」
良かった。これならそんなに耳コピも大変じゃない。っていうか私の耳、ベース聴こえるようになってるなぁ。２週間前は絶対こんなのわかんなかったのに。
それから30分くらいかけて、私は《となりのトトロ》のベースを耳コピした。
「うん。大きな間違いもないな」
「だいぶ慣れてきたかも」
「さてと、ちなみに《となりのトトロ》のキーはF、いろはが作ったメロディのキーはG。

このふたつをただくっつけるだけじゃ気持ち悪い曲になる。……ってことは、どうすればいいんだっけ」
「トトロのベースを、私のメロディのキーに合わせる、だよね」
「そうだ。トトロのベースを丸ごとひとつ高くすると、Gになる。これで、トトロのベースはいろはのメロディにマッチするベースになった。これを合わせて……聴いてみるぞ」
「うん……」
そして、流れる私のメロディと、ベース。
「……ねぇ珠ちゃん」
「おう」
「これ、曲だね」
「おう、曲だな」
「これ、私の曲って言っていいのかな」
「そうだな、ようやく曲って感じになってきた」
「ヤバいね！　これ曲だ！　うわぁ！　これ曲だよ！　ねぇ珠ちゃん！　これ、これ！」
「あっはははは！　そうだな、これ曲だな！」
ビックリした。私のメロディは、トトロのベースに合成した途端、あの雰囲気を持っ

てる、けど私の曲になっていた。なんだか懐かしくて、優しいあの雰囲気……。
「でもよく聴いてみろいろは。この曲、やっぱりトトロのベースだからってのもあって、ちょっとだけ不自然だろ?」
「うん。ちょっとだけど、そういうとこあるね」
「さ、これを自分で、良いと思う形にいじるんだ」
「え? 大丈夫なの?」
「もともと出来の良いベースではあるけど、いろはのメロディのために作られたものじゃあない。だから、多少の調整はもちろん必要だ。それに、そうじゃないといろはも納得がいかないだろ?」
「そうだね。うん。もっと私の曲にしたい」
珠ちゃんが指摘した部分は、たしかに私も気になった部分だった。そして、たぶんこうかなって感じにベースの一部を変えてみる。
「こうかな……?」
「気に入るまで悩めばいい。その曲の答えを知ってるのは、いろはだけだ」
「そっか……うん。悩んでみる」
私は、自分のメロディと、トトロから借りたベースを縫い合わせていく。少しずつ、

私のメロディに馴染んでくるベース。少しいじると、もうそのベースはトトロのベースではなく、私の曲のベースになっていた。
「……珠ちゃん」
「何だ」
「……やばいね。テクスチャー……」
「ヤバいだろ」
「これヤバいよ。どうしよう、私の曲、ほんとに私の曲って感じになってきた……」
「だろ。これが『体感』だ。テクスチャーの話も、たぶん昨日の話だけじゃよくわからなかったと思う。けど、こうやって実際に体験することで、そのすごさを知る。テクスチャーさえ使えば、かなりいろんな音楽の雰囲気を借りてこれるってのが、何となくわかったかな」
「うん。っていうか、これさえあれば何でもできるんじゃや……」
「そうだ。その通り。あたしが初めてテクスチャーを知った時も、同じような気分だった。世界中の音楽をあたしは作れるんじゃないかとか、それくらいのことを思ったよ」
「うん、わかる。その感じすごいわかる。だって……だって珠ちゃん！　私、音楽のこと全然わかってないのに、曲が……！」

「おーどうどう、落ち着けいろは。まだ曲が完成したわけじゃない。ここからがおもしろいところだ」
「う、うん……」
「さぁ、いよいよだな。もう一息。今日は、曲が完成するまでだ」

CamScannerでスキャン

14日目

作曲合宿の話・後編

CamScannerでスキャン

「メロディとベースが固まったことで、かなり曲らしくなってきたな。うん。実際良い感じだと思うぞ」

「うん。私この曲好き」

なんか、今までのいろんなことが一気に報われたような気分。こんなことってあるんだ。

「さてと、次にやることは、『ハーモニーをつける』だ」

「これもテクスチャーするの？」

「ふふ、これはな……テクスチャーは使わない」

「え、そうなの？」

「使う方法もあるっちゃあるけど、今回はやめておこう。それは中級者の技だからね。もう少し曲作りに慣れて、音楽の仕組みが感覚としてもっとわかってからなら、ハーモニーのテクスチャーも扱えるようになるだろうけど、ベースのテクスチャーと比べてハーモニーのテクスチャーは絡んでる糸が多い。初心者が扱えるものじゃないからハーモニーについてはオリジナルでつけていく」

CamScannerでスキャン

「そうなんだ……でも、オリジナルで作ったらコレジャナイパンダになるんじゃ……」
「それがね、実はそうでもないいんだ」
そう言いながら、珠ちゃんはピアノ椅子に座る私の肩越しに、鍵盤を触る。
「ハーモニーについてはね、とにかく何でもいいってことなら、とりあえずつける方法があるんだよ。見てろ」
そして、珠ちゃんは私の曲を再生する。それと同時に、片手で何か適当なメロディを弾いていた。
「珠ちゃん、こういうの当たり前に弾けるよね」
「何言ってんだ。いろはも今すぐ、ただちにこれはできるんだぞ?」
「え、無理だよ。だって私ピアノ弾けないもん」
「……そう、ピアノやキーボードが弾けない。それでも、実は適当にメロディは弾ける。その話をしたのは覚えてるか?」
「……?」
したっけ?
「その話をしたのはたしか、キーの話をした時だ」
「したっけ……」

「忘れてるならもう一度だ。キーって概念を覚えた時に、もうひとつ大事な話をしていたんだよ。キーさえ合っていれば、『基本的には間違いの音ということにはならない』って話だ。演奏家になった気分！　って言ってたの、覚えてるか？」

「……！　してた！　してたね！　覚えてる！」

「さぁ、ってことはだ、今いろはは、Ｇのキーでこの曲を作っている。ベースも鳴っている。そして、ここに好きなメロディで適当に弾いたものでも、ドンドン追加していくことができる。たとえばこんな風に」

そして珠ちゃんは、実際に弾いてみせる。Ｇのキーの音だけを鳴らす、適当なメロディ。

「ほら、こんな感じだ、いろはもやってみればいい」

「うん」

私も、なんか適当にバラバラと音を鳴らしてみる。その音はどれも、別に何も考えてないのに、正解の音みたいな感じで鳴った。

「ホントだ……」

「12キーの復習を少しでもしておいたのが良かったな。指の運びもわりとスムーズだ。これでいろはは、自分の曲に好きなメロディをどんどん乗せられるってのがわかっただろ？」

CamScannerでスキャン

「うん。ホントだな。Gのキーの音なら合ってるように聞こえる……」
「そして、これは耳コピの時に教えたことだっけな、ハーモニーってのは、メロディとベースですでに2音、あとひとつかふたつあれば完成するんだ。ってことはだよいろは。適当にもう一本のメロディを弾いてやれば、その3つ目らしきものがある程度わかったりして、その曲のコードのとりあえずのものをつけてやることができる」
「え、え？」
「だからさ、メロディをもう一本、適当でいいからつけるんだよ。今パラパラっと弾いた感じのやつ」
「うん」
「その音と、メロディと、ベースと。この3つの音、かぶってる時もあるだろうけど、これで何となくハーモニーがわかる。そしたら、そのハーモニーを全部押さえてジャララーンって感じで鳴らしてやればいいんだ」
「……なるほど。でも、そんなに大雑把でいいの？」
「気持ち良く感じるやつを選べばいい。この正解は、作曲家の思う気持ち良さだ。それ以外のものは何も信じなくていい」
「……うん。わかった。やってみる」

「よし！　じゃあやってみてくれ。あたしはそうだな、風呂にでも入ってるよ」
「あ、うん。行ってらっしゃい」
そして珠ちゃんはお風呂に向かう。私は、珠ちゃんの言った通り、自分の曲に適当にパラパラとメロディを追加してみる。
「あ、やばいこれ。楽しい……」
Gのキーにあるドレミファソラシドだけしか使わないっていうルールを守るだけで、なんだか私はピアノ弾ける人みたいな感じになってる。あ、やばいやばい。何これ。
「私って、ピアノ弾けたっけ……？」
これ、永遠にこれで遊んでられる感じするんだけど。何なのこれ。すごい。っていうか、音楽ってこんなに単純っていうか、アバウトなの？　え？　もっと複雑じゃないの？
「う〜ん……」
珠ちゃんのレッスンは、普通経過するはずの理論とかをどれくらい飛び越してるんだろう。普通に考えて、今なんだかんだで曲っぽいものができてるこの状態、ちょっと不安になるくらいすごいんだけど……。でも……実際曲はできてきてるし……。
「た……楽しい……」
私は、Gのキーからはみ出さない音でメロディを追加していく。すると私の曲は、さ

CamScannerでスキャン

らに曲らしく、なんだか分厚く、もっともっとそれらしくなっていった。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「はぁーさっぱりしたー」
「あ、珠ちゃん」
「調子はどうだいろは？」
「やばい。楽しい」
私は、自分なりのメロディをもう一本追加して、それっぽい和音もなんか良さそうなのを追加していた。
「おお、いいねぇ。良い感じだ。分厚さが増して、グッと曲っぽくなったな」
「うん！」
「じゃあちょうどいいし風呂はいってこいよ。冷めると追い焚きしなきゃいけないし」
「あ、そうだね。うん。お風呂借りるね」
「ほいほい。ごゆっくり～」

そして私は、着替えを持ってお風呂に入る。珠ちゃんの家の人はもうみんな寝たみたいだから、できるだけ静かに。

「珠ちゃん家、お風呂おっきいな……」

うーん、快適な広さ。洗面所もきれいだったし。浴槽もバッチリ足が伸ばせて広々。

「ふんふんふふー、んんー♪」

私は、ついつい自分がさっきまで書いてた曲のメロディを口ずさむ。

「ふぅ～～。あー」

あ、なんか気の抜けた声が。お風呂最高。ああ。

私は、湯気で水滴がついているお風呂の天井を見上げながら、考えてる。さっき日付が変わって、ちょうど14日。2週間っていう時間で、私が知ったこと、できるようになったこと。その全部が、珠ちゃんのおかげだ。本当に、なんて言ったらいいんだろう。珠ちゃんに私が返せるものって、何かあるのかな。ダメになりそうな時はダメな自分を見せてくれて。みっともない私を笑い飛ばしてくれて。結局、今日までこうやって諦めずに教えてくれた。

……もうすぐ曲が完成するって、わかる。私は、もらってばっかりだ。

ガチャリ。

「あーいろは、バスタオルここ置いとくから」
「どわぁ⁉　珠ちゃん⁉」
「ん？」
「急に開けたらビックリするよ！」
「ああ、それもそうだな。ところで、夜食作ったから上がったら一緒に食べるぞっ！」
「え？　うん。ありがと……」
ああビックリした……。

——2時　リズムタイム

「あと一息だな」
「うん」
私は、出来上がりつつある私の曲を再生する。オリジナルのメロディ、トトロから借

CamScannerでスキャン

りた、でも今は私のベースになったベース、そして追加したもう一本のメロディと、何となくのジャラララーンっていう伴奏ハーモニー。ほとんどこれはもう、曲だった。

「だいぶ仕上がったな。でもいろは、ここからさらにもう一段階、劇的な変化がある」

「そうなの？　これでもかなり曲っぽいんだけど」

「それがな、お待ちかね、一番楽しい時間、〝リズムタイム〟だ」

「リズムタイム？」

「ドラムを追加するんだよ」

「……！」

ドラム！　そうか、何か足りないと思ってたけど、ドラムだ！

「ほんとだ！　大事なの抜けてたね！」

「ドラムってやつは、音程がないからメロディやハーモニーに影響を与えない。だからまぁ、最後にしとこうかなって感じだったんだけど、人によってはドラムから作るって人もいるくらい、曲の雰囲気を劇的に左右するものだったりする」

「そうなの？」

「リズム……この場合はドラムってさ、ノリを決めるんだよ」

CamScannerでスキャン

「ノリ?」
「うん。ノリ。そういう意味ではドラムは一番テクスチャー要素の高いものかもしれない。これを聴いてみてくれ」
そう言って珠ちゃんは音楽ソフトで何かをして、ドラムの音を……うわっ！
「た、たた、珠ちゃん！」
「ん、どうした」
「私の曲が！　わ、私の曲が！」
「おう！　どうした！」
「曲になった！」
「曲になったな！　そう、ドラムを足すと一気に曲っぽくなるんだ！」
「うおおおおおおお！　すごい！　すごいよこれ！　曲だ！」
「これは完璧に曲だな！　うん！　ついに曲になってしまった！」
え、っていうか何なの？　いま珠ちゃん何したの？　一瞬でドラムの音入ったんだけど……?
「珠ちゃん、今のドラムって……?」
「ああ、これはね、パターンの音をとりあえずつけてみただけだ」

「パターン？」
「ほとんどの音楽ソフトに搭載しててね、ドラムのバリエーションをそのまま貼るって機能があるんだよ。ロックにジャズに、サンバにボッサ、ラテン、ほかにも、ほとんどのジャンルを網羅してる。試しにこれにしてみよう」
そう言って珠ちゃんは、ほかのドラムを鳴らしてみる。ジャズのドラムにしてみたら、なんかオシャレな雰囲気になった。
「ほんとだ……結構違うね」
「ハードロックだとこんな感じだ。……ほら、なんかメロディとかも激しいような雰囲気になるだろ？」
「ほんとだ……ドラムひとつでこんなに変わるんだ……」
「ドラムは、ノリを決めるパートだ。世界観を決める係。大人しいシックな雰囲気にもできるし、激しくもできるし、かわいくもできるし、元気にもできる。そして今回の曲は、かわいくて元気な雰囲気だな。ってことは……」
そう言いながら、珠ちゃんはドラムの音を選ぶ。
「珠ちゃん、ドラムの音っていっぱい鳴ってるけど、それはひとつずつ打ち込まなくていいの？」

「慣れたらそれが一番だ。けどいろはは、まだ慣れてないしね。こういう、まずは出来合いの『誰かが作った見本』を改造しながら使えばいい。仕組みが感覚でわかったら、その時はゼロから打ち込んだ方がいいかもね。これもコレジャナイパンダと同じ話だよ。まずは見本をよく見て、そして中級者になったら自分なりにやればいい」

「うん。そうだね」

「ちなみに、パターンで選ぶとしてもドラムの機微ってのはもちろんある。サビの前に激しい動きをしたりとか、Aメロでは普通にやるとか、Bメロではすっと大人しくして後半でだーってやるとか。そういう、曲の潮の流れの緩急みたいなのもドラムが大きく関わってくる。さぁ、これについてはかなり感覚的なとこだけど、まぁこんだけたくさんのパターンがあるしまずは好きなのを組み合わせればいい」

「うん。やってみる」

ドラムはたしかに、どれを合わせても間違ってるっていう感じではないみたい。メロディがないもんね。そりゃそうだけど……でも、たしかに、この雰囲気だなってバチッとくるのとそうじゃないのも何となくあるのがわかる。

「これ、超楽しいね」

「おう、納得のいくドラムをつければいい。しっかり悩んで、構成に沿うバッチリなド

CamScannerでスキャン

ラムをつけてやれ」

──5時　完成

窓の外で、チュンチュンと鳴き声が聞こえる。まだ日の出ていない明け方。私は、メロディにベース、そしてハーモニー、リズム、それぞれを何度も細かく聴き直して、そして、少しずつ修正して、まとめていく。一睡もしていないのに、眠気はまったくなかった。

「ねぇ珠ちゃん」

「何だいろは」

「これで完成、なんだよね」

「……いいや、まだひとつだけ、大事なものを忘れてる」

「あれ、まだあるの……？」

「それはな、タイトルだよ」

「タイトル……？　あ、そうだね」

CamScannerでスキャン

「そうだ、名前だ。曲名をつけてやれ。ついでに日付もな。この曲のことをいろはは、たぶん一生忘れない」

「うん、そうだね。……曲名かぁ……えっと……じゃあ……」

私は、頭に浮かんだ言葉をそのまま口にする。

「『二人のプレゼント』……とかどうかな……？」

「『二人のプレゼント』か。やるね、良いネーミングセンスだ。あたしは好きだぞそれ」

「うん！」

「さぁ、もう一回再生してみよう。いろはが作った曲『二人のプレゼント』だ」

流れるメロディ、重なる音。合計で何回聴いたっけ、それはもうわかんないけど、何回も何回も聴いたメロディ、ベース、ハーモニー、そしてリズムが、今ひとつのかたちになった。

プロが作った曲とはもちろん比べ物にならないけど、たしかに曲と言える曲が、鳴っている。私が作った曲。生まれて初めて私が完成させた、私の、私だけの曲……。

「ねえ珠ちゃん」

「なんだ？」

「作曲って、こんなにドキドキするんだね」

「そうだ。作曲って、こんなにドキドキするんだ」
「私、もっと上手に作れるようになりたいな」
「ああ。あたしもだ」

――8時

朝日が昇って朝8時。作曲合宿が終わると同時に、珠ちゃんの作曲レッスンはすべて修了した。珠ちゃんと私は、珠ちゃん家の玄関の前で立ち話をしている。
「しかし本当に1曲仕上がるとは、正直ビックリだ」
「うん。私も自分で今信じられないよ」
「しかも、なんかグッとくる感じの仕上がりだったしな」
「それはたぶんベースをテクスチャーで借りてきたからじゃないかな。あのムードは《となりのトトロ》のおかげだと思う」
「お、わかってるね。その通りだ」

CamScannerでスキャン

雪に反射する朝日が、私たちの頬を照らす。私は、少し真面目に、珠ちゃんに言う。
「珠ちゃん、私ね、私……珠ちゃんの話し相手にはまだまだ全然足りないけど、珠ちゃんにちょっとでも追い付けるように作曲もっと頑張ってみるから、その……またわからないことがあったら、また来ていいかな」
「……」
珠ちゃんは、キョトンとした顔をしたあと、今までで一番優しい笑顔になった。
「もう十分だよ。頑張ることなんてない。あたしからはもう習わなくていいし、あたしも、いろはの先生にはなりたくない」
「ええ!?」
「あたしはいろはの先生じゃなくて、友達になりたいんだ。だから、もう教えないよ」
「……うん。そうだね」
「いつでも遊びに来てくれ。今度はレッスンじゃなくて、友達として」
「うん」
「そうだ、最後に……一番覚えておいてほしいことをひとつ、聞いてもらえるかな」
「うん……？」

珠ちゃんは、まるで卒業生に贈る言葉みたいに、優しい声で言う。

「『教わるより、編み出したと』そう思えるからこそ、あたしたちはクリエイターだ。あたしは、作曲を人に教えるなんてことはハッキリ言って不可能だと思ってる。作曲を学びたい大勢の人は、本屋に行ったりレッスンに通ったりして、あれこれ頑張って〝習おうとする〟。けど、実はその思考自体が間違ってるんだ。作曲だけじゃない、ありとあらゆる創作は、教わるより、編み出すことに喜びを感じるからこそだったりする。教わりに来てる人にこれを言ったらもうそこで終わりなんだけどさ。ひとしきりの技術的なことや知識的なことを教えたあとだからこそ、この言葉を最後に覚えておいてほしいんだ。これから先、曲を作っていく上できっといろはいろんな悩みにぶつかると思う。そのたびに迷うだろうし、おかしなやり方を覚えたりもすると思う。でも、それでいいんだ。その曲がりくねった寄り道や脱線も含めて、いろはの作るものの大事なエッセンスになっていく。あたしから教わったことは全部疑え。自分で見つけたこと、編み出したもの、体験した感動だけを信じるんだ。この世に、それ以上に確かなものはない。あたしが今言ったこの言葉も疑え。自分でその意味を体感するまでは、あたしの言葉は全部ただの御託だ。これが、あたしからいろはに言っておきたい、一番最後のレッスンだよ」

「……うん。よく覚えておくね。本当に、何から何までありがとう珠ちゃん」
「礼には及ばないよ。あたしがやりたくてやったんだ」
「うん」
「初作曲、完成おめでとう。いろは」

高校2年の冬休み。それは、私にとっては忘れられない2週間になった。

日差しに照らされた路肩の雪がやけに眩しく、私と珠ちゃんを照り返す。もうレッスンは終わってるのに、私はどうしても家に帰りたくなくて、ずっと、ずっと、珠ちゃんと話し続けていた。

レッスンはここまで。

○エピローグ

翌日の1月7日。冬休みが終わり、新しい日常が始まる。新学期だ。

「たーまちゃん！　おはよう！」

「おお、おはよ……？」

私は、朝8時15分に珠ちゃんの家にやって来た。

「い、いろは？　何？」

「何って、決まってるじゃない。学校行こ！」

「え、お、おお……」

珠ちゃんは、ちょっとビックリしてた。たしかに、来るって言ってなかったもんね。けど、今日からは珠ちゃんと一緒に学校に行きたかった私は、当たり前のようにまたこの家にやって来た。制服で並んで歩くのは、終業式のあの日以来。でも、あの日みたいなギクシャクした感じなんて思い出せないくらい、私たちは打ち解けていた。

CamScannerでスキャン

歩道橋をくぐって、坂を上がって。吹き抜ける風はまだ少し冷たいけど、柔らかい日差しは暖かかった。

「……友達と学校行くの、生まれて初めてだ……」

「え!?　そうなの!?」

「うん。中学1年の時はなんかそういうのなかったし、中2くらいから浮くようになったし……それからはずっとあたし、こういう感じだし……」

珠ちゃんの首には、あのゴツいヘッドホンがかけてある。あの「誰もあたしに話しかけるな」って言ってるような、意思表示のヘッドホン。

「あっ！　おい！　何だよ！　返せよ！」

私は珠ちゃんの隙をついて、そのヘッドホンを抜き取った。

「えー？　珠ちゃん、これ人を寄せ付けないためにつけてるんでしょ？　いらないと思うんだけど」

「いや、別にそういうわけじゃ……」

「だったら貸して、このヘッドホン♪」

「……別にいいけど」
「あ、珠ちゃん、ほらほら、あそこにいる3人、クラスの子たちだよ。みんなで一緒に行こっか」
「いや、いい！　いい、いいって！　やめろよいろは！」
らしくないくらい動揺する珠ちゃん、その様子を見て私は、ちょっと尋ねるように言う。
「珠ちゃん、私とも仲良くなれたんだし、きっとみんなとも普通に話せると思うよ？」
「いや……でも……」
「……」
「……いろはとはなんていうか、じっくり話したからなんか通じる気がするけど、ほかの子たちはたぶん無理だよ……またなんか、変な空気になるだろうし……」
「……」
「…………」
「……珠ちゃんって、変な子だね」
「ん……それは……何となく自覚してるよ」
「そうじゃなくて。あんなに頭良くて、私の気持ちもわかってるのに、何でクラスの子に声かけるくらいのことができないのかなぁって」

CamScannerでスキャン

「……向き不向きがあるんだよ」
「そうかなぁ……？」
「別にいいんだよ。いろはが喋り相手になるんだったら、それでいいだろ」
「でもそれじゃ、寂しくない？」
「別に寂しくないよ。友達はいろはがいるんだし」
「……そっか」

友達。なんだか、いつも使ってる当たり前の言葉なのに、珠ちゃんが言うとものすごく価値のある言葉みたいに感じる。そっか、私、珠ちゃんと友達になれたんだね。

「……ねぇ珠ちゃん、やっぱりクラスの子たちとも仲良くしようよ！」
「は⁉　いいって言ってんじゃん！」
「だって、その方が珠ちゃんきっと楽しいよ♪」
「いいってば、あたしはそういうのいいんだって！」
「ほら、あの子たちと一緒に学校行こ♪」
私は、珠ちゃんの手をグイグイ引いてうながす。

「わかった！　わかったってば！　こ、声かけりゃいいんだろ」
「うん♪」
「……っ……じゃあえっと……どうしょ……なぁいろは……その……声のかけ方……教えてくれ……まずどうすればいいんだっけ……」
「え……？」
「──ン……」
「うん、いいよ！　そんなの簡単だよ……あっ……」
「……」
「……でも珠ちゃん、それは必要ないんじゃないかな」
「へ？　何が？」
私は、少し生意気に、いたずらっぽい気持ちで言う。
「『教わるんじゃなくて、編み出すのがクリエイターだ』でしょ、珠ちゃん♪」
「む……お前なぁ、まだよくわかってもないくせに……」
「うん。でも、珠ちゃんはわかってるんでしょ？　だったら、あとはやるだけじゃない♪」
「……む。むぐぐ……」
「あ、でも教えてあげよっかな～♪　簡単なのにな～♪」

CamScannerでスキャン

「だーっ！　わかったよ！　声のかけ方くらいわかるっての！」
「うん！　だよね♪　さすが珠ちゃん♪」
　珠ちゃんの言う通り、私はまだ珠ちゃんの言ったことの意味をちゃんとわかってるわけじゃないと思う。でも、少しだけわかりはじめてる、そんな気がしている。好きなものも、やりたいことも、人から教わるものじゃないよね。大切なのは、やってみたいっていう気持ちと――。

「ぁ……あの……さ……ぁ、あたしらとその……一緒に……行かにゃ……ない……か？」
　ほんのちょっとの、勇気なのかもしれない。

おしまい

刊行に寄せて

服部克久（作編曲家）

どうしたら鼻歌で自分のメロディを歌えることができて、ピアノやギターで自分だけの曲を奏でることができたらどんなに素晴らしいことだろう。思い立って本屋さんで作曲の本を買ってきたものの結局10ページも読んだところで挫折された方は多いと思います。

主人公の高校生いろはもそのひとりで、せっかく大金をはたいて購入した本が無駄になりそうなところから話は始まります。2週間で1曲を仕上げる過程を追っていくうちに、読者も、作曲理論の本を一切読まずに曲が作れてしまう疑似体験を味わうことになります。

譜面が書けなくても曲が作れるというのはよくある話で、大きな声では言えないが現役の有名作曲家にもいるらしいと、風の便りに聞いたことがあります。そもそもアレンジャーのところに回ってくる音資料のほとんどが、デモ音源とコードネームを書

CamScannerでスキャン

いた紙ペラ一枚なのです。それでヒットしてしまうのですから、理論書などＧｏｔｏ Ｈｅｌｌ！なのです。

旋律を作るとは心の中に思い描いた風景や、感情をいかに音楽言語に変換するかの作業だと思います。もちろん自分の好きな歌詞があれば、口に出して読む代わりに単語のイントネーションに合わせて音を上下させる。そうすれば原始的なメロディは出来上がります。あとはその人の好みや趣味で旋律の小直しをやっていけば、より完成されたものに近付いていくことになります。

大事なことは美しいものや不愉快なものを見たり経験するたびに、心の中にしまい込んでしまうのではなく、鼻歌でも良いからラララーと口に出してみる習慣をつけることだと思います。

僕は仕事をするときに、よくテレビをつけっぱなしで音だけ消していることがあります。無音のテレビなのに耳を澄ますと風のような音が聴こえたり、それが時にはいないはずのストリングスに聴こえたりしてきたらしめたものです。脳の中が音楽方向にどんどんなっていって、それはもしかしたら作曲家になる入り口にたどり着いているのかもしれません。

CamScannerでスキャン

音楽が頭の中に鳴るようになったら、あとはそれを譜面に書き起こしたりパソコンに打ち込んで、はい完成となります。書き起こしたり打ち込んだりするためには少し退屈なお勉強が必要となりますが、まあ、誰かに歌ってもらったり演奏してもらうためにチョコットは努力してみましょう。

しかし、もっとも大事なことは頭の中にいかに音を鳴らすことができるかなんです。本書の中にはそのためのヒントが詰まっています。

この本は、作曲にチャレンジしてみたいけど面倒くさいことや、頭の痛くなりそうなことはチョコット、と考えているあなたにピッタリの本です。読み物としてもおもしろいし、最後のお泊りレッスンから曲が完成するまではなかなかの圧巻です。

感情を音楽で表現できるようになって、映画音楽やインストものに挑戦したくなってきたら、買ってあった理論書の埃（ほこり）をはたいてみても良いかも。サルには曲は作れませんが、もしかしたらこの本を読破したあなたならできるかもしれませんよ。

もちろん、できなかったからといっても返金はいたしかねますのでご了承ください。

CamScannerでスキャン

あとがき

仰木日向(おうぎひなた)です。この本が生まれるきっかけになったのは、ヤマハミュージックメディアの書籍編集長Kさんの提案でした。高田馬場の打ち合わせ室にて、初めての打ち合わせの際にKさんは複数の音楽理論書をドサッと机の上に置き「きっと読んだことあるかと思いますが……」という言葉から始めました。続けてKさんが言ったのは「初心者向けと書いているけど、これだけやってもやはり初心者にはわかりにくいんです」ということでした。

音楽理論書というのは、間違ったことを言わないように、必要以上に難しそうに書かなきゃいけないという部分もあります。それに、音楽ができるようになってしまった側のプロの音楽家が初心者向けに本を書くというのは、実はかなり難しいことでもあります(もともと、音楽家は音楽のプロで、文章が得意というわけではありませんしね)。

そこにどうにか新しい切り口を提案することはできないか、という願いから、この本『作曲少女プロジェクト』は始まりました。どれだけリアルに初心者の心理に近付けるか、

CamScannerでスキャン

リアルな悩みに肉薄し、解決方法を提案できるか、そこだけに焦点を絞った、感情移入しやすい小説型の理論書というのが、この本のコンセプトでした。おおむね、そのコンセプト通りの本には仕上がったように思います。完璧かどうかはさておいて、今の自分にとってはこれが精一杯の仕上がりだと言えるくらいのものはできたような気がしていますが、実際、読んでみていかがでしたでしょうか。もし気に入っていただけたなら、実際に、1曲書いてみてもらえると、この本の一番の目的は達成です。または、もし曲自体が完成しなかったとしても、少しでも曲を書くヒントになったことがあったなら、それも嬉しく思います。

最後に、手短ながら謝辞をいくつか。面倒くさいうえにダラしない著者にもめげずに付き合ってくださったKさん、とびっきりかわいらしい素敵なイラストを描いてくださったたまつだひかりさん、ご多忙を極める中、原稿を読んでご意見とご感想をくださった服部克久先生、そして、お会いした方、お会いしていない方も含めて、この本の制作、出版、販売に関わってくださったお仕事仲間の皆さま、本当にありがとうございました。

この本が誰かにとって、小さなひらめきと、新しい冒険の手がかりになることを願いつつ。

また、いつかは読者が、これからも素敵な曲を作っていくことを楽しみにしています。

２０１０年６月

田木二郎

著者
仰木日向（おうぎ・ひなた）

音楽制作会社で作曲のノウハウを学び、その後フリーランスとして作曲を始め、本名名義でアニメ楽曲やゲームBGMを多数手がける。その後2014年からは自らの適正を文字に見出し、ペンネームを仰木日向と改め、サンリオ『SHOW BY ROCK!!』や『ガールフレンド（仮）』、『私立グリモワール魔法学園』、その他声優やアニメ作品の作詞を手がけつつ、ライトノベル『スーパーヒロイン学園』シリーズ（ぽにきゃんBOOKS）の小説執筆、ときおり作曲もしながら、ゲームや「アイドルProject『Re:ステージ！』」の音楽プロデュースなども行っている。また、DTMの4コマ漫画『できるかなってDTM』を執筆する同人作家でもある。

まんが・イラスト
まつだひかり

漫画家、イラストレーター。YouTubeに投稿したインディーズアニメ「女子高生エフェクターを買いに行く!!」シリーズが累計30万再生を超えるなど注目を集める異色の作家。自身のTwitterなどに投稿している漫画「楽器×女子高生」でも人気を博し、島村楽器とのコラボも果たす。著書に『スライディングV 女子高生バンドを始める!!』（KADOKAWA）がある。また、『ベース・マガジン』(リットーミュージック)で漫画「よんてい」を連載するほか、同社の『ギター・マガジン』では「ギタビギ！」の扉イラストと題字も担当した。

作曲少女 平凡な私が14日間で曲を作れるようになった話

2016年7月10日　初版発行
2016年8月10日　第２版発行

著　者　仰木日向
まんが・イラスト　まつだひかり

発行者　須田直治

発行所　株式会社ヤマハミュージックメディア
〒171-0033
東京都豊島区高田3-19-10
電話　03-6894-0250
インターネット・ホームページ　http://www.ymm.co.jp

デザイン　titanheads
編　集　片山 淳（株式会社ヤマハミュージックメディア）

印刷・製本　シナノ印刷株式会社

造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの
不良品がございましたらお取替えいたします。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。
本書の定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-636-91595-2　C0093
©2016 by Hinata Ougi, YAMAHA MUSIC MEDIA CORPORATION
Printed in Japan

CamScannerでスキャン